

宮崎県立西都原考古博物館 研究紀要

第2号

BULLETIN
Saitobaru Archaeological Museum
of Miyazaki Prefecture

Vol.2

-
- 北郷泰道
再論・南境の民の墓制 ①
-
- 東 憲章・岡本武憲・柄本久子
宮崎県日南市風田に所在する狐塚古墳の出土遺物 ⑬
-
- 二宮満夫
宮崎県出土の滑石製石鍋 ⑳
-
- 鶴田裕一
景行天皇の九州巡狩について ㉓
-
- 高橋由香・竹中正巳
えびの市千人塚供養塔に納められた
地下式横穴墓出土人骨 ㉔
-
- 置田雅昭 他
地下(竪坑)式横穴墓と墳丘の相関関係 ㉕
-

2006.3

宮崎県立西都原考古博物館
Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture



宮崎県日南市風田に所在する狐塚古墳の出土遺物



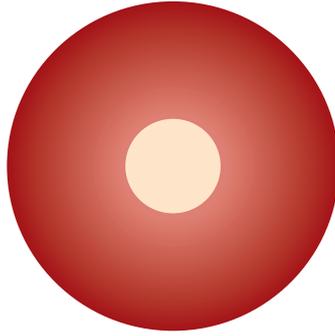
西都原古墳群酒元ノ上地区におけるレーダ調査

「発掘せずに地下の情報を得る」方法の一つとして地中レーダ探査法がある。この方法は原理的には魚群探知機と同じようなもので、地表の送信アンテナから電磁波を発信し、土質や埋蔵物の材質、空洞による異なった反射波を受信アンテナで捉え、地下の様子を知ろうとするものである。特に、横穴墓や甕棺墓などのように空洞部をもつものは違いが分かりやすく、レーダ探査が有効である。得られるデータの精度を高めるためには、走査線を多く設定しなければならず、送受信アンテナの操作は重労働である。送信機と受信機が独立したジオ・レーダ1型機による探査。

受信したデータはケーブルで繋がれたモニターに表示される。波形の異常をどのように解釈するかがポイントである。電波を地中へ向けて放射すると、そのエネルギーの40%ほどは地表面で反射されるが、残りの電波は地中に入り、再び地上に戻ってくる。この戻ってきた電波を順番に並べ、色を付けたり白黒の濃淡として表すと、あたかも地層断面のような画像が得られる。これを観察することにより、地下の様子すなわち遺構や遺物の存在を推定する。酒元ノ上地区のレーダ探査では、横穴墓の空洞部が碗を伏せたような形としてモニター画面に映し出された。



西都原古墳群酒元ノ上地区におけるレーダ探査



Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture



宮崎県立西都原考古博物館 シンボルマーク

このシンボルマークは、さまざまな「対比」を表しています。

「●」と「■」、赤と青という究極のシルエットを対峙させる構図を基本とします。

二つのシルエットの対比により、見る人それぞれのイメージ世界の対比と交感を象徴しています。

「生と死」「大地と大空」「太陽と海」
「光と影」「北と南」「東と西」
「高塚古墳と地下式横穴墓」「中央と辺境」
「畿内社会と南九州社会」

再論・南境の民の墓制

地下式横穴墓研究の現在

北郷 泰道

1 「南境の民の墓制」のその後

地下式横穴墓世界の構造的な理解と全体像を「南境の民の墓制」(北郷 1986)としてまとめたのは、すでに20年前のことになる。その後、10年程して「武装した女性たち」(北郷 1994a)で、地下式横穴墓を対象として女性被葬者と武器副葬の関係について論じた。その10年の間に、地下式横穴墓の起源論に寄与しうる新たな調査事例が加わったものの、全体像の理解については大きな変更の必要性を感じなかったため、前後してまとめた「クマツ・ハヤトの墓制」(北郷 1995)では再構成に留め、その一部は『熊襲・隼人の原像』(北郷 1994b)に掲載するなどしている。

それからさらに10年余り、甲冑・鉄鏃・須恵器などの副葬品の編年観を整理する中から、地下式横穴墓の年代観・編年観などについて幾つかの見解が公にされてきた。また、近年では地下式横穴墓の終末期について貴重な調査例が蓄積されると共に、同時に分布圏についても再考を求める調査例が加わった。

南九州の古墳時代を論じる上では、避けがたく地下式横穴墓について大なり小なり触れることになるが、その後は中心的に論じることがなかったため、そうした蓄積を踏まえ、昨年刊行した『西都原古墳群』(北郷 2005)では「地下式横穴墓の世界」とする項目を立て、その時点での認識を概観した。しかし、そこでは十分に論じることが出来なかった部分を中心に、本稿では先のこのような論考以降得られた史資料や新知見を整理し、いまだ集落との相関を構造的に論じる資料に恵まれていないが、現時点での地下式横穴墓の世界の理解について整理することにした。

なお、本論に入る前に、近年の遺跡名の付け方について、若干整理しておきたい。地下式横穴墓の遺跡名は、通有の遺跡名を定めるのと同じく、基本的には位置を特定するために適切な小字名を取り命名される。しかし、特に内陸部において「群」として把握した場合、小字の範囲を超える事例が多く認められるようになった。例えば、日守(高原町)と仮屋尾(都城市旧高崎町)は、小字域はもとより町域も越え、さらに道路によって分断されていても、同一台地面に所在する一群として理解される。また従来、平松・杉ノ原などと命名された地下式横穴墓を「群」として認定する場合、島内地下式横穴墓群(えびの市)として、12号まで通し番号で整理を試みたのは、小字域が必ずしも適切に、群としての把握と整合しないためであった(北郷 1980)。島内は、その後もより密度の濃い群として、調査事例が13号から追加されている。

こうしたことから、最も新しい集成である『九州の横穴墓と地下式横穴墓』(九州前方後円墳研究会 2001)でも、小さな括りでの過去の調査の遺跡名を、大きな括りとして整理されている。だが、一覽で新旧が割り振られているが、すべてが適切であるかは課題を残していると考える。馴染みのある遺跡名と、新たな通し番号で付けられた遺跡名とが、いたずらに個人的かつ安易に統廃合されるならば、

混乱を引き起こしかねない危険性もある。より良く基礎的な成果の蓄積が共有化されるためにも、学史的な経緯を踏まえた整理と、その後の継承への手立てが必要であろう。

本稿では、その意味から『九州の横穴墓と地下式横穴墓』の整理を尊重し採用するが、学史的に認識され、馴染みのある遺跡名の方が当該地下式横穴墓を想起しやすいこともあるため、括弧書きで旧遺跡名や旧番号等を併記している。

2 分布圏の拡大あるいは拡散

分布圏については、古くは宮崎県の一ツ瀬川以南から鹿児島県の大隅半島の範囲として、大きく捉えられていた。その内、国分市までを範囲としていたものは、地下式横穴墓との遺構的判断が否定され消去されることになった(上村 1982)。その一方で、宮崎県内では1984(昭和59)年、一ツ瀬川南岸から北岸の新田原古墳群(新富町)の一角である蔵園まで広がることが確認され、西の広がりについても1985(昭和60)年から1986(昭和61)年にかけて、人吉盆地の一角の天道ヶ尾で地下式横穴墓が確認され、熊本県の一部へと広がることになった。これが「南境の民の墓制」の段階での分布圏に関する知見であった。

そして2001(平成13)年、小丸川南岸にあたる下耳切第3遺跡(高鍋町)において確実な地下式横穴墓が確認され、一ツ瀬川流域から河川としては小丸川流域まで北上した。ただし、古い段階での『全国遺跡地図(宮崎県)』(文化財保護委員会 1968)には、小丸川北岸に位置する持田古墳群(高鍋町)の一角に「地下式横穴墓」とする遺構の存在が記述されているが、これについては現在でも確証を得ることができない。従って、地理学的な見地から緯度としては、従来から北限とされた西都原古墳群と大きくは変わらないものの、現在の時点で確実な資料としては、小丸川南岸とするのが妥当である。

こうした地下式横穴墓の世界は、次のように大きく5つの地域に分かつことができる。図で示す際、範囲を線引きして括るよりは、ドットのみの方が、河川流域及び平野や盆地を巡るように分布する様子を捉えることができると思われるので、そのように図示することにした(図1)。

第 地域は、大淀川中・下流域及び一ツ瀬川中・下流域を中心とする宮崎平野とその周辺地域で、西都市・宮崎市(旧田野町・旧高岡町を含む)国富町・綾町に広がり、雀ヶ野(都城市・旧高城町、図1-2)を西の端とする。これに下耳切第3(高鍋町、図1-1)が加わることになった。この地域は、前方後円墳と長大な妻入り型地下式横穴墓の存在が顕著である。

第 地域は、大淀川上流域の北の支流流域を中心とする小林・野尻盆地の展開する地域で、都城市の一部(旧高崎町の北部)・高原町・野尻町・小林市(旧須木村を含む)である。上ノ原(図1-3)を含み、尾中原(図1-4)を境として、次の第 地域と区別するのは、家形を強く意識した装飾性の高い平入り型地下式横穴墓がみられるなど、玄室構造に独自性が見られるからである。

第 地域は、西行する川内川上流域を中心とするえびの・大口盆地の展開する地域で、宮崎県側はえびの市、鹿児島県側は大口市・菱刈町・湧水町(旧吉松町・旧栗野町)などである。これに天道ヶ尾(熊本県人吉市、図1-5)が加わることになる。なお、島内(図1-6)を境として、以西は鹿児島県である。この地域は、竪坑上部板石閉塞の特殊な平入り型地下式横穴墓とともに、地下式板石

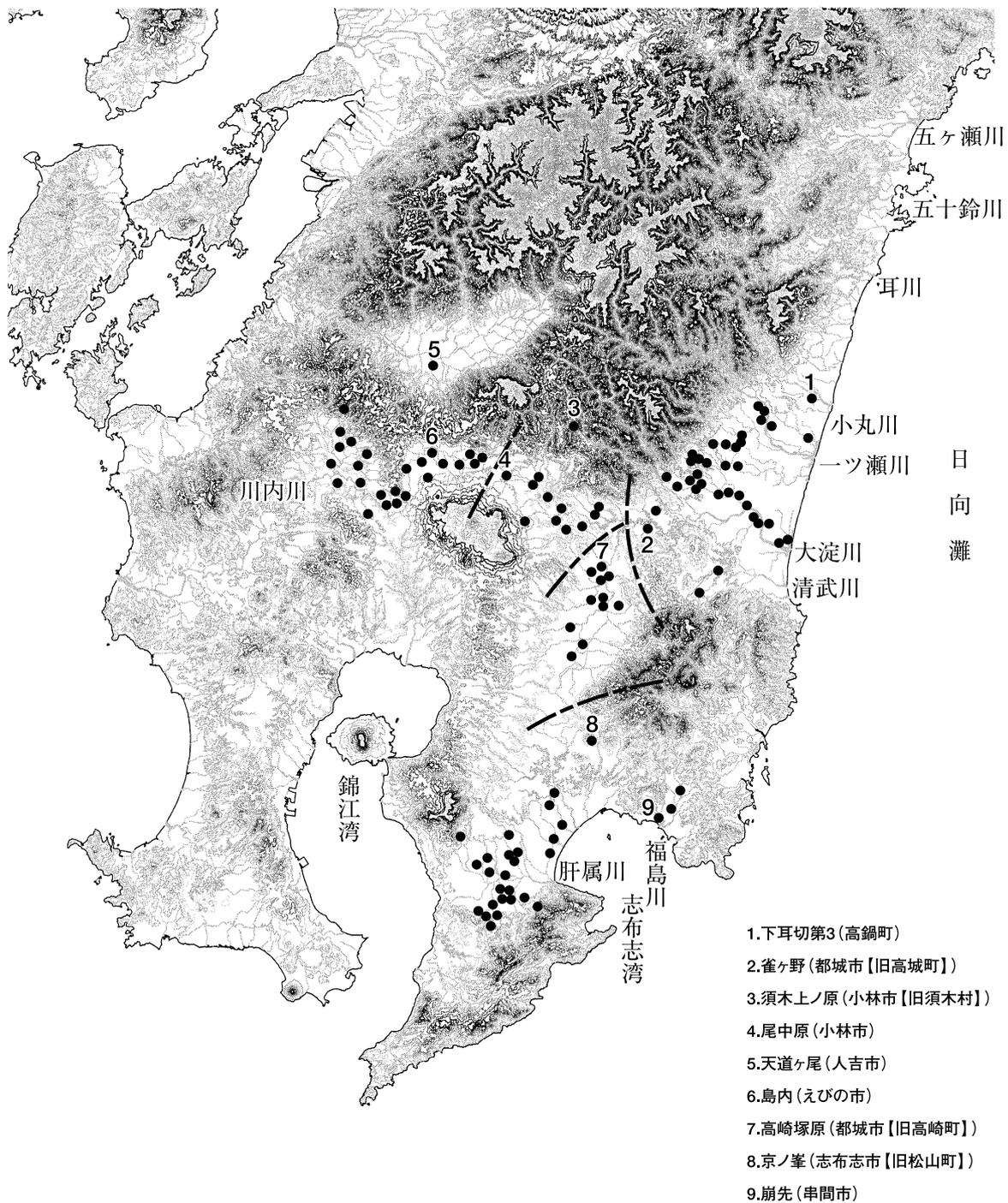


図1 地下式横穴墓分布図

積石室墓の存在が顕著である。

第 地域は、大淀川流域の南の支流流域を中心とする都城盆地を中心とした地域で、高崎塚原（図1 - 7）以南の都城市（旧高崎町の南部・旧高城町を含む）である。この地域では、盆地北部に限定されているが前方後円墳の存在が注目され、妻入り型地下式横穴墓がみられる。

第 地域は、肝属川流域を中心とする大隅半島肝属平野とその周辺地域で、京ノ峰（図1 - 8）以南の鹿児島県鹿屋市（旧串良町・吾平町を含む）・大崎町・志布志市の一部（旧松山町・旧有明町）・肝付町の一部（旧高山町）などで、これに崩先（図1 - 9）を含む福島川流域の宮崎県串間市が加わ

る。この地域では、前方後円墳の南限であると共に、軽石製石棺を持ち込む妻入り型地下式横穴墓に特色が見られる。

3 起源についての新たな資料

『熊襲・隼人の原像』の時点での地下式横穴墓成立に関する認識は、次のとおりであった。

5世紀初めの横穴式石室導入に伴う竪穴系から横穴系への変遷の中で、「構築される埋葬施設」に対して「掘り抜く埋葬施設（北九州の横穴墓・南九州の地下式横穴墓）」が成立した。

地下式横穴墓の成立は、時期的には5世紀後葉の横穴墓に一步先んじ、遅く見積もっても5世紀中葉、またより古い可能性も残されている。

地下式横穴墓の成立は、内陸部の平入り型にあり、従来言われているように平野部の妻入り型に比して新しいものではない。

平入り型地下式横穴墓は、地下式板石積石室墓と「横口式土壙墓」の影響下に、幾つかの段階をはさんで内陸部に発生した。

妻入り型地下式横穴墓は、高塚古墳の制約を受け、石室構造を強く意識した中で平野部において成立した。

いずれの場合も多面的な影響下に成立しており、横穴墓と同様、単一な一元的発生と波及を指摘することはできない。

起源については、かつては平野部の長大な妻入り型を初現として、内陸部の平入り型へと伝播するとの考え方が多くを占めていた。それに対して、副葬品の年代観から概観する限り大きな年代差を見出すことは難しく、少なくとも並行的な年代を基本として、内陸部の平入り型が先行して存在する可能性を示唆した。

そうした中、内陸部に所在する小木原遺跡群蔵地区（えびの市）において、地下式横穴墓と混在して、注目すべき形状を持つ土壙墓が検出された（永友ほか 1990）。「横口式土壙墓」と仮称されたその遺構は、地下式横穴墓の構造と共通する要素を見出すことが出来るものであった。4世紀代の年代を与えられるこの遺構は、地下式横穴墓の定型化までには、幾段階かの移行形態を想定する必要があるものの、祖形的な位置付けを獲得するものになった。ただし、土壙の床面が横にスライドする構造の土壙墓は、川床遺跡（新富町）においても確認されており、この種の遺構との関係も詰めていく必要があると思われる。いずれにしても、時期的には平野部に対して内陸部が先行する見解は、大方の支持を得ることが出来たと思う。

鉄鏃の編年について、長頸鏃を典型として長身化への大きな流れを基本として、特に柳葉形の時期をどのように設定するかが一つの焦点であるが、弥生時代終末に起源して古墳時代の早い段階に位置づけられるとして、4世紀末から5世紀初頭頃を上限と設定した。この和田理啓氏の成果は、まだ幾つかの課題が残っているとは言え、地下式横穴墓の編年観の再考に大きく寄与した（和田 2001）。次は、特に南九州に顕著な形式として注目される圭頭形の位置付けと、長頸鏃の普及の初現を何時に見るかが焦点となるであろう。

編年としては精緻を極めてきた須恵器は、時間の物差しとして有効である。岡崎古墳群での成果（橋本 2005a・b）は、TK73型式とされる須恵器大甕・樽形甕が確認され、地下式横穴墓の編年観は基より、分布圏内での大隅半島の位置付けについても再考を求める貴重な調査成果を上げている。また、先の和田氏の成果を踏まえ、あらためて指摘されたのは、高田原56-1号地下式横穴墓（国富町）の玄室内に持ち込まれた須恵器の甕をTK73型式とし、北部九州における横穴墓の出現に地下式横穴墓が先立ち、その影響下に横穴墓が成立したとの認識である。すなわち、4世紀末に最初期の横穴式石室が導入され、5世紀初頭にその影響下に地下式横穴墓が成立し、5世紀中頃から後半にかけて北部及び中部九州において横穴墓が成立したとしている（田代 2005）。

こうした田代健二氏の検証は、須恵器を中心とした資料の検討に基づき、初期横穴式石室・横穴墓、それに地下式横穴墓の竪坑・羨道・玄室に相当する全体構造の相互の周到的な突き合わせは評価できる。しかし、時系列的に先後に並ぶとしても、そのことは直截に一元的伝播・波及を意味してはいない。相互に影響し合うことなく多元的に事象の発生・成立はあり得るからである。同時多発ではなく、時間差を持って生起する事象でも、それぞれ独立して個別に発生することは可能である。このことは、実証的意味合いより世界観・歴史観を問われることである。

ただし、実証的検証を必要とする意味からすると、空間的空白を埋めることができるのかという問いに集約できる。具体的には、南九州内陸部の地下式横穴墓と北九州周防灘沿岸部の横穴墓との間の地理的空白は、どのように埋められるのであろうか。山間部を経由するのか、平野部を経由し、海上を経由するものか、飛び地論を用いるとしてもそのルートには現在のところ手掛かりがない。理論的には時間と空間は相互に置き換えることが可能であるが、その時系列的な並びと空間的な非連続性という、両者の不整合は解かなければならない課題である（図2）。

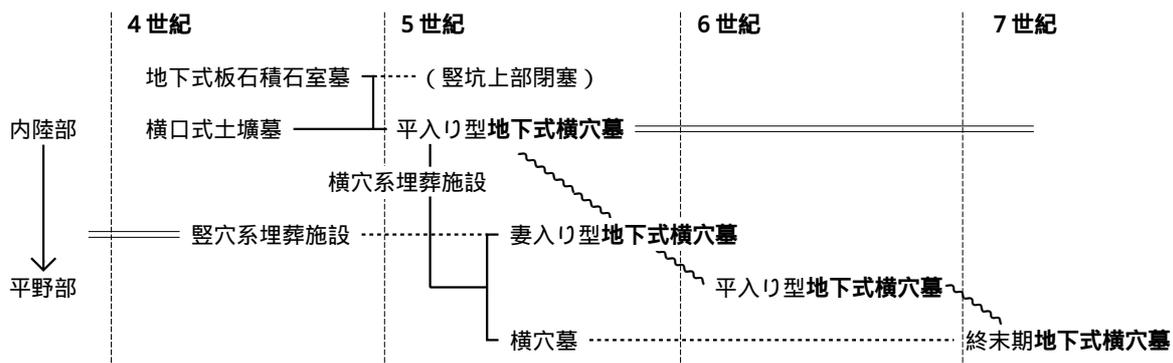


図2 地下式横穴墓変遷概念図

付け加えれば、2004（平成16）年に韓国忠清南道公州市の丹芝里遺跡で確認された横穴墓によって、それまで断片的であった韓国での横穴墓の存在も確実となったが、地下式横穴墓と横穴墓の成立については、この半島との関係も無視は出来ないであろう。

4 平野部と内陸部の交流と変遷

平野部の妻入り型と内陸部の平入り型の変遷についても、起源で触れたように、地下式横穴墓の初

現を内陸部に求めることによって、妻入り型から平入り型へ、といった変遷過程は否定されることになった。また、編年観の変更により、家形からドーム形へというような単純な退化過程を認めることにも問題が生じるようになった。

しかし、既に指摘したように、長大な妻入り型が横穴式石室など高塚古墳系埋葬施設の影響を受け、竪坑上部閉塞の平入り型が地下式板石積石室墓の影響下に成立したことなど、先行して存在する墓制に引きずられる形で変容を遂げるという図式については、修正する必要はないであろう。

新たな編年観の変更を参考として、玄室構造を「縦形」・「横形」と呼称する提案もある。確かに、玄室の短辺・長辺の何れに羨道が接続するかを判断根拠とする時、必ずしも短辺＝妻側・長辺＝平側ではない事や家形を形作らない場合もあるので、同種の遺構の普遍的呼称として、この提案は一定の有効性を持つ。しかし、一方で「妻入り」・「平入り」との呼称は学史的な位置付けを評価すべきであろう。家形を形作らない地下式横穴墓も存在するが、地下式横穴墓世界の死後観を中心とした世界観を意味しているため、玄室構造を家形に形作ることが大きな特徴であり、家屋構造を基にして妻入り・平入りと呼称することの妥当性は、今後も有効性を持つであろう。

このような成果から、高田原地下式横穴墓（国富町）の早い段階での完成された家屋構造を模した玄室の位置付けは、ことに注意されるであろう。この場合、現在宮崎市の一角となった旧国富町の地政学的位置付けが問題となる。

国富町は平野部周辺に位置するが、沖積地から洪積台地へと展開する地形を含んでおり、主要な古墳群・地下式横穴墓群はより内陸部を志向した台地に展開している。西都原古墳群（西都市）が平野部から内陸部への入口とすれば、本庄古墳群（旧国富町）は内陸部から平野部への入口とでも言うべき位置を持つ。すなわち、西都原は軸足を平野部に置くのに対して、本庄は軸足を内陸部に置くと言っても良いかも知れない。その違いが、早い段階での平入り型の登場を可能にしたと考えられる。それと対照的に、西都原、下北方（宮崎市）での妻入り型の成立は、平野部に展開する前方後円墳を盟主とする高塚古墳の影響を大きくしているのだと考えることができる。

平野部と内陸部の地下式横穴墓にみられる埋葬思想の違いは、副葬品の在り方に置いても見て取ることができる。須恵器副葬の有無に加えて、甲冑の副葬位置等についての指摘（吉村 2004）によれば、内陸部の平入り型では短甲は立位での副葬が基本となるのに対して、平野部妻入り型では横臥が主流で粘土槨系の副葬思想が踏襲されている。また、前者が複数埋葬であるのに対して、後者は単体埋葬である点にも、前者が横穴式石室の影響下に、後者が粘土槨の影響下に埋葬思想を継承しているとする指摘は、高塚古墳系の埋葬方法の二つ要素との関係から、遺構論の上でも有効なものであろう。

一方、貝輪の副葬の在り方を見ると、内陸部に圧倒的に集中している（表2）。玉類に代わるものとして貝輪が採用されたと見られるが、平野部周辺としては、国富町・綾町・西都市といった平野部の中でも内陸部との境界地域に貝輪の出土が見られる点は重要である。また、大隅半島肝属平野部の地下式横穴墓からの出土も注目される。この南九州における「貝の道」の一つは、「東側経路」としては、肝属平野から内陸の道を経由して都城盆地に至る経路が認められるであろう。しかし、地下式横穴墓の分布圏からは肝属平野から都城盆地までの間には、現在までのところ曾於市（旧財部町、旧末吉町、

旧大隅町)に地下式横穴墓が見られないことから、旧松山町が中継する可能性はあるが地理的な断絶が認められる。さらに、都城盆地とえびの盆地を結ぶ経路も想定され、この内陸部に於ける経路は、もう一つの弥生時代を踏襲する「西側経路」を通じて、えびの盆地へと至る経路が想定されて良いであろう。しかしこの中で、平野部高塚古墳から出土する貝輪は、あくまでの内陸部の都城盆地を經由する経路によって将来されたもので、東側経路としても、東側の海上を經由して宮崎平野に至る経路ではないであろう。何故なら、この貝の流通を掌握し、支配したのは、他ならぬ「諸県君」と考えられるからである。

5 「武装した女性たち」と社会構造

性別を元に先験的に男女差と副葬品差を図式的に当てはめることについては、既に指摘したように妥当性を欠くと思われるし、いわゆるジェンダーの問題への視点を欠くものとなるであろう。しかし、女性への武器副葬については、社会構成的に生前の在り方をどのように反映するものであるのかについては、慎重な見極めが必要である。

ここでの武器とは、鉄剣・直刀・鉄鏃(骨鏃を含む)などを示している。刀子は、鉋や斧などと工具に含み、ちなみに、武具は甲冑類、農具は鋤・鍬類である。

さきの論文では、市の瀬(国富町)、日守(高原町)、上ノ原(須木村)、灰塚(えびの市)、立切(高原町)の各地下式横穴墓群を対象として取り上げた。古い年次の調査では、被葬人骨と副葬品との関係が混乱している報告も見られることから、その時点で良く被葬人骨と副葬品の関係を捉えていると考えられるものを取り上げた。なおかつ、性別の判別や取り上げの混乱などで、例えば性別が逆転したとしても、いずれにしても女性に武器が伴う事態には変わらない事例を確認することが出来たことから、女性への武器副葬は広く概念化できると判断した。

今回は、その後まとまった調査例となった5世紀後半から7世紀前半までに継続的に築造された島内地下式横穴墓群を取り上げて検討を行う。島内では、これまで1979(昭和54)年までに断続的に調査・確認された12基に加えて、100基を超える地下式横穴墓が発掘調査されている。この内、1989(平成元)年から2000(平成12)年までの間の調査は、多くの甲冑類の出土でことに注目されたが、被葬人骨の埋葬順序と副葬品の共伴関係が良く整理され、何らかの形で被葬人骨が遺存した69基を取り上げる。ただし、同報告書内で被葬人骨体数など、記述や一覧表などに違いが見られるため、ここでは「表4 島内地下式横穴墓群被葬者一覧」を基にして数え上げた数字を使用する(表1)。

ただし69基中、単体・複数埋葬に関わらず被葬人骨の性別の判別が出来なかったのは22基(32%)で、被葬人骨の性別が1体でも判別できた地下式横穴墓は47基(68%)である。そしてこの47基の内、女性への武器副葬が確認できた地下式横穴墓は13基(29%)である。

また、性別の判別できた被葬体数で見ると、女性は43体、男性は47体である。ここから個別に武器副葬の在り方を確認することになるが、2基の地下式横穴墓で、共に男女の被葬が確認されているものの、いずれに武器が帰属するか判断できない例がある。このため、各々男女2体を引いた女性41体、男性45体を対象に検討する。武器副葬の在り方を確認すると、女性に武器が副葬される例は15体(37

表1 島内地下式横穴墓群にみる女性武器副葬一覧

号数	被葬順序	性別	年齢	副葬品
16	1	女性	熟～老年	鉄鏃 3
	2	男性	熟年	鉄鏃 5
20	1	不明	不明	なし
	2	女性	若年	刀子 1
	3	男性	若年	刀子 1
	4	男性	若年	鉄鏃 2、骨鏃19
	5	女性	壮年	鉄剣 1、鉄鏃11、刀子 1
21	1	男性	壮～熟年	短甲 1、冑 1、蛇行剣 1、鉄矛 1、鉄鏃 2、刀子 2、鉄斧 1、鉈 1
	2	男性	壮年	蛇行剣 1、刀子 1
	3	女性	壮年	蛇行剣 1、鉄鏃16、刀子 1
28	1	女性	熟年	鉄剣 1、刀子 2
	2	男性	壮年	なし
30	1	女性	壮年	鉄鏃 1、刀子 1
35	1	女性	熟年	鉄鏃 4、貝釧 8
	2	不明	壮年	なし
	3	不明	幼児	鉄剣 1、鉄鏃 3
	4	男性？	壮年	なし
39	1	不明	小児	なし
	2	男性	壮年	刀子 1
	3	女性	壮年	鉄鏃 6、骨鏃 4～8
42	1	不明	小児	直刀 1、鉄鏃 7、刀子 4、鑷子 1
	2	女性	若年	
	3	不明	不明	
50	1？	不明	不明	なし
	2？	不明	壮年	なし
	3？	不明	壮年	鉄鏃 2
	4？	不明	小児	鉄剣 1、鉄鏃 1、刀子 1
	5？	不明	熟年	蛇行剣 1、鉈 1
	6？	女性	熟年	鉄鏃 4
52	1	女性	壮年	なし
	2	女性	若年	なし
	3	女性	壮年	骨鏃 3
58	1	女性	若年	鉄鏃 5、石枕
	2	男性	熟年	鉄矛
63	1	女性	壮年	なし
	2	男性	壮年	鉄鏃 2
	3	女性	若年	鉄剣 1、鉄鏃14、鉈 1
	4	女性	壮年	鉄鏃 1
	5	男性	壮年	直刀 1
	6	女性	熟年	骨鏃27、刀子 1
	7	不明	小児？	骨鏃 6？、刀子 1
97	1	不明	壮年	鉄鏃 2
	2	男性	壮年	
	3	女性	熟年	鉄鏃 2

例)であり、逆に、男性に武器が副葬されない例は13体(28例)である。すなわち、女性の場合は3体に1体、男性の場合は3体に2体は武器副葬が見られることになる。なお、甲冑を保有するのはすべて男性である。

ちなみに、武器副葬の女性の初葬例は5体(33例)である。また、幼・小児骨は、すべて性別不明であるが17体確認され、この内5体(29例)に武器が副葬されている。なお、玉類や貝輪など装身具を伴う被葬人骨の性別は、女性3体、男性2体である。

報告書では、「一般的には男性に武器・武具が、女性に刀子や装身具が副葬・着装されている。数例の例外は、上流階層の墳墓に埋葬された女性が多い」としているが、ここに指摘したように、このような性別と副葬品の相関には、何の根拠もない。また、「上流階層」とする位置付けも、既に指摘しているように内陸部の地下式横穴墓社会においても「いびつなピラミッド」の階層性を見て取ることができるが、文脈からいけば、女性への武器副葬等を「数例の例外」とし、それが「上流階層」とであると読めるが、「例外」でもないし、複数埋葬の場合の副葬品総体を地下式横穴墓ごとに比較しても、そこに格差を認めることもできないし、「上流」との認識は導き出せない。注目されるのは、21号地下式横穴墓で甲冑と女性を含む3体の被葬人骨に蛇行剣が伴う例と、15号地下式横穴墓で武器副葬は認められないが女性人骨に群内で唯一ガラス小玉61個が伴うこの2例は、集団内で突出した存在を誇示するものと理解できる。

次に、副葬品の組み合わせ関係については、かつての時点と、幾つかの誤認を含み修正したものの、大きく分類を逸脱する調査事例は加わっていない。古墳時代を考える上で現在の行政区域は何らの意味を持たないが、一覧表では、資料確認の利便性を考えて、現在の鹿児島県に属する調査例については「大隅」(肝属平野とその周辺)と「薩摩」(大口盆地とその周辺)と分けて表示している(表2)。

その中で特筆できるのは、甲冑副葬の調査例がえびの盆地(第 地域)で大幅に増加したこと、鏡副葬が内陸部小林盆地(第 地域)で初めて確認されたこと、そして新発見と言うより資料の集成が進んだことによって玉類(貝輪を含む)の副葬が多く確認されるようになったことである。

副葬品の組み合わせにおいて、第 地域は平野部周辺(第 地域)と内陸部(第 地域)の都城盆地であり、前方後円墳・妻入り型地下式横穴墓の分布と共に、高塚古墳の価値体系を踏襲している。それに対して、第 地域は、前方後円墳の存在しない地域であり、異なる価値体系を持っていたと考えている。甲冑と鏡の組み合わせは、平野部に限られ、内陸部には見られない。鏡の副葬は、内陸部では前方後円墳の価値体系を踏襲する都城盆地の築池3号(C-a)を除けば、小木原1号(A-B-a)、東二原2号(C-b)だけである。

内陸部での甲冑の副葬は、えびの市のとりわけ島内に集中する。馬具類の副葬は、久見迫・馬頭に集中する。小木原には、甲冑と馬具の両者の副葬が確認できる。小木原、久見迫、馬頭は隣接した地域で、大きくは一体として理解できるが、詳細な群構造の抽出を検討する必要がある。いずれにしても、甲冑と馬具の副葬は、えびの盆地に濃密に見られ、島内と小木原・久見迫・馬頭は5キロほど隔たった地域であり、2大勢力を形成していたと理解される。両者が特徴的なのは、前者では甲冑が主で、後者は馬具が主であることが見て取れるが、鏡を有することも含めて後者は平野部に近い価値体

表2 副葬品の組み合わせ関係からみた地下式横穴墓

地域\分類	A			
	A		B	
	a	b	a	b
	甲冑・馬具・鏡・玉類	甲冑・x・鏡・玉類	x・馬具・鏡・x	x・馬具・x・玉類
第・・・地域	六野原10号 下北方5号 本庄16号(六日町2号・松原塚南)	西都原4号 六野原8号 本庄15号(六日町1号) 本庄4号(宗仙寺2号・猪塚南)	下北方4号(玉類)	本庄24号(北神ノ原8号) 西都原・国分1号(貝輪) 【大隅】 横間9号(貝輪)
第・・・地域			小木原1号(小木原古墳)	大萩27号(貝輪) 馬頭1号

地域\分類	B		
	a	b	c
	甲冑・馬具・x・x	甲冑・x・x・x	x・馬具・x・x
第・・・地域		本庄6号(宗仙寺4号・本庄小) 六野原1号 木脇塚原1号(西ノ免A号) 【大隅】 菰川	本庄26号(北神ノ原10号) 本庄14号(宗仙寺12号) 本庄29号(十日町1号・猪塚南) 内屋敷2号 西都原1号 西都原3号 牛牧 柿木原2号
第・・・地域	木原6号(3号)	島内3号 島内21号 島内62号 島内76号 島内81号 小木原5号(1号)	久見迫6号 久見迫14号(4004) 久見迫21号(4011) 馬頭1号 馬頭5号 馬頭13号 馬頭14号 島内2号

地域\分類	C				
	a	b	c		
	x・x・鏡・玉類	x・x・鏡・x	x・x・x・玉類		
第・・・地域	本庄12号(宗仙寺10号・本庄小) 大坪1号(貝輪) 市ノ瀬5号 築池3号 【大隅】 神領1号(竜相)(貝輪)	六野原35号 本庄3号(宗仙寺1号)	元地原5号 元地原7号 月中1号 飯盛3号(53-1号) 高山・前田1号 井水1号 市ノ瀬1号(+貝輪) 市ノ瀬2号 市ノ瀬9号 西都原7号(貝輪) 久木野2号 栗須1号	中迫1号(貝輪) 木脇塚原2号(西ノ免1号) 木脇塚原3号(西ノ免2号) 葉子野6号 本庄36号(前の原3号) 本庄32号(東ノ原1号) 六野原14号 六野原28号(A号) 築池2号(鉄釧) 築池7号 築池8号 築池33号	【大隅】 神領5号(貝輪) 塚崎1号 上ノ原3号 上ノ原9号(貝輪) 岡崎2号(貝輪)
第・・・地域		東二原2号	須木・上ノ原9号(+櫛) 日守1号(貝輪) 日守5号(貝輪) 日守8号(貝輪) 日守9号(貝輪) 島内5号(貝輪) 島内7号(貝輪) 島内15号 島内23号(貝輪) 島内26号(貝輪) 島内35号(貝輪) 島内56号(貝輪)	島内89号(貝輪) 島内91号(貝輪) 島内101号(貝輪) 小木原7号(101号)(貝輪) 大萩1号(貝輪) 大萩14号(貝輪・櫛) 大萩24号(貝輪) 大萩27号(貝輪) 大萩34号(貝輪) 立切3号(櫛) 立切35号(+貝輪) 立切60号(貝輪)	立切63号(鉄釧) 立切64号(貝輪) 東二原8号(貝輪) 旭台9号(貝輪) 高崎塚原2号(鉄釧) 原村上2号(鉄釧・貝輪) 原村上4号(貝輪) 原村上6号(貝輪) 【薩摩】 馬場1号(貝輪)

註:(+)は玉類と共に副葬され、その他は玉類に代わって副葬されていることを表す。

系を示す点であろう。

一方、人骨そのものは、直接的に「人」存在に迫りうる貴重な情報を提供してくれる。性別・年齢が先のような副葬品の在り方と重ね合わせることで社会構成に迫りうるだけでなく、在来形質と渡来形質を示す人骨の在り方などは「日本民族」の形成過程を考える上で欠かすことのできない情報を提供するものである。竹中正巳氏により細かな人骨観察が行われ、幾つかの重要な指摘が成されている。生前の生活環境や病歴、個人の履歴を示すものも観察され、人間そのものに接近することができる。島内99-2号人骨にみられる剣による受傷の跡や頭蓋骨陥没骨折などは戦いの実在を示すものであるし、常心原地下式横穴墓でみられた集骨は死後観を示すものでもある。中でも特に注目されるのは、「上顎前歯部舌側面特殊磨耗」と呼ばれる通常の使用では考えられない歯の磨耗で、皮なめしなどを行う際に生じたものとの指摘は、皮革の加工にたずさわる人々の存在を示している。

また、抜歯について、古墳時代の抜歯と認められる事例は、平野部と都城盆地、それに大隅半島の地域であり、内陸部においては認められないとする指摘は重要である（竹中ほか 2005）。つまり、抜歯の分布と前方後円墳及び妻入り型地下式横穴墓の分布は重なり、これまで指摘されてきた平野部と内陸部の渡来系と在地系といった古墳時代人の形質の違いと共に、さらに風習の共有化においても異なる世界であったことを意味しているのである。

加えて遺構論の面から、古墳の墳丘と地下式横穴墓との関係については、円墳のみならず前方後円墳の下に構築される地下式横穴墓の存在も、かつて六野原の再検討によって前方後円墳の下に構築された地下式横穴墓の存在を指摘したのに対して、多くは否定的であったが、2005（平成17）年の生目古墳群の7号墳（前方後円墳）などでも明らかにされたように確実なものとなった。「前方後円墳体制」とも称される社会構造の中で、地下式横穴墓の自立性について再考する必要がある。

6 地下式横穴墓の終末期の様相

地下式横穴墓の終末期を考える上で画期的な調査例となったのは、西都原古墳群の一角酒元ノ上地区で発見された一連の遺構であった。台地上に解析された谷の緩やかな南西向きの傾斜面から、楔形あるいは長二等辺三角形の頂角に当たる部分から階段状に段差が付けられ、底面が広がりながら下降する傾斜面を形成する墓道を掘り込み、その底辺に当たる墓道の奥壁に一つの玄室を穿ち、加えて斜辺に当たる墓道の側壁にももう一つの玄室を穿つことを基本とする遺構である。

この遺構は、基本的には全国に展開する横穴墓と南九州独特の地下式横穴墓との両方の特徴を備えるものであることは容易に理解することが出来た。しかし、どちらを基本とする遺構と理解するかについては、大きく二つの意見に分かれた。一つは、横穴墓の影響を大とする見解、二つは、地下式横穴墓の影響を大とする見解である。だが、翻ってそもそも横穴墓と地下式横穴墓の違いとは本質的に何であったのだろうか。

横穴墓と地下式横穴墓は、共に地中に遺体を納める「玄室」となる空洞の部屋を穿つことを共通の要素とする。細尾根の発達した丘陵地をかかえる地域において「横穴墓」、平坦な「原」の広がる台地をかかえる地域において「地下式横穴墓」が成立した。墓制の基本的発想は、同根である。しかし、

先に触れたように出現期に時間差が認められ、そこに地域的伝統が加わることによって、それぞれ独自の道を歩んだと考えることができる。

そして、古墳時代も終末を迎え、ようやくこの二つの墓制が融合することになる。酒元ノ上の調査以降、堂ヶ島第2遺跡や下耳切第3遺跡、それに過去に調査されていた常心原3号地下式横穴墓も加えるならば、横穴墓の範疇として捉えるよりは、長大な墓道状の竪坑を持つ地下式横穴墓の範疇として捉えられることから「終末期地下式横穴墓」との概念を提案したところである。

(参考文献)

- 上村俊雄 1982 「隼人関係遺跡地名の分布」『日本歴史地図 原始・古代編・下』柏書房
- 九州前方後円墳研究会 2001 『九州の横穴墓と地下式横穴墓』九州前方後円墳研究会
- 竹中正巳ほか 2005 「風習的抜歯の疑われる地下式横穴墓出土人骨の追加例」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第1号 宮崎県立西都原考古博物館
- 田代健二 2005 「横穴墓の成立過程」『古文化談叢』第53集 九州古文化研究会
- 中野和浩ほか 2001 『島内地下式横穴墓群』えびの市埋蔵文化財調査報告書第29集 えびの市教育委員会
- 永友良典ほか 1990 『永田原遺跡・小木原遺跡群蔭地区(A・B地区)・口ノ坪遺跡』えびの市文化財調査報告書第6集 えびの市教育委員会
- 橋本達也 2005a 「大隅串良 岡崎古墳群の発掘調査 - 2002~2004 - 」『九前研通信』16 九州前方後円墳研究会
- 橋本達也 2005b 『大隅串良 岡崎古墳群 - 発掘調査概報 - 』鹿児島大学総合研究博物館
- 文化財保護委員会 1968 『全国遺跡地図(宮崎県)』国土地理協会
- 北郷泰道 1980 「平松地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第22集 宮崎県教育委員会
- 北郷泰道 1986 「南境の民の墓制」『えとのす』31 新日本教育図書
- 北郷泰道 1994a 「武装した女性たち - 古墳時代の軍事編成についての覚書 - 」『考古学研究』第40巻第4号 考古学研究会
- 北郷泰道 1994b 『熊襲・隼人の原像』吉川弘文館
- 北郷泰道 1995 「クマソ・ハヤトの墓制」『古代王権と交流』8 名著出版
- 北郷泰道 2005 『西都原古墳群』同成社
- 吉村和昭 2003 「地下式横穴墓出土の甲冑」『古代近畿と物流の考古学』学生社
- 吉村和昭 2004 「中期古墳の副葬品配置」『考古資料大観』10 小学館
- 和田理啓 2001 「日向の地下式横穴」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第 分冊 九州前方後円墳研究会

宮崎県日南市風田に所在する 狐塚古墳の出土遺物

東 憲章、岡本 武憲、柄本 久子

1 はじめに

宮崎県立西都原考古博物館では、開館当初から県南地区の代表的古墳として、そして県内最大規模の横穴式石室を有する古墳として、日南市狐塚古墳について紹介し、その出土遺物を展示している。その豊富な副葬品は、多くの見学者を惹きつけているが、これまでに古墳や遺物についての詳細な報告や図面が公表されておらず、概要報告に一部が紹介されているに過ぎなかった。貴重な資料でありながら、学術資料としては十分に活用されているとは言えない状況を多少でも改善すべく、遺物の再実測を行い報告するものである。

2 狐塚古墳について

(1) 立地

宮崎平野とは日南山塊で隔たれた日南市の平野部北端、すなわち、宮崎平野部から海岸線を南下して、日南市の平野部入り口に位置する(図1)。狐塚古墳の築造された場所は、南北約4kmの風田平山海岸の北端に近い風田川河口右岸の砂丘上で、現在では、海岸線から約180m入った標高約9mの地点である。海岸側には比高差約5mの砂丘が南北に延びており、狐塚古墳から直接に海を望むことはできない。古墳周辺は病院敷地となっており、古墳自体は施設建物に囲まれているが、明治時代の記録では、古墳に接して社殿(大將軍社他)があったことを記している。

狐塚古墳の東北東約1.2kmの海岸に面した丘陵上には、県指定史跡「東郷村古墳」が立地している。竪穴式石室とみられる主体部が露出しているが、具体的な規模、構造、築造時期等は不明である。

また、狐塚古墳から南西へ3.3kmの油津には、油津湾を望む丘陵上に油津山上古墳が立地していた(現在消滅)。幕末に飢肥藩の砲台建設に伴って発掘され、竪穴式石室内から銅鏡(画文帯神獸鏡)や玉類等が発見されている。

(2) 調査に至る経過

狐塚古墳については、宮崎県文書センター及び宮崎県文化財課に次のような記録が保存されている。

明治8年9月15日 「風田村ニテ奇物掘出シ候二付御届」

区長高山伝蔵、戸長川崎栄造から宮崎県参事上村行徴へ

明治8年10月24日 「古塚ヨリ曲玉類掘出候二付御届」

宮崎県参事上村行徴から教部大輔穴戸?へ

明治30年6月8日 「寄附願」「採掘之顛末」

油津町鈴木進から宮崎県知事千田貞暁へ

大正2年4月24日 「古墳古蹟調査ノ件ニ付具申書」

東郷村長郡司萬三郎から宮崎県知事有吉忠一へ

これらの記録を総合すると、明治5年頃に狐塚周辺の雑木を伐採して家を立てたところ、「家屋鳴動怪火出現等」「家畜斃死」など災いがあったので、その怪異の真相を解明すべく、明治8年2月に、大藤村土族稲沢棟等三四名が区長の許可を得て発掘した。出土品については、明治8年の届出には図入りで、曲玉1、筒玉大小5(但水晶製六角)土器3とある。なお、明治30年の寄附願には、六角玉大小3個、曲玉1個、小玉数個、金ノ小片数個、大正2年の上申書では、曲玉大小5～6個、管玉六角形七分ノモノ3個、小ナル玉拾数個、陶器2個とあり、それぞれの内容、個数にわずかな違いがある。

稲沢棟の調書(大正2年)には、明治8年の発掘中に雷雨が激しくなり、出土品を飢肥儒者平部嶠南翁に鑑定してもらったところ、狐塚が山陵であると言われて恐ろしくなり、現品を県庁に納付したとある。平部嶠南の『六鄰荘日誌』明治八年九月条にも同様の記述がある。しかしながら、『宮崎県史蹟調査第六輯 南那珂之部』(昭和2年)では、出土品に関して「曲玉は初め長倉某所有せしを、後平山神社の神職鈴木氏に送り、鈴木氏は其後澁谷元武本郡長たりし際、縣命に依り、宮崎徴古館に出品したり」と記している。明治30年の寄附願はこれを示している。大正2年の具申書は、当時、有吉知事が宮崎県の古墳古蹟調査のために招聘していた鳥居龍蔵博士に、東郷村内の古墳も調査してもらいたい旨、狐塚古墳の事例を引き合いに県に具申した文書である。結局、鳥居による調査は実施されなかったが、昭和12年7月2日には県指定を受けている。この間(大正年間か)、地元の古老談によると、再度発掘が行われ、陶器2箱の出土が伝えられている。

その後、国立療養所日南病院が同地へ移転するに伴い、昭和37年1月30日に県指定解除、昭和53年8月には施設建設によって羨道の一部を破壊している。

平成元年、日南市内遺跡詳細分布調査で墳丘の測量調査を実施したが、なお詳細が不明であったことから、平成5年から6年にかけて、石室内の発掘調査を実施した。

調査の成果により、県内最大規模の横穴式石室を有する終末期古墳であることが判明し、平成9年6月26日に市指定文化財、平成12年9月12日には県指定文化財に復した。

なお、明治30年の寄附願には、風田浜が豊玉姫が海亀に乗って上陸した場所で、古くから海亀を捕ることを禁じていること、さらに、狐塚古墳が豊玉姫の御陵であるとの地元伝承を記している。

(3) 調査の状況

墳形：砂丘上に砂で盛り土されており、封土の流失が著しいため墳形の確認は困難であるが、横穴式石室の規模や出土品の年代から、円墳もしくは方墳である可能性が高い。現状では長径約20m、短径約15m、高さ約2mを計る。

主体部：横穴式石室を主体部としており、海側である東南方向に開口している。調査前には、天井石とみられる巨石が玄室から離れて西側に移動していたほか、石室壁石が露出しており、原位置を留めている天井石は認められなかった。調査によって表土を剥いだ結果、玄室奥壁に最も近い部分の天井石は失われており(前記の石室西側に移されたと見られる)、その他の天井石の多くは割れて石室内に転落していた。しかしながら、昭和2年の『宮崎県史蹟調査第六輯 南那珂之部』の「東郷村風

田古墳」では、石室の平面図及側壁図とともに、石室の長径一丈六尺、短径前部七尺二寸、後部六尺八寸とあり、天井石が内部に転落している状況を伺わせる記述はない。また、調査の結果、玄室床面には3カ所の大きな攪乱（うち二カ所は明治8年等の発掘によって礫床を欠損した部分）が認められたことから、昭和2年までは、玄室の天井石の大半は原位置にあったと考えられ、その後全ての天井石が割れて崩落したと思われる。

石室の残存長は9.3mで、玄室は床面で奥行き5.7m、幅2.7m、高さ2m、羨道は昭和53年に開口部が破壊されたが、残存長2.7m、幅1.6m、高さ1.6mであることが判明した。石材は、大きな砂岩の転石もしくは割石で、やや持ち送り気味に6段積んでおり、各段はそれぞれほぼ同じ高さになっている。玄室奥壁は3段目の高さまで一枚岩となっている。羨道から玄室へは両袖となり、左右の袖に4段目と同じ高さの角柱を立てている。玄室床は円礫が敷き詰められていたと見られるが、明治8年の発掘等で大きく失われている。わずかに残された両壁中央部付近の礫床上から今回報告する遺物が出土した。羨道内も天井石が転落しており、それらを取り除くと、砂の床面に棺台とみられる4個の転石が配置され、周辺に須恵器や金環等が散在していた。

なお、奥壁近くの床面から少し上に、平安時代中期の製塩炉を検出した。明治8年の発掘状況を記した記録の中に、「土砂ヲ掘ルコト三尺位ニテ朱ノ如キ赤土半荷位ヲ堀出ソレヨリ」（「古墳古蹟調査ノ件ニ付具申書」）とあるが、「朱ノ如キ赤土」は焼土と思われ、複数の製塩炉があったのかもしれない。製塩炉に近い奥壁周辺の埋土中には多くの製塩土器片が出土した。

3 狐塚古墳の遺物について（図2～4）

狐塚古墳石室内からは、古墳時代以外に古代の布痕土器が出土しているが、これは石室を利用した土器製塩が行われていたものと推測される。

ここでは、古墳時代の遺物（須恵器、銅碗、馬具、鉄器、耳環、玉類）について報告する。

（1）須恵器

須恵器は、蓋坏、平瓶、高坏、甗が出土している。個々の法量、調整、胎土の特徴等については表1を参照されたい。

蓋坏については、坏身に立上りを有するものと、逆転し蓋にかえりを有するものが混在する。1～6、21は、蓋の口径10～12cm台、坏身の口径9～10cm台と小さく、全体として丸みを帯びる。坏身口縁の立上りは短く内傾し、底部外面は切りっぱなしである。蓋も外面は切りっぱなしで仕上げナデは見られない。

7～20は、蓋にかえりを持ち、宝珠つまみを有する。坏身の多くは底部外面は切りっぱなしで、8は切り離し後に粗いナデ、14は仕上げナデを施す。口径は8～10cm台と小さい。蓋は、やや厚みを持つものと薄く扁平なもの（19、20）に分けられる。

23の高坏は、長脚二段透かしであるが、ヘラ状のもので施した透かし孔は、貫通はしているものの縦に切ったのみで、一部は潰れている。坏部口径も10.3cmと小さい。甗は倒卵形の体部に大きく外反する頸部と口縁を持つ。

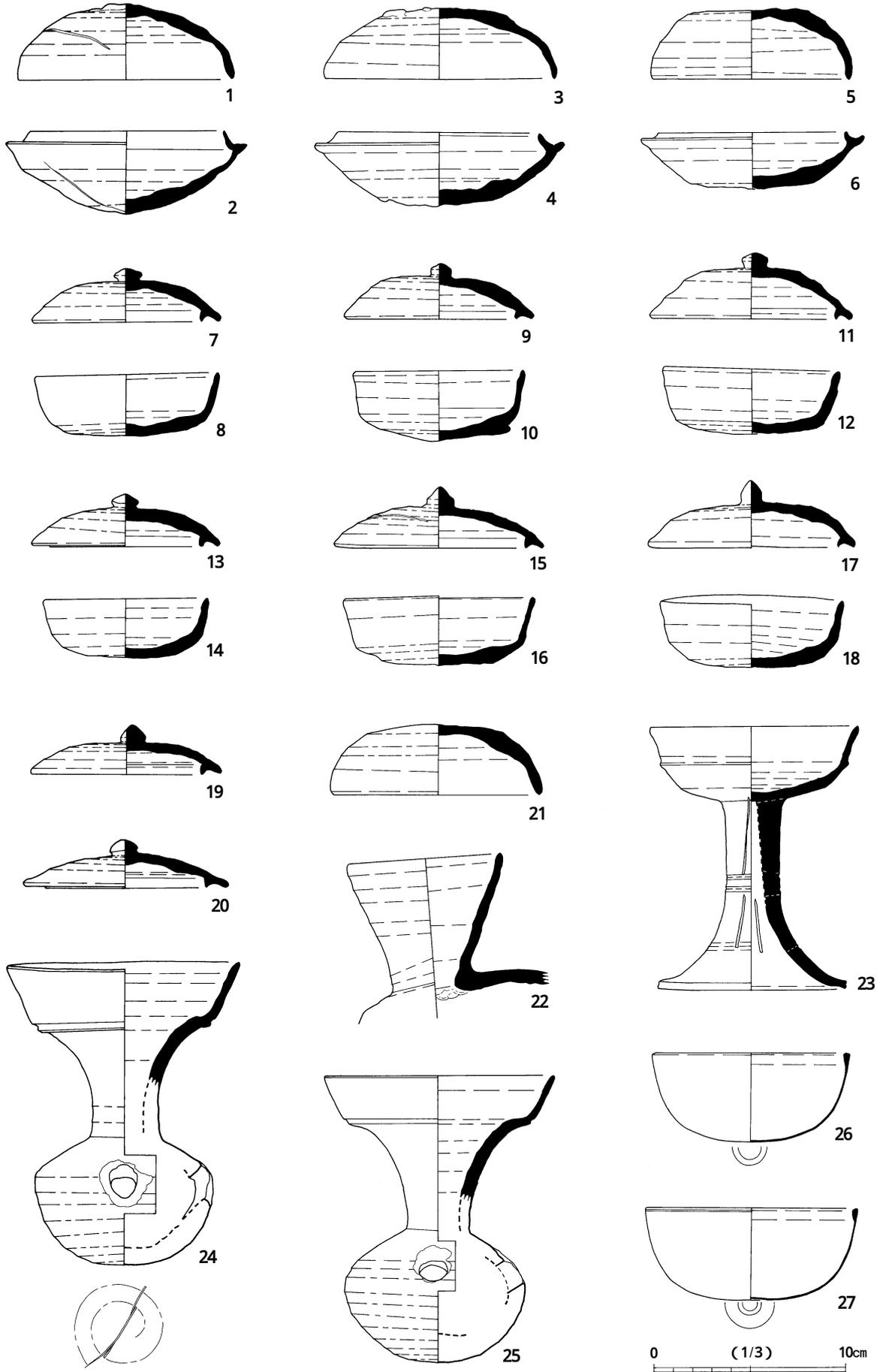


図2 狐塚古墳出土遺物実測図 (須恵器、S=1/3)

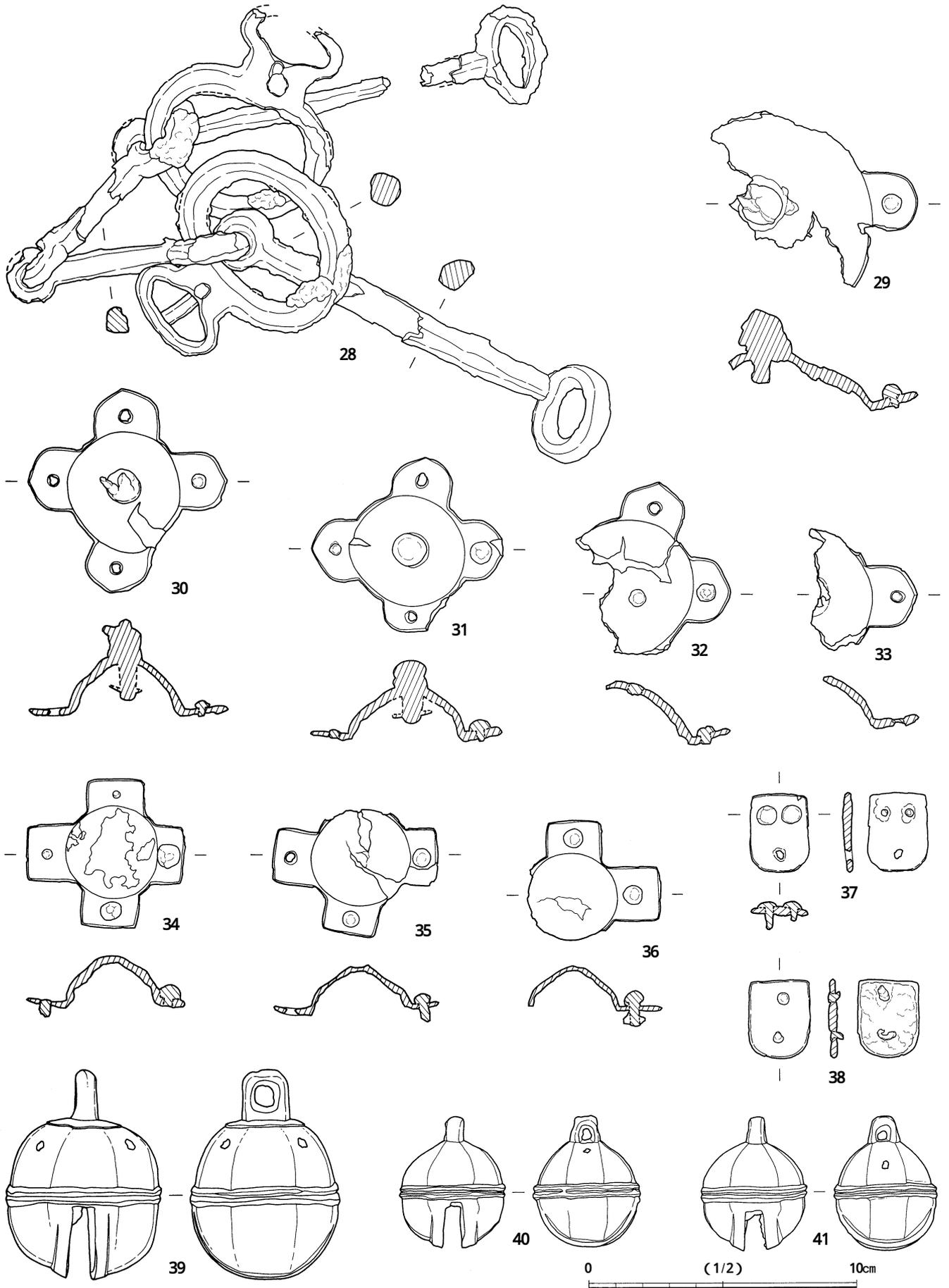


図3 狐塚古墳出土遺物実測図 (馬具、S=1/2)

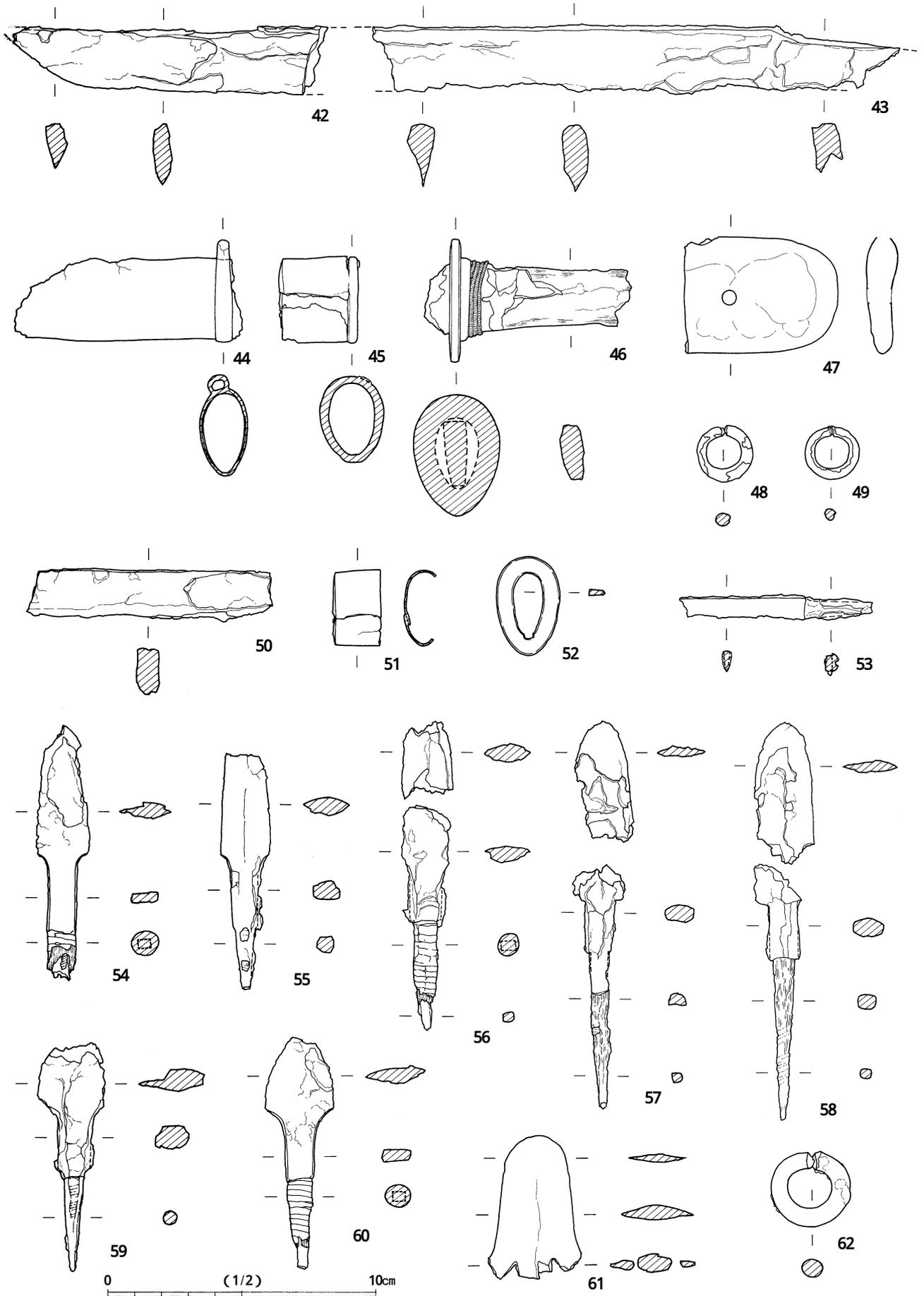


図4 狐塚古墳出土遺物実測図 (鉄器他、S=1/2)

これらの須恵器は、若干の時期差を含む資料群であるが、その時期としては、TK209の後半からTK217の時期、難波宮整地層や川原寺下層に相当しよう。7世紀の前半から中頃の時期と捉えておきたい。

(2) 銅碗

銅碗は2点出土している。

26は、口径10.5cm、器高4.7cm、器壁厚は0.1cmで、口唇部は0.35cmと肥厚する。底部外面に、径1.2cm、径1.8cmの二重の同心円状の細沈圈線を持つ。

27は、口径11.2cm、器高4.8cm、器壁厚は0.1cmで、口唇部は0.3cmと肥厚する。底部外面に、径0.8cm、径1.2cm、径2.6cmの三重の同心円状の細沈圈線を持ち、口縁外面に二条の細沈線を持つ。全体に保存状態は良好であるが、器壁の薄さと部分的な腐食のために、底部付近ではやや凸凹が見られる。この2点の銅碗は、それぞれ口径が異なり、ぴったりと入子状に重ねることが可能な重碗となる。

宮崎県内での銅碗の出土は、狐塚古墳以外には、宮崎市池内11号横穴墓の一例のみが知られている。池内銅碗は、宝珠つまみを有する蓋付の高脚付碗で、脚部は脱落している。口径9.1cmと狐塚例よりも小型で、蓋・碗共に口縁部、胴部中位(天井部中位)、胴部下位(天井部上位)に二条一組の削り出しによる凸線が見られる。

(3) 馬具

馬具は、轡1、雲珠1、辻金具7、飾金具2、銅鈴3が出土している。

28は、絞具状立間環状板付轡である。立間の一部と引手の一部に欠損が見られるが、全体として遺存状態は良好である。引手は、端部が「く」字形に屈曲している。鏡板部分の高さは8.2cmを測る。

29は、鉢状の鉄地金銅装雲珠で、鉢部は約1/2、脚部は1ヶ所のみが残存している。鉢部中央に宝珠飾を有するが、花形座は省略されている。変形のため明瞭ではないものの、鉢肩部に稜を有するものと思われる。脚部は半円形で、現状1脚のみが残存しているが、本来は8脚であったと思われる。責金具を持たず、鉾1点のみでベルトに装着するものである。

30~36は、雲珠と同巧の辻金具である。30~33は、半球状の鉢部中央に宝珠飾を持ち、鉢肩部に稜を有する。花形座は見られない。半円形の脚部には、責金具は無く、鉾1点ずつを持つ。34~36は、半球形の鉢部に、方形の脚部を持つ。鉢肩部に稜を持ち、宝珠飾は持たない。前4点と比べるとやや小振りである。

37、38は飾金具で、37は3鉾、38は2鉾でベルトに装着する。共に半円形で小振りのものである。

銅鈴は、中型のもの1点(39)と小型のもの2点(40、41)である。いずれも多面形に面取り鑄造された八角形鈴である。39は紐座の部分に段を有する。

これらの馬具の年代について、岡安光彦、白木原宜、宮代栄一各氏の論考を基に整理すると、絞具状立間環状板付轡のうち鏡板部の高さ8cm前後のものはTK209形式期に、半球状鉢の雲珠と辻金具については、宝珠飾の花形座が省略されていること、脚部に責金具を持たず1鉾のみでベルトに装着するものであること、鉢肩部に稜を有すること等の各特徴からTK209~TK217型式期に、飾金具は小振りな半円形で、表面に2鉾と3鉾を打つことからTK209型式期以降に、銅鈴は小・中型で多面形に面取り鑄造されることからTK209形式期に比定される。以上を総合すると、全体としてTK209形式期の

年代を与えることが妥当であろう。

また、馬装の復元については、飾金具2点がそれぞれ異なる型式であること、辻金具が宝珠飾を持つものと持たないものが見られること等から若干の疑問は残るものの、全体で一つの馬装を構成したものと考えられる。すなわち、轡と飾金具2点、小振りの辻金具3点で面繫を、銅鈴3点で胸繫を、宝珠飾を有する雲珠1点と辻金具4点で尻繫を構成したと復元可能である。面繫と尻繫の辻金具が逆である場合も想定されよう。しかし、宝珠飾を持たない3点の辻金具のみ別のセットである可能性も否定はしきれない。

(4) 鉄器、その他

金銅装の鉄刀、刀子、鉄鏃、耳環、玉類がある。

42～52は、金銅装の大刀であるが、刀身や足金物、環金具などを見ると、一振りではなく複数が存在したものと考えられる。42、43の刀身は同一個体と考えられるが、一部が欠落しており刀長は不明である。50の刀身は別個体であろう。装具として、円頭柄頭(47)、鍍金を施した切羽と刻みを施した銀線巻きを有する柄縁(46)、単独の切羽(52)、鞘口金具(45、51)、足金物(44)、銅製の環金具(48、49)が見られる。

鉄鏃は、鏃身に稜を持つ柳葉形のもの、ふくらと関部が大きく弧を描く三角形のもの、外反する逆刺を持つものの三つの鏃身形状が見られる。いずれも残存状態はあまり良好ではないが、一部のものでは茎部に樹皮巻きの状況が観察可能である。

玉類については、素材、色調、法量について表2、3に示した。

4 おわりに

狐塚古墳は、南九州最大規模の横穴式石室を持つ古墳である。砂丘上に立地し、海に向かって開口する。金銅装の大刀や馬具、カラフルな耳環や玉類、銅碗等の副葬品を持ち、終末期を代表する古墳も、墳丘のほとんどが消滅し、羨道の一部は破壊、玄室の天井石も全てが崩落し、現在は取り除かれている。病院施設の中に取り込まれているため、通常は容易に見学することもできない状況である。

せめて、その出土品について実測図を公表し、貴重な文化財としてデータを共有したいとの思いで本稿を用意した。南九州の古墳の理解への一助となれば幸いである。

なお、本稿は、「2 狐塚古墳について」を岡本が、他を東が執筆し、遺物の実測、トレース、観察表作成は柄本が担当した。また、銅碗実測図は、小栗明彦氏(奈良県立橿原考古学研究所)の原図をトレースした。巻頭写真は、牛嶋茂氏(奈良文化財研究所)による。

(参考文献)

- 岡安光彦 1985 「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』第2号 PHALANX 古墳文化研究会
 白木原直 1997 「古墳時代の鈴 - 主として铸造鈴について - 」『HOMINIDS』Vol. 001 CRA
 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
 中村 浩 2001 『和泉陶器 出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版
 宮代栄一 1993 「中央部に鉢を持つ雲珠・辻金具について」『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会
 日南市教育委員会 1995 「狐塚古墳」『平成6年度日南市内遺跡発掘調査概報』日南市埋蔵文化財調査報告書第4集

表1 狐塚古墳出土須恵器観察表

番号	器種	部位	法量 (cm)			調整等		胎土 (混和材・混入物)	焼成	色調		備考
			口径	底径	高さ	内面	外面			内面	外面	
1	杯蓋	完形	11.20		4.00	回転ナデ	上位、ヘラ削り 下位、回転ナデ	2mm以下の灰白・灰色粒	堅緻	灰	灰黄	外面：線刻
2	杯身	完形	10.10		4.40	回転ナデ	上位、回転ナデ 下位、ヘラ削り	2mm以下の灰白色粒を少量	堅緻	灰	暗灰 褐灰	外面：線刻 自然釉
3	杯蓋	口縁～ 天井部	12.10		3.80	回転ナデ	上位、ヘラ削り 下位、回転ナデ	1.5mm以下の灰白色粒	堅緻	褐灰	灰	
4	杯身	完形	10.60	6.60	3.90	回転ナデ	上位、回転ナデ 下位、ヘラ削り	2mm以下の黄白色粒	堅緻	灰	青灰 浅黄	
5	杯蓋	完形	10.30		4.00	回転ナデ	上位、ヘラ削り 下位、回転ナデ	5～3mmの灰白・白色粒 1.5mm以下の褐色粒を少量 2mm以下の暗灰・白色粒を多量	堅緻	褐灰	灰 灰白	
6	杯身	完形	9.90	6.50	3.00	回転ナデ	上位、回転ナデ 下位、ヘラ削り	2mm以下の白色粒	やや軟	灰	灰	内外面：風化 気味
7	杯蓋	完形	9.70		2.80	回転ナデ	つまみ上部、回転ナデ つまみ側面部、ナデ 上位、回転ヘラ削り 下位、回転ナデ	7～4mm大の灰白色石粒 3mm以下の灰白色粒少量	堅緻	灰	灰	宝珠つまみ
8	杯身	口縁～ 底部	9.60	6.20	3.40	回転ナデ	上位、回転ナデ 下位、ヘラ削り	3mm以下の灰白・灰色粒を多量	堅緻	灰	灰	
9	杯蓋	完形	9.70		2.95	回転ナデ	つまみ上部、回転ナデ つまみ側面部、ナデ 上位、回転ヘラ削り 下位、回転ナデ	1mm以下の灰白・灰色粒を少量	堅緻	灰	灰	宝珠つまみ
10	杯身	完形	8.80	7.70	3.70	回転ナデ	上位、回転ナデ 下位、ヘラ削り	3mm以下の灰白色粒を少量	堅緻	灰	灰	
11	杯蓋	完形	10.40		3.50	回転ナデ	つまみ上部、回転ナデ つまみ側面部、ナデ 上位、回転ヘラ削り 下位、回転ナデ	3mm以下の灰白色粒	堅緻	灰白	灰	宝珠つまみ
12	杯身	ほぼ完 形	9.20	7.80	3.60	回転ナデ	上位、回転ナデ 下位、ヘラ削り	3mm以下の白色粒 2mm以下の灰白色を多量 1mm以下の灰色粒を少量	堅緻	灰	灰白 灰	外面：自然釉
13	杯蓋	口縁～ つまみ 部	9.70		2.75	回転ナデ	つまみ上部、回転ナデ つまみ側面部、ナデ 上位、回転ヘラ削り 下位、回転ナデ	1mm以下の灰白・黒褐色粒を少 量	堅緻	灰	灰	宝珠つまみ
14	杯身	口縁～ 底部	8.55	4.80	3.20	回転ナデ	上位、回転ナデ 下位、ヘラ削り	4mm大、1.5mm以下の灰白色粒 を少量	堅緻	灰	灰	
15	杯蓋	完形	10.80		3.25	回転ナデ	つまみ上部、回転ナデ つまみ側面部、ナデ 上位、回転ヘラ削り 下位、回転ナデ	6mm大の灰白色石粒 2mm以下 の灰白・黄白・褐色粒を少量	堅緻	灰	灰 灰褐	外面：線刻
16	杯身	完形	9.90	5.10	3.65	回転ナデ	上位、回転ナデ 下位、ヘラ削り	3mm以下の灰白色粒 2mm以下の黒色粒を多量	堅緻	灰	灰	
17	杯蓋	口縁～ つまみ 部	10.80		3.55	回転ナデ	つまみ部、ナデ 上位、回転ヘラ削り 下位、回転ナデ	4mm大、3mm以下の灰白色粒 1.5mm以下の黒褐色粒	堅緻	灰	灰白 灰	
18	杯身	完形	9.50	7.20	3.80	回転ナデ	上位、回転ナデ 下位、ヘラ削り	1.5mm以下の灰白色粒 1mm以下の黒褐色粒を少量	堅緻	灰	灰黄 にぶい黄橙 橙	
19	杯蓋	完形	9.90		2.65	回転ナデ	つまみ上部、回転ナデ つまみ側面部、ナデ 上位、回転ヘラ削り 下位、回転ナデ	2mm以下の灰白色粒を少量	堅緻	灰	灰黄 灰	外面：自然釉
20	杯蓋	ほぼ完 形	10.60		2.55	回転ナデ	つまみ部、ナデ 上位、回転ヘラ削り 下位、回転ナデ	3mm以下の灰白色粒を少量	堅緻	灰白	灰	
21	杯蓋	完形	10.70		3.80	回転ナデ	上位、回転ナデ 下位、ヘラ削り	4～3mm大の灰色粒 1.5mm以下の灰白色粒	堅緻	灰	灰 明オリーブ 灰	
22	平瓶	口縁～ 体部	8.00			回転ナデ	回転ナデ	2mm以下の灰白色粒を少量	堅緻	灰黄褐	灰	
23	高杯	口縁～ 底部	10.30	9.80	13.90	回転ナデ	回転ナデ	5mm大の灰色粒 3mm以下の灰白色粒を多量	堅緻	灰	灰白 灰	脚：二段透し
24	ハソウ	ほぼ完 形	12.10		16.00	回転ナデ	上位、回転ナデ 中～下位、ヘラ削り後 ナデ	1.5mm以下の黄白色粒を少量	堅緻	灰黄	浅黄 灰黄	底部：線刻
25	ハソウ	口縁～ 底部	12.00		15.15	回転ナデ	上位、回転ナデ 中～下位、ヘラ削り	2mm以下の白・黄色粒を多量 赤褐色粒を微量	堅緻	灰白	灰	

表2 狐塚古墳出土玉類計測表

(単位:長・幅・厚・径はmm、重はg)

番号	種別	材質	色調	最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量	番号	種別	材質	色調	最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量
1	勾玉	水晶	透明	22.2	13.7	8.2	1.3~3.2	3.427	76	小玉	ガラス	緑色	1.6	3.0	2.7	1.1	0.016
2	勾玉	硬玉	淡緑色乳白	16.3	11.2	7.5	1~3.4	2.336	77	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.6	2.6	0.9	0.014
3	勾玉	ガラス	緑青色	19.5	12.5	6.3	1.8~2.1	1.650	78	小玉	ガラス	緑色	1.5	3.1	2.9	1.6	0.017
4	管玉	ガラス	青色	14.3	6.2		3.0	0.712	79	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.7	2.6	1.0	0.015
5	管玉	ガラス	淡青色	14.2	9.3	9.1	3.1	2.121	80	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.9	2.6	1.1	0.014
6	切小玉	水晶	透明	23.9	13.3	12.1	1.8~4.4	5.054	81	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.5	2.3	0.9	0.010
7	切小玉	水晶	透明	21.8	15.4	14.0	1.5~3.8	5.351	82	小玉	ガラス	緑色	1.7	2.7	2.7	0.9	0.016
8	切小玉	水晶	透明	23.5	14.9	12.7	1.4~3.5	5.430	83	小玉	ガラス	緑色	1.4	2.6	2.6	1.1	0.013
9	切小玉	水晶	透明	18.3	14.5	13.6	1.6~3.7	4.417	84	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.8	2.7	1.2	0.015
10	切小玉	水晶	透明	18.1	13.1	11.4	1.7~3.5	3.511	85	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.2	2.1	1.0	0.006
11	切小玉	水晶	透明	19.0	14.7	12.5	2.1~3.9	4.098	86	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.4	2.2	0.9	0.006
12	切小玉	水晶	透明	17.3	14.5	13.0	1.3~3.8	4.042	87	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.1	1.9	0.8	0.005
13	切小玉	水晶	透明	11.9	8.2	7.5	1.3~2.6	0.945	88	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.8	2.4	0.9	0.012
14	切小玉	水晶	透明	10.0	8.0	7.3	1.0~3.2	0.700	89	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.5	2.4	1.2	0.011
15	切小玉	水晶	透明	10.4	8.9	7.9	1.0~3.4	0.989	90	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.1	2.1	0.7	0.007
16	切小玉	水晶	透明	10.2	8.5	7.9	1.3~3.1	0.919	91	小玉	ガラス	緑色	1.6	1.9	1.9	0.7	0.008
17	切小玉	水晶	透明	9.1	7.5	6.5	1.3~3.2	0.578	92	小玉	ガラス	緑色	1.4	2.4	2.3	0.8	0.011
18	白玉	ガラス	紺色	6.7	8.1	7.4	1.5	0.615	93	小玉	ガラス	青緑色	1.6	1.8	1.7	0.7	0.008
19	白玉	ガラス	紺色	6.1	7.5	7.2	1.5	0.484	94	小玉	ガラス	緑色	1.6	2.2	2.2	0.8	0.009
20	白玉	ガラス	紺色	5.5	8.0	7.2	1.5	0.457	95	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.5	2.5	1.1	0.009
21	白玉	ガラス	紺色	5.3	7.5	7.4	1.5	0.493	96	小玉	ガラス	緑色	1.4	2.2	2.1	0.7	0.008
22	白玉	ガラス	紺色	6.1	6.3	6.1	1.4	0.352	97	小玉	ガラス	緑色	1.1	2.1	2.0	0.9	0.005
23	白玉	ガラス	青色	5.3	6.3	5.8	1.5	0.288	98	小玉	ガラス	緑色	1.4	2.4	2.3	0.9	0.012
24	白玉	ガラス	濃青緑色	4.1	6.4	6.0	1.6	0.230	99	小玉	ガラス	緑色	1.4	2.2	2.1	0.7	0.006
25	小玉	瑪瑙	橙色	4.4	5.8	5.6	1.6	0.193	100	小玉	ガラス	緑色	1.4	2.7	2.4	1.0	0.011
26	小玉	ガラス	黄色	3.8	4.4	3.8	0.9	0.084	101	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.3	2.2	0.8	0.007
27	小玉	ガラス	黄色	2.4	4.0	3.8	1.4	0.046	102	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.2	2.2	0.8	0.008
28	小玉	ガラス	黄色	2.5	3.9	3.8	1.4	0.047	103	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.2	2.0	1.1	0.007
29	小玉	ガラス	黄色	2.4	3.9	3.5	1.1	0.046	104	小玉	ガラス	緑色	1.0	2.2	2.1	1.1	0.006
30	小玉	ガラス	黄色	1.8	3.3	3.1	1.1	0.027	105	小玉	ガラス	淡緑色	1.2	1.7	1.7	0.8	0.004
31	小玉	ガラス	緑青色	3.3	4.8	4.4	1.5	0.111	106	小玉	ガラス	緑色	1.0	2.0	1.8	0.8	0.005
32	小玉	ガラス	緑色	2.8	4.0	3.9	1.3	0.059	107	小玉	ガラス	緑色	1.0	2.0	2.0	0.8	0.004
33	小玉	ガラス	緑色	2.6	4.1	3.9	1.7	0.053	108	小玉	ガラス	緑色	2.1	2.0	1.9	0.8	0.010
34	小玉	ガラス	緑色	2.3	4.0	3.9	1.5	0.054	109	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.1	2.0	0.9	0.006
35	小玉	ガラス	緑色	2.2	3.7	3.5	1.5	0.037	110	小玉	ガラス	緑色	1.1	2.4	2.2	0.9	0.008
36	小玉	ガラス	緑色	2.5	4.1	3.7	1.3	0.052	111	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.4	2.2	1.0	0.007
37	小玉	ガラス	緑色	2.3	3.7	3.6	1.4	0.043	112	小玉	ガラス	緑色	1.6	2.2	2.1	0.8	0.009
38	小玉	ガラス	黄緑色	2.4	3.9	3.8	1.5	0.048	113	小玉	ガラス	緑色	1.1	2.0	1.8	0.7	0.005
39	小玉	ガラス	緑色	3.0	3.7	3.5	1.5	0.046	114	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.4	2.3	0.9	0.007
40	小玉	ガラス	緑色	2.2	3.5	3.3	1.4	0.030	115	小玉	ガラス	緑色	1.7	2.2	2.1	0.7	0.012
41	小玉	ガラス	緑色	1.9	3.6	3.1	1.4	0.030	116	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.3	2.2	0.8	0.011
42	小玉	ガラス	青色	3.0	3.4	3.0	1.1	0.037	117	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.2	2.1	0.9	0.007
43	小玉	ガラス	青色	2.7	3.5	3.3	1.3	0.039	118	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.1	2.0	0.9	0.005
44	小玉	ガラス	緑色	2.7	3.1	3.0	1.0	0.034	119	小玉	ガラス	緑色	1.1	2.2	2.1	0.8	0.004
45	小玉	ガラス	緑色	2.1	3.9	3.5	1.6	0.035	120	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.3	2.2	1.0	0.005
46	小玉	ガラス	緑色	1.7	3.9	3.6	1.5	0.027	121	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.4	2.3	0.8	0.007
47	小玉	ガラス	淡青色	2.9	2.9	2.8	1.1	0.033	122	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.2	2.1	1.0	0.006
48	小玉	ガラス	緑色	1.9	2.8	2.8	1.0	0.020	123	小玉	ガラス	青緑色	1.8	1.8	1.6	0.8	0.007
49	小玉	ガラス	緑色	2.1	3.2	3.2	1.4	0.026	124	小玉	ガラス	緑色	1.1	1.7	1.7	0.8	0.004
50	小玉	ガラス	緑色	2.3	3.5	3.2	1.2	0.031	125	小玉	ガラス	緑色	1.3	1.9	1.8	0.8	0.005
51	小玉	ガラス	緑色	1.9	3.0	3.0	1.2	0.024	126	小玉	ガラス	緑色	1.8	2.2	2.1	0.8	0.011
52	小玉	ガラス	緑色	2.1	3.6	3.3	1.6	0.031	127	小玉	ガラス	青緑色	1.8	1.8	1.8	0.8	0.008
53	小玉	ガラス	緑色	1.8	2.5	2.2	1.0	0.011	128	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.2	2.1	0.8	0.009
54	小玉	ガラス	緑色	2.2	2.8	2.8	1.0	0.023	129	小玉	ガラス	緑色	1.4	2.2	2.1	0.8	0.007
55	小玉	ガラス	緑色	2.3	3.3	3.2	1.2	0.031	130	小玉	ガラス	青色	1.3	2.2	2.0	0.8	0.007
56	小玉	ガラス	淡緑色	1.9	3.0	2.9	1.3	0.021	131	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.1	2.0	0.9	0.007
57	小玉	ガラス	緑色	2.3	2.7	2.4	1.1	0.020	132	小玉	ガラス	緑色	1.0	1.9	1.8	0.8	0.003
58	小玉	ガラス	緑色	1.7	2.9	2.8	1.2	0.018	133	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.0	1.9	0.7	0.006
59	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.5	2.5	0.9	0.012	134	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.3	2.3	1.0	0.007
60	小玉	ガラス	緑色	1.9	2.5	2.5	1.0	0.017	135	小玉	ガラス	緑色	1.8	1.8	1.8	0.8	0.008
61	小玉	ガラス	緑色	1.9	2.6	2.5	1.0	0.017	136	小玉	ガラス	緑色	1.7	1.6	1.5	0.8	0.006
62	小玉	ガラス	緑色	2.2	2.6	2.6	1.1	0.020	137	小玉	ガラス	緑色	1.1	2.1	2.0	0.8	0.006
63	小玉	ガラス	緑色	1.7	2.5	2.5	1.0	0.015	138	小玉	ガラス	緑色	1.7	2.6	2.6	0.9	0.011
64	小玉	ガラス	青緑色	1.6	3.0	2.8	0.8	0.017	139	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.6	2.4	1.1	0.009
65	小玉	ガラス	緑色	1.6	2.7	2.5	1.0	0.014	140	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.4	2.3	1.0	0.006
66	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.6	2.4	1.0	0.011	141	小玉	ガラス	緑色	1.1	2.2	2.1	1.0	0.006
67	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.7	2.6	1.3	0.011	142	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.0	1.9	0.9	0.005
68	小玉	ガラス	緑色	2.2	2.5	2.3	0.9	0.018	143	小玉	ガラス	緑色	1.0	2.2	2.1	0.9	0.007
69	小玉	ガラス	緑色	1.8	2.5	2.4	1.2	0.015	144	小玉	ガラス	緑色	1.2	1.9	1.9	0.8	0.006
70	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.5	2.5	1.0	0.012	145	小玉	ガラス	緑色	1.1	2.3	2.1	0.7	0.007
71	小玉	ガラス	緑色	2.0	2.1	2.0	0.8	0.012	146	小玉	ガラス	緑色	1.8	2.4	2.3	0.7	0.012
72	小玉	ガラス	緑色	1.7	3.1	3.0	1.4	0.018	147	小玉	ガラス	緑色	1.4	2.1	2.0	0.6	0.008
73	小玉	ガラス	緑色	1.8	3.0	2.7	1.0	0.018	148	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.2	2.2	0.7	0.008
74	小玉	ガラス	緑色	1.6	2.6	2.4	1.0	0.013	149	小玉	ガラス	青緑色	1.2	1.8	1.8	0.8	0.005
75	小玉	ガラス	緑色	1.8	2.4	2.3	0.9	0.014	150	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.2	2.2	1.0	0.008

表3 狐塚古墳出土玉類計測表

(単位:長・幅・厚・径はmm、重はg)

番号	種別	材質	色調	最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量	番号	種別	材質	色調	最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量
151	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.2	2.2	1.0	0.007	206	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.2	2.2	0.9	0.006
152	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.3	2.3	0.9	0.008	207	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.2	2.1	0.9	0.005
153	小玉	ガラス	緑色	1.4	2.6	2.5	1.0	0.011	208	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.0	1.9	0.7	0.008
154	小玉	ガラス	青色	1.1	2.1	2.0	0.9	0.004	209	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.5	2.4	1.2	0.009
155	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.2	2.1	0.9	0.007	210	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.6	2.6	0.7	0.016
156	小玉	ガラス	緑色	1.4	2.3	2.2	0.8	0.007	211	小玉	ガラス	緑色	1.9	2.3	2.2	0.9	0.012
157	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.2	2.2	0.8	0.008	212	小玉	ガラス	緑色	1.8	2.4	2.3	0.9	0.012
158	小玉	ガラス	緑色	1.4	2.4	2.3	0.9	0.011	213	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.8	2.7	1.2	0.014
159	小玉	ガラス	緑色	1.6	2.2	2.2	0.8	0.011	214	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.4	2.4	1.0	0.007
160	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.2	2.2	0.9	0.007	215	小玉	ガラス	緑色	1.9	2.6	2.5	1.1	0.017
161	小玉	ガラス	緑色	1.8	2.4	2.1	0.7	0.012	216	小玉	ガラス	青緑色	1.2	2.4	2.4	0.8	0.010
162	小玉	ガラス	緑色	1.9	1.6	1.6	0.7	0.004	217	小玉	ガラス	緑色	1.7	2.3	2.3	0.8	0.010
163	小玉	ガラス	緑色	1.1	2.2	2.1	0.8	0.006	218	小玉	ガラス	緑色	1.6	2.6	2.5	0.7	0.013
164	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.0	1.9	0.7	0.005	219	小玉	ガラス	緑色	1.8	2.5	2.4	0.8	0.015
165	小玉	ガラス	緑色	1.7	1.7	1.7	0.6	0.005	220	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.7	2.7	0.8	0.013
166	小玉	ガラス	緑色	1.2	1.7	1.6	0.7	0.004	221	小玉	ガラス	緑色	1.5	3.0	2.6	1.2	0.014
167	小玉	ガラス	緑色	1.3	1.9	1.8	0.7	0.007	222	小玉	ガラス	緑色	2.1	2.5	2.3	0.8	0.017
168	小玉	ガラス	緑色	1.4	2.0	2.0	0.7	0.008	223	小玉	ガラス	緑色	1.7	2.6	2.5	1.1	0.016
169	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.0	1.8	0.6	0.006	224	小玉	ガラス	緑色	2.2	2.4	2.3	0.9	0.018
170	小玉	ガラス	緑色	1.6	1.8	1.8	0.7	0.007	225	小玉	ガラス	緑色	2.1	2.7	2.6	1.1	0.019
171	小玉	ガラス	緑色	1.4	1.7	1.7	0.7	0.004	226	小玉	ガラス	緑色	2.1	2.8	2.7	1.1	0.018
172	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.3	2.2	0.7	0.008	227	小玉	ガラス	青色	1.4	3.1	3.1	1.0	0.017
173	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.3	2.2	0.7	0.008	228	小玉	ガラス	緑色	1.7	3.1	3.0	1.4	0.022
174	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.3	2.3	0.7	0.008	229	小玉	ガラス	緑色	2.4	3.0	2.9	0.9	0.028
175	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.5	2.4	0.8	0.011	230	小玉	ガラス	緑色	2.0	3.1	3.0	0.9	0.027
176	小玉	ガラス	緑色	2.1	1.8	1.8	0.7	0.010	231	小玉	ガラス	緑色	2.1	3.4	3.3	1.1	0.029
177	小玉	ガラス	緑色	1.9	1.9	1.8	0.8	0.008	232	小玉	ガラス	緑色	2.1	3.4	3.4	1.2	0.034
178	小玉	ガラス	緑色	2.0	2.0	1.9	0.8	0.010	233	小玉	ガラス	緑色	2.4	3.6	3.3	1.2	0.034
179	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.2	2.1	0.8	0.009	234	小玉	ガラス	緑色	2.3	3.9	3.5	1.7	0.037
180	小玉	ガラス	緑色	1.4	2.2	2.2	0.7	0.008	235	小玉	ガラス	青色	2.0	4.1	3.8	1.6	0.037
181	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.4	2.3	0.9	0.009	236	小玉	ガラス	緑色	2.1	3.4	3.3	1.0	0.034
182	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.5	2.1	0.9	0.008	237	小玉	ガラス	緑色	2.0	3.5	3.4	1.3	0.030
183	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.5	2.3	1.0	0.007	238	小玉	ガラス	緑色	2.3	3.8	3.6	1.6	0.030
184	小玉	ガラス	緑色	1.4	2.3	2.1	0.8	0.008	239	小玉	ガラス	緑色	2.4	3.2	3.2	1.2	0.028
185	小玉	ガラス	緑色	1.4	1.9	1.8	0.9	0.005	240	小玉	ガラス	緑色	2.5	3.4	3.3	1.1	0.041
186	小玉	ガラス	緑色	1.1	2.1	2.0	0.9	0.004	241	小玉	ガラス	緑色	2.3	3.5	3.4	1.1	0.040
187	小玉	ガラス	緑色	1.6	2.4	2.1	0.7	0.012	242	小玉	ガラス	緑色	2.8	3.6	3.2	1.1	0.040
188	小玉	ガラス	緑色	1.1	2.3	2.3	1.0	0.006	243	小玉	ガラス	緑色	3.0	3.6	3.3	0.9	0.048
189	小玉	ガラス	緑色	1.6	2.2	2.1	0.8	0.009	244	小玉	ガラス	緑色	1.9	3.7	3.6	1.3	0.034
190	小玉	ガラス	緑色	1.3	2.2	2.2	0.9	0.006	245	小玉	ガラス	緑色	2.8	3.7	3.5	1.1	0.045
191	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.4	2.2	0.8	0.009	246	小玉	ガラス	灰緑色	2.9	3.7	3.6	1.3	0.049
192	小玉	ガラス	緑色	1.5	1.8	1.8	0.7	0.007	247	小玉	ガラス	灰緑色	3.1	3.9	3.8	1.0	0.061
193	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.3	2.3	0.7	0.010	248	小玉	ガラス	緑色	3.2	3.8	3.6	1.4	0.054
194	小玉	ガラス	緑色	1.7	2.6	2.4	1.0	0.014	249	小玉	ガラス	黄緑色	2.3	4.1	3.9	1.5	0.043
195	小玉	ガラス	緑色	1.9	2.6	2.5	1.1	0.016	250	小玉	ガラス	灰緑色	3.3	3.5	3.5	1.0	0.051
196	小玉	ガラス	緑色	1.4	2.5	2.3	1.0	0.010	251	小玉	ガラス	緑色	2.7	4.3	3.6	1.2	0.059
197	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.7	2.5	0.8	0.013	252	小玉	ガラス	灰緑色	2.4	4.2	4.0	1.5	0.053
198	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.1	2.0	0.8	0.008	253	小玉	ガラス	灰緑色	2.4	4.3	4.0	1.6	0.050
199	小玉	ガラス	緑色	1.5	1.8	1.7	0.7	0.004									
200	小玉	ガラス	淡青緑色	1.6	1.9	1.8	0.9	0.006									
201	小玉	ガラス	緑色	1.3	1.8	1.8	0.9	0.006									
202	小玉	ガラス	緑色	2.0	2.5	2.3	1.0	0.014									
203	小玉	ガラス	緑色	1.5	2.4	2.3	0.8	0.011									
204	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.0	1.9	1.0	0.005									
205	小玉	ガラス	緑色	1.2	2.7	2.5	1.2	0.011									



狐塚古墳天井石検出状況



狐塚古墳完掘状況



狐塚古墳石室及び遺物出土状況

宮崎県出土の滑石製石鍋

二宮 満夫

1 はじめに

中世における商品としての生活雑器は、消費地の多様なニーズに応えるため、日本各地で多彩な焼物が生産され、それらは特定地域または全国に流通した。

その中であって、焼物ではないが、生活雑器としての滑石製石鍋がある。滑石製石鍋の生産地は、長崎県西彼杵半島一帯に集中し、他に山口県宇部市などが知られる。製品としての石鍋は、関東から沖縄までの広範囲で確認され、宮崎県も例にもれない。

本稿では、考古博物館収蔵の滑石製石鍋2点についての簡単な所見と現段階での宮崎県出土の滑石製石鍋の集成を行う。

2 考古博物館収蔵の滑石製石鍋

資料1は、出土地不明のものである。推定口径14.0cm、残存高5.6cmを測り、全体の約1/8が残存する。内湾する口縁部の直下に削り出しによる鐳を持つ。鐳の断面は、角に丸みを帯びた不等辺な台形をなす。外面の調整は、口縁部は小さな、体部は大きな単位による縦方向のケズリによって整形される。口縁端部は、丁寧なミガキが施される。鐳の直下は、横方向のケズリによって鐳の削り出しの跡を消す。内面は、縦方向のケズリで整形されていたと思われるが、丁寧なミガキがなされている。色調は表裏ともに灰黄色で、断面は光沢のある明青灰色をなす。

資料2は、1984年の集成にある児湯郡出土のものである(下川 1984)。口径21.5cm、底径13.4cm、器高8.9cmを測る完形品である。直立する口縁部の直下に削り出しによる鐳を持つ。鐳の断面は、不等辺な台形をなす。外面の調整は、資料1と同様であるが、鐳の削り出しの跡を消す整形はなさない。内

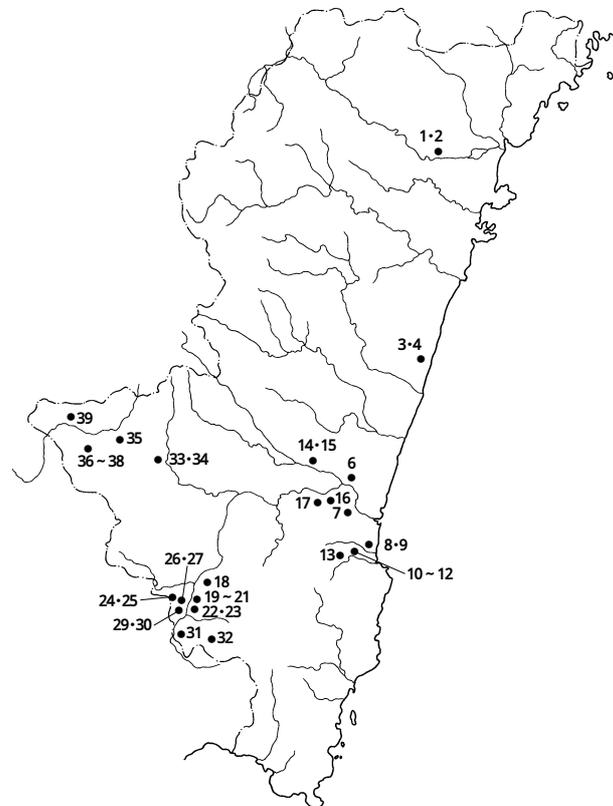


図1 滑石製石鍋出土地(番号は表1に対応)

面は、縦方向のケズリの後、下半部を横方向のミガキによって整形する。外面のほとんどにススが付着し、内面も使用時によるものか黒く変色し、滑石本来の色調をなさない。

資料1、2ともに木戸分類(木戸1995)の類-bに属し、14世紀代の所産であると考えられる。

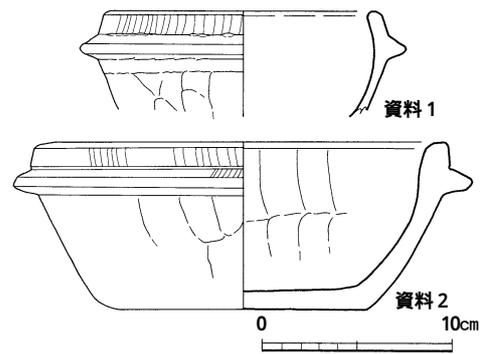


図2 滑石製石鍋実測図(S=1/4)

3 おわりに

1984年段階での宮崎県内出土の滑石製石鍋は、5遺跡を数えるのみであった。今回、新たに集成を試みたところ、出土地不明を含めて38遺跡を数えるに至った。都城市・えびの市に分布が集中し、大淀川、またはその支流沿いの遺跡などで確認される。

生産地である長崎県からは、1984年の集成での熊本県52遺跡、鹿児島県26遺跡の出土を鑑みると、九州の西ルートを下りて宮崎県の北・西諸県郡(特に都城盆地)に持ち込まれたと考えるのが自然である。宮崎県内での流通は、木戸氏(木戸1995)が遠隔地流通について指摘する「いったん物資が都市に集中し、そこから周辺部へと運ばれていく姿」が、規模は小さくなるが宮崎県内の滑石製石鍋の流通にも当てはめることができ、一度都城に集められたものが大淀川を下り、県内各地に運ばれたと推測する。また、形式的に先行する瘤状把手を持つものが、現段階で国富町西下本庄遺跡を除いて、北・西諸県郡でしか確認されないことも流通の一端を知る手がかりとなるだろう。

本稿を作製するにあたり、県埋蔵文化財センター堀田孝博氏の多大な協力を得た。また、資料のトレースには、本館整理専門員柄本久子氏のお手をわずらわした。記して感謝いたします。

(参考文献)

- 木戸雅寿 1993「石鍋の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』 日本中世土器研究会
 木戸雅寿 1995「13. 石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
 下川達彌編 1984「滑石製石鍋出土地名表(九州・沖縄)」『九州文化史研究所紀要』第29号 九州大学九州文化史研究施設

報告書

- 1 甲斐貴充 2002 『母智丘谷遺跡・畑田遺跡・嫁坂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第63集
- 2 栗畑光博 1995 『天ヶ淵遺跡』都城市文化財調査報告書第33集
- 3 栗畑光博 2000 『池ノ友遺跡(第1次調査)』都城市文化財調査報告書第49集
- 4 栗畑光博ほか 2002 『横市遺跡群』都城市文化財調査報告書第58集
- 5 栗畑光博 2004 『馬渡遺跡』都城市文化財調査報告書第62集
- 6 栗畑光博 2004 「柳川原遺跡第4次調査B地区」『都城島津家領の唐人町周辺の遺跡』都城市文化財調査報告書第65集
- 7 重永卓爾 1991 『都之城取添遺跡発掘調査概報』都城市文化財調査報告書第15集
- 8 下田代清海 2003 『江内谷遺跡』都城市文化財調査報告書第59集
- 9 高橋浩子 2002 『枯木ヶ迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第55集
- 10 高山富雄・山田洋一郎 『竹ノ内遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第27集
- 11 立神勇志 2004 『王子原第2遺跡』都城市文化財調査報告書第66集
- 12 田中熊雄・鈴木重治ほか 1958 「本庄高校校地内の遺跡調査録」『宮崎県文化財調査報告書』第3輯
- 13 谷口武範 1991 「上南方地区遺跡(山口遺跡)」『延岡市文化財調査報告書』第6集
- 14 谷口武範 1992 「上南方地区遺跡(畑山遺跡)」『延岡市文化財調査報告書』第8集
- 15 谷口武範 2000 『大島畠田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第28集
- 16 鳥枝誠 1999 『東宮遺跡』宮崎市文化財調査報告書第39集
- 17 中野和浩・東真一 2005 『長江浦地区遺跡群』えびの市埋蔵文化財調査報告書第32集
- 18 中村真由美 2001 『市谷遺跡群』小林市文化財調査報告書第13集
- 19 長津宗重・日高孝治 1985 「堂地東遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集
- 20 永友良典 1990 「小原木遺跡群蔭地区」『えびの市文化財調査報告書』第6集
- 21 永友良典・菅付和樹 1988 「車坂城西ノ城跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第4集
- 22 橋本英俊 2002 『本城跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第60集
- 23 東真一・中野和浩 2005 『東川北地区遺跡群』えびの市埋蔵文化財調査報告書第41集
- 24 久松亮 2004 『木ノ前遺跡』都城市文化財調査報告書第63集
- 25 日高孝治ほか 1985 「平畑遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集
- 26 廣田晶子 2003 『梅木田遺跡』高岡町埋蔵文化財調査報告書第27集
- 27 福田泰典 2002 『鴉尾遺跡 坂ノ下遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第65集
- 28 北郷泰道ほか 1995 『学頭遺跡・八兒遺跡発掘調査報告書』宮崎県教育委員会
- 29 松林豊樹 1999 『西下本庄遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第15集
- 30 矢部喜多夫 1989 「久玉遺跡」『昭和63年度遺跡発掘調査概報』都城市文化財調査報告書第10集
- 31 矢部喜多夫 1993 「正坂原遺跡」『都城市文化財調査報告書』第25集
- 32 横山哲英 1993 『天神原遺跡』都城市文化財調査報告書第23集

表1 宮崎県出土滑石製石鍋一覽

番号	遺跡名	所在地	把手形状と点数			転用製品	報告書等
			瘤状	鏝	不明		
1	山口遺跡	延岡市小川町			1		13
2	畑山遺跡				1		14
3	沓袋遺跡	川南町大字川南					12
4	前ノ田村上第1遺跡				1		堀田孝博氏御教示
5	児湯郡内	児湯郡		1			本稿 資料2
6	瓜生野遺跡	宮崎市大字瓜生野					12
7	本城跡	宮崎市古城町		1	1		22
8	東宮遺跡	宮崎市大字郡司分		1			16
9	枯木ヶ迫遺跡			1	2		9
10	平畑遺跡	宮崎市大字熊野			1		25
11	堂地東遺跡				1		19
12	車坂城西ノ城跡			1	2		21
13	竹ノ内遺跡	清武町大字今泉		1	1		10
14	本庄高校遺跡	国富町大字本庄			2		12
15	西下本庄遺跡		1	2		不明1	29
16	八児遺跡	高岡町大字下倉永	1				28
17	梅木田遺跡	高岡町大字小山田		1		円形状1	26
18	大島畠田遺跡	都城市金田町	1				15
19	天神原遺跡	都城市早水町		1			32
20	池ノ友遺跡第1次調査					温石?(瘤状把手)1	3
21	久玉遺跡	都城市郡元町		1			30
22	木ノ前遺跡	都城市姫城町		1		不明1	24
23	柳川原遺跡第4次	都城市天神町		1			6
24	畑田遺跡	都城市横市町		2			1
25	加治屋B遺跡(第1次)	都城市南横市町				分銅?1	4
26	正坂原遺跡	都城市志比田町				温石1、棒状1、 不明(鏝状把手)1	31
27	都之城取添遺跡	都城市都原町			1		7
28	天ヶ淵遺跡	都城市安久町		2		温石2	2
29	江内谷遺跡	都城市蓑原町	2	1	8		8
30	馬渡遺跡			3			5
31	鴛尾遺跡	都城市今町	1		4	不明2	27
32	王子原第2遺跡	都城市安久町			2		11
33	大部遺跡	小林市大字真方		2		転用呪具1(人形)	18
34	年神遺跡		1	4	2	転用温石5	18
35	小木原遺跡群蕨地区	えびの市大字上江		1			20
36	弁財天遺跡	えびの市大字西長江浦		1	11	円盤1、不明1	17
37	馬場田遺跡				2	温石1、不明1	17
38	小路下遺跡			3	5	温石?1	17
39	古屋敷遺跡	えびの市大字東川北	1	6	5	温石5、不明4	23
40	不明			1			本稿 資料1

合併以前の市町村で表記

景行天皇の九州巡狩について

鶴田 裕一

1 はじめに

筆者は宮崎県小林市の生まれであるが、市内細野宝光院に景行天皇御腰掛石が存在していることを小さい頃から祖母によく聞かされていた。実際にそれを目にしたのは小学校高学年の頃であったと思うが、その時は特別な感慨を持ったわけでもなかった。しかし、ここ10年ほど各地の景行天皇が来られたとされる事跡を訪ね歩くようになったのは、こうした幼い日の記憶があるためであると思っている。

景行天皇が行幸されたという伝承は、九州各地はもとより愛媛や山口、関東にも残されている。そして、その内容は多岐にわたり、神社に祭られていたり、腰掛石や鞍掛石があったり、また御手洗と呼ばれる天皇が水を使われた泉があったり、天皇に由来する地名があったりと実に夥しいものがある。こうしてこれまでに調査して得ることのできた知見を基に、新たな考察を加えてみたい。

2 豊前国成立譚

神夏磯媛（かむかしひめ、かむなつそひめ）と残賊者

日本書紀（以下書紀）景行記に次の記述がある¹⁾。

「到周芳娑麼（中略）爰有女人曰神夏磯媛其徒衆甚多国之魁師也聆天皇之使者至則拔磯津山之賢木以上枝挂八握劔中枝挂八咫鏡下枝挂八尺瓊亦素幡樹于船舳參向而啓之曰願無下兵我之属類必不有違者今將歸德矣唯有残賊者」

この記述は、景行天皇が周防の佐波、現在の山口県防府市に来られたとき、神夏磯媛という女性が船で出迎えた場面である。防府市に有る玉祖神社には、景行天皇が太刀を奉納したという伝承がある。但しそれは、平安時代に焼失してしまったということではあるが。

さて、神夏磯媛とは、どんな女性であろうか。引用文にもあるように、自ら述べているが、その統べる民は多く、一国の魁師つまり大将、首領である。そうした一大勢力でありながら、天皇の徳に従い、逆らうようなことはないので、兵を向けないでほしいと訴えている。

注目したいのは、榊の枝に劍鏡玉をぶら下げていることである。いわゆる三種の神器と呼ばれるものである。これは、この女性の権力がいかに強大であったかをうかがわせる。そして、天皇に従わない残賊者が4人いるので速やかに撃つべきであると進言する。

その4人とは、

「一曰鼻垂妄仮名號山谷響聚屯結於菟狭川上」

「二曰耳垂残賊貪婪？略人民是居於御木川上」

「三曰麻剥潜聚徒党居於高羽川上」

「四曰土折猪折隠住於緑野川上独特山川之險以多掠人民」²⁾

この4人の所在地はどこなのかということについていろいろな説がある。日本書紀通釈³⁾には、菟狭川は宇佐郡駅館川、御木川は下毛野広津川、高羽川は田川郡伊田川、緑野川は企救郡緑川という説が紹介されている。現在の名前にすると、このうち広津川は中津市を流れる山国川、伊田川は彦山川になる。またこの他に緑野川を北九州市小倉北区を流れる紫川としている資料⁴⁾や緑野の川上を彦山川の上流緑川としている資料⁵⁾もある。もちろん何も正確なことはわかっていないわけであるが、一応これで考えると、現在の行政区画だと、勢力は大分県宇佐市、中津市、福岡県田川市、小倉南区となる。神夏磯媛について書紀は言及していないが、田川市夏吉若八幡宮の祭神になっている⁶⁾。つまりここが根拠地というわけである。

不思議なことが2点ある。一つは、防府まで出向いた神夏磯媛が、現在の田川市内の勢力を排除することを求めている点である。遠賀川を下り、関門海峡を越えたその軍勢が、足元の一勢力を討つことができないとは考えられない。この高羽は、タカワと読むのかタカハと読むのか分からないが、田川郡以外の場所を考えるのがよいのではないだろうか。

二つ目は、それぞれの川上に賊がいてその退治を願うとするのなら、それは川下にいる勢力ではないかということである。高羽の川上以外は、山を越えたところである。川上ということで、山奥の洞窟などをその賊がいたところではないかと考えている例⁷⁾も紹介されているが、山を越えて勢力を伸張しようとしているところをみると、これは現在の筑豊地方と山を越えた豊前側の全面戦争という様相を帯びてくる。そして、書紀が示すとおり、これは筑豊側の全面勝利に終わる。戦後処理については何も記されていない。恩賞を全く受けなかったので、神夏磯媛の子孫は朝廷を恨んだと考えている資料もある⁸⁾。神夏磯媛の勢力がどの程度であったか分からないが、剣鏡玉を示したところを見ると相当な勢力であり、戦後の論功行賞で何も分け前がなかったとは思えない。むしろ、筑豊の勢力が豊前地域を押さえたと見るのがよいのではないだろうか。国の境がいつ定められたのかわからないが、豊前地域全体が筑紫となったとは考えられないだろうか。筑紫と呼ばれる範囲が増加したのだ。以前指摘したが⁹⁾、書紀に筑紫国膽狭山部¹⁰⁾という記述がある。膽狭山は、筑豊から山を一つ越えたところ勝山町諫山とされている。この地域は豊前と呼ばれた地域である。もし筑豊勢力が、豊前全域を押さえ、その領域が筑紫と呼ばれていたなら、その時期には諫山は筑紫国の内ということになる。但し、時代はかなり下り辻褄が合わなくなるかもかもしれないが、豊前地域を制圧した天皇は、長峽縣に行宮を営む。帝踏石という天皇にまつわるといふ巨岩が小倉南区曾根の日豊本線沿いに所在する。

神功皇后と夏焼

神夏磯媛の話にはその後があり、書紀に次のように記されている。

「丙申転至山門縣則誅土蜘蛛田油津媛時田油津媛之兄夏羽興軍而迎來然聞其妹被誅而逃之」¹¹⁾

この記述と柳川市大和町の鷹尾神社、瀬高町の田油津媛を祭る祠、田川市夏吉の若八幡宮の伝承をまとめると次のような話になる。

神夏磯媛の子孫夏羽は兄で筑後山門郡の土蜘蛛田油津媛が妹である。この兄妹と神功皇后が戦うことになる。ここでその理由として神夏磯媛が恩賞を受けなかったのでその子孫は朝廷を恨んでいたと

いう話がある¹²⁾。どちらから戦いを仕掛けたかどうかわからないが、現在の甘木市秋月の羽白熊鷲が皇后に討たれた話がすぐ前に記されているところからも、筑後地域がその時代戦乱の巷であったことは想像に難くない。

さて、どこから船出したのか分からないが皇后の軍勢は、矢部川の河口に着く。ここを田油津媛の軍勢が急襲したともいう。鷹尾神社で軍議を開いた皇后は、矢部川を遡り田油津媛の本拠を衝き滅ぼす。今はその墓という小さな塚の上に祠が乗っかっている。もともとは大きな前方後円墳であったともいう。何処まで来ていたのか分からないが、妹と合流して神功皇后と対峙しようとしていた夏羽は、その報を聞き退却する。書紀にはここまでしか記述されていない。皇后は、敵勢力が合流する前にその一方を取り除くことに成功したわけである。いわゆる各個撃破である。そして追撃戦に移る。現在の甘木市秋月から八丁越・古処山付近を通り嘉穂郡へと進軍したものであろう。夏羽はその根拠地で焼き殺される。それで、それ以来夏焼という地名がついたということである。江戸時代になり、地名が不吉であるとのことで領主の命により夏吉となったという。いわゆる地名説話として現在に至っている。

この話を、筑後山門と田川という点と点で考えるのではなく、現実的な戦争状態として考えてみると、皇后対筑豊と筑後の勢力の争いと見ることができる。但し根幹は山門と田川である。敗色が濃くなったときそれ以外の筑豊、筑後の勢力は皇后に味方することになるであろうことは、歴史の示すところである。さらに、豊前の勢力も夏羽打倒に立ち上がったことであろう。それは、神夏磯媛に制圧されて以来筑紫に組み込まれていたからである。そして、この戦いの結果、恩賞として田川郡は豊前領となったのではないかと考える。山を越えたところに存在している豊前田川郡はこうして成立したのではないだろうか。

以上が、景行天皇と神夏磯媛、神功皇后と夏羽の話から思考される豊前国成立譚である。文献と伝承から考えられる事柄として指摘しておきたい。

3 球磨の天子

豊前を後にした景行天皇は豊後から日向を経て肥後球磨郡に至る。そこには景行天皇の九州巡狩にまつわる天子地名が存在している。以下にその所在している場所を挙げる。

あさぎり町旧上村に5箇所（榎田八十別府、中別府、塚脇、麓、石坂）

あさぎり町旧深田村に1箇所（草津山）

あさぎり町旧免田町に1箇所（久鹿）

あさぎり町旧岡原村に1箇所（岡本と宮原の境を流れている川の一部）

錦町に5箇所（一武の寺村、西村の京ヶ峰、木上の平良、平川に2箇所）

人吉市に3箇所（大村の葦原、中原の中神、原田）

山江村に2箇所（山田の合戦峯、万江の城内）

相良村に1箇所（柳瀬の三石）

多良木町に5箇所（黒肥地の久保、熊山、牛島、奥野、久米）

湯前町に1箇所（東方）

球磨村に1箇所（神瀬の部）

以上は、上村史、多良木町史、免田町史、球磨郡誌、角川日本地名大辞典43熊本から拾い集めたものである。これ以外にも天子地名は存在するかもしれないが、今確認しているのはここまでである。地元の人に話を聞くと、天皇の来られた場所であるとかゆかりのある場所であるとか答えが返ってくる。あるいは、雷の落ちた場所であるという人もいるし、全く関係ないのではないかという人もいる。また、天子神社や湧き水に天子の水と名がついているところもある。山田の合戦峯では、講を結び毎年12月に集まりを行い天皇の徳を偲んでいる。天皇が来られたと書紀が記している旧暦4月からすると半年後になるが、来られたのはこの時期であったと言われているということであった。この合戦峯のことを本天子と言い他を端天子と言うそうであるが、ここは、九州自動車道人吉インターの西側にあり小高い丘になっている。それから、黒肥地の大久保にある天子の祠には、二体の人形が祭られている。男女の木像である。天皇と一緒に来られた御刀媛ではないかと思う¹³⁾。

次に、書紀から球磨郡の記事を見てみる。

「夏四月壬戌朔甲子到熊縣其処有熊津彦者兄弟二人天皇先使徵兄熊則從使詣之因徵弟熊而不來故遣兵誅之」¹⁴⁾

夏四月三日に球磨の縣に到着された天皇は、熊津彦兄弟に会おうとされる。兄のほうは命に従うが、弟は従わなかったので兵を遣わして滅ぼしたとなっている。球磨郡での記事はこれだけである。

この話と天子地名を組み合わせると、次のことに気づく。球磨盆地の地図にその場所をチェックしていくと、東から西まで網羅されているが、現在の人吉市街地の球磨川南岸にその地名は見当たらない。そこには相良氏の築いた人吉城跡がある。合戦峯の丘と河を挟んで睨み合うような位置にある。これは何を示しているのだろうか。滅ぼされた弟の熊津彦のいたところはこの球磨川南岸の市街地ではないだろうか。そのため天子地名がなく、後に相良氏が城を築いたのも抵抗勢力の弱いこの地を選んだのではないかと思われる。天皇が球磨に入られたのが、4月3日甲子で、次に葦北から球磨川河口の水島に到着したのが11日壬申なので、球磨の縣滞在は一週間にも満たない。この間に弟熊を撃ったわけであるから、おそらく事前の謀が張り巡らされていたであろうことは想像に難くない。だから、兄熊の本拠は球磨川北岸合戦峯にかつてあり、今も本天子と呼ばれるのではないだろうか。

4 まとめ

資料¹⁵⁾によると景行天皇の在位は西暦71年から130年までの60年間とされている。九州巡狩は、天皇の12年から19年までであるから西暦82年から89年までとなる。実際の年代はわからないが、天皇もしくは天子と呼ばれる方が九州を巡られたことは、文献や伝承などが示すとおり間違いなく行われたものであるように思う。そして、残された話には後に付け加えられたり意図的に増幅されたりしたものもあるであろうが、その根幹には歴史的事実が必ず存在していると思う。

今回は豊前国や球磨郡について論じたが、その他の地域にも同じく様々な言い伝えが残されている。機会があればまた筆を取りたいと思う。

5 おわりに

景行天皇は、日向の高屋宮に6年居られたことになっているが、この高屋宮がどこにあったのかという問題がある。宮崎市村角だという人もいれば、西都市都於郡だという人もいる。これだけ長い期間日向に居られたというのも不思議なことである。書紀にその説明はない。何らかの政治的原因があったのであろうが、今は何も資料がないので空想するしかない。今後とも様々な機会を捉えて資料の収集にあたりたいと思っている。

註

- 1) 新訂増補国史大系日本書紀前編(吉川弘文館)巻七景行天皇202ページ
- 2) 1)に同じ
- 3) 日本書紀通釈第三 飯田武郷(大鏡閣)1615~1618ページ
- 4) 北九州市史総論先史・原始(北九州市)662ページ
- 5) 田川市史民俗篇(田川市役所)396ページ
- 6) 田川市史民俗篇(田川市役所)394ページ
- 7) 日本書紀通釈第三 飯田武郷(大鏡閣)1616~1617ページ
- 8) 田川市史民俗篇(田川市役所)394ページ
- 9) 宮崎県立西都原考古博物館研究紀要第一号 57~58ページ
- 10) 新訂増補国史大系日本書紀後編(吉川弘文館)巻十八安閑天皇 41ページ
- 11) 新訂増補国史大系日本書紀前編(吉川弘文館)巻九神功皇后 243ページ
- 12) 新訂増補国史大系日本書紀前編(吉川弘文館)巻九神功皇后 242~243ページ
- 13) 新訂増補国史大系日本書紀前編(吉川弘文館)巻七景行天皇 206ページに日向の高屋宮に六年居られ、御刀媛を妃となし豊国別皇子が生まれたとある。
- 14) 新訂増補国史大系日本書紀前編(吉川弘文館)巻七景行天皇 207ページ
- 15) 東方年表(平楽寺書店) 37~40ページ

えびの市千人塚供養塔に納められた 地下式横穴墓出土人骨

高橋 由香・竹中 正巳

1 はじめに

千人塚供養塔は、宮崎県えびの市大字原田字建山に所在する。土地の人々によれば昭和40年4月に建立され、えびの市内の地下式横穴墓から発掘された古墳時代人骨が納められているという。

宮崎県立西都原考古博物館は、2004年7月28日に、千人塚供養塔から地下式横穴墓出土人骨を収集した。燻蒸後、骨の種類を同定し、資料化の作業を行った。

千人塚供養塔の中には、150近くの人骨片が遺存していた。その中には、故木崎原操氏が発掘された小木原古墳群140号と島内地下式横穴墓群（平松古墳群）の人骨各1体分も確認された。

今回、千人塚供養塔に納められていた地下式横穴墓出土人骨について人類学的観察と計測を行ったので、その結果を報告する。

2 収集時の人骨の状況

千人塚供養塔には人骨だけではなく動物骨も納められていた。骨は湿気による影響や害虫による被害を受けていた。ビニール袋に入れられ、区別された人骨も見られた。

3 人骨番号

脳頭蓋と顔面頭蓋がセットになっているものには頭蓋として番号を付与した。脳頭蓋のみものものは脳頭蓋として、顔面頭蓋のみものものについては顔面頭蓋として付与した。また、体幹・体肢骨については骨の種類ごとに番号を付与した。

4 人骨の観察と計測の結果

(1) 小木原古墳群140号出土人骨（不明・成人）

昭和44年12月に発掘されたと故木崎原操氏の記した木札が添えられていた。『えびの』第2号では、えびの市中原田建山の千人塚に設置されている納骨堂に納めて、その霊を弔ったという記述がある。

遺存部位は上顎右犬歯と下顎左第2大臼歯、右上腕骨骨体、左右大腿骨骨体と椎骨や肋骨などの骨片である。大臼歯と左右大腿骨に赤色顔料が付着しており、犬歯の咬耗はMartinの2度である。

(2) 島内地下式横穴墓群〔平松古墳群〕（男性・若年以上）

昭和46年10月に発掘されたと故木崎原操氏の記した木札が添えられていた。『えびの』第5号の昭和46年9月に平松古墳での砂利採取が行われたという記述から、この時期に発掘されたものと思われる。

遺存部位は右寛骨である。大坐骨切痕の形態からこの個体は男性と判定した。

(3) その他の人骨

その他の人骨の観察結果は頭部と寛骨については人骨番号ごとに記録した(表1～表4)。性別、年齢が判定できる部位が少ない体幹・体肢骨については、一覧表にまとめた(表5・6)。

千人塚供養塔に納められていた個体数を明らかにするために、骨の部位別に個体数を数えたところ、前頭骨の眉弓付近が一番多く、18に上った。したがって、最低18体以上の地下式横穴墓出土人骨が千人塚供養塔に納められていたことになる。

人骨のMartin法による計測の結果は表7に示す。計測できた頭蓋はわずかであるが、傾向は読みとれる。顔面は低く幅が広い。眼窩は低く、鼻部は広いといった、これまでにえびの市をはじめとする南九州山間部の地下式横穴墓から出土した古墳時代人骨と共通する特徴を備えている。計測の結果から、千人塚に納められた人骨がえびの市内の地下式横穴墓から発掘された古墳時代人骨であるという口承は支持される。

参考文献

- 木崎原操 1969 「小木原古墳群調査報告(第2報)」『えびの』第2号 えびの市史談会
木崎原操 1973 「平松古墳群について」『えびの』第5号 えびの市史談会
えびの市 1994 『えびの市史』上巻
宮崎県教育委員会 1972 「えびの市島之内の地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第16集
宮崎県 1993 『宮崎県史』資料編考古2



写真1 えびの市千人塚供養塔



写真2 人骨収集の状況

表1 頭蓋の人類学的特徴

人骨番号	性別	年齢	特徴など
頭蓋No 1	女性	壮年	頭蓋後方と下顎骨を欠損。眉弓の突出はわずかで前頭骨の立ち上がりは直角。冠状縫合の閉鎖なし。上顎切歯にMartinの2度の咬耗。
頭蓋No 2	男性	壮年後期	左頭頂部から後頭部にかけてと下顎骨を欠損。眉弓と乳様突起が発達。冠状縫合と矢状縫合内板と、外板の1/2程度が閉鎖。上顎右大臼歯3本は歯根部のみ遺存。遺存歯にMartinの2～3度の咬耗。
頭蓋No 3	男性	壮年後期	頭蓋右半分と下顎骨を欠損。前頭骨から側頭骨にかけて赤色顔料が付着。乳様突起と外後頭隆起が発達。頭蓋縫合の内板が完全閉鎖。上顎左小臼歯2本はMartinの2～3度の咬耗。上顎左第1小臼歯の近心面に齲蝕。
頭蓋No 4	男性	壮年	後頭骨と右頭頂骨の一部を欠損。眉弓と乳様突起が発達。遺存している上下顎前歯部にMartinの2度の咬耗。上顎智歯歯根の遠心面に約0.7mmのエナメル滴。
頭蓋No 5	男性	壮年	下顎骨と後頭骨の一部を欠損。前頭骨から顔面にかけて赤色顔料が付着。上顎洞と蝶形骨洞に副鼻腔炎。(右頭頂骨内面に陥没している所がある。)眉弓が発達。頭蓋縫合の閉鎖はなし。
頭蓋No 6	女性	熟年	下顎骨と頭蓋左半分を欠損。前頭骨に赤色顔料が付着。上顎洞に軽度の副鼻腔炎の影響と考えられる炎症。上顎右大臼歯は生前に脱落し歯槽閉鎖。下顎窩には顎関節症の痕跡。前頭骨の立ち上がりは急で、乳様突起の発達は弱い。冠状縫合の内板と外板、ラムダ状縫合の内板が閉鎖。
頭蓋No 7	男性	壮年後期	左頬骨と左下顎骨、左前頭骨から後頭骨にかけてが欠損。前頭部から顔面にかけて赤色顔料が付着。上顎右第2切歯の近心面と上顎右第1大臼歯の舌側面がう蝕。歯の咬耗はMartinの2～3度。眉弓が発達。矢状縫合・ラムダ状縫合の内板と外板の一部が閉鎖。
頭蓋No 8	男性	壮年後期	下顎骨と前頭骨から後頭骨にかけてがベルト状に遺存。前頭骨を中心に複数の約1mm～3mmの穴。下顎左第2小臼歯の全面が象牙質まで咬耗。眉弓が発達。矢状縫合・ラムダ状縫合の内板と外板の1/3程度が閉鎖。

表2 脳頭蓋の人類学的特徴

人骨番号	性別	年齢	特徴など
脳頭蓋No 1	女性	壮年後期	前頭部から頭頂部にかけての脳頭蓋が遺存。前頭骨に赤色顔料が付着。眉弓はわずかに突出。矢状縫合内板が閉鎖。
脳頭蓋No 2	男性	壮年	前頭部から頭頂部にかけての脳頭蓋が遺存。眉弓が発達。矢状縫合・ラムダ状縫合の内板と外板の一部に閉鎖の痕。
脳頭蓋No 3	女性	壮年	前頭部から左頭頂部にかけての脳頭蓋が遺存。前頭骨に赤色顔料が付着。前頭骨の立ち上がりは急。乳様突起の発達は弱い。頭蓋縫合の閉鎖はなし。
脳頭蓋No 4	男性	壮年後期	前頭骨と頭頂骨の一部が遺存。骨質は厚い。前頭部から頭頂部にかけて赤色顔料が付着。眉弓が突出。矢状縫合の内板と外板の一部で閉鎖。
脳頭蓋No 5	不明	壮年	前頭骨と頭頂骨の一部が遺存。前頭骨に赤色顔料が付着。冠状縫合と矢状縫合に閉鎖はなし。
脳頭蓋No 6	女性	壮年	前頭骨と頭頂骨の一部が遺存。前頭骨に赤色顔料が付着。前頭結節は低く位置し、眉間に突出はなし。冠状縫合の内板と外板の一部が閉鎖。
脳頭蓋No 7	男性	壮年	左眉弓周辺などの前頭骨、左頭頂骨と右頭頂骨の一部のみが遺存。前頭骨に赤色顔料が付着。眉弓は発達。冠状縫合と矢状縫合に閉鎖はない。

人骨番号	性別	年齢	特徴など
脳頭蓋No 8	男性	壮年	脳頭蓋の約半分が遺存。前頭骨に赤色顔料が付着。骨質は厚い。眉間の発達。冠状縫合と矢状縫合は閉鎖していない。
脳頭蓋No 9	不明	壮年	脳頭蓋の約半分が遺存。頭蓋縫合に閉鎖はない。
脳頭蓋No10	男性	壮年	前頭骨の一部のみが遺存。骨質は厚い。眉弓の発達。冠状縫合の内板と外板の一部が閉鎖。
脳頭蓋No11	男性	不明	一部を欠損した前頭骨、左側頭骨と頭頂骨の一部が遺存。眉弓は発達。
脳頭蓋No12	男性	壮年	左側の前頭骨、左側と右側の頭頂骨の一部が遺存。矢状縫合の内板が閉鎖。眉弓は突出。
脳頭蓋No13	男性	不明	前頭骨の眉間付近のみ遺存。赤色顔料が付着。眉弓は発達。
脳頭蓋No14	不明	不明	前頭骨右側の一部が遺存。前頭結節の発達は著しい。
脳頭蓋No15	不明	不明	前頭骨の左眼窩上縁から左側頭面にかけて遺存。
脳頭蓋No16	女性	熟年	ラムダ周辺の頭頂骨・後頭骨の一部が遺存。矢状縫合とラムダ状縫合の内板と外板のほとんどが閉鎖。外後頭隆起の発達は弱い。
脳頭蓋No17	不明	壮年後期	左右の頭頂骨と後頭骨の一部が遺存。矢状縫合とラムダ状縫合の内板と外板に閉鎖。
脳頭蓋No18	不明	不明	頭頂骨の中央部の一部が遺存。矢状縫合に閉鎖はなし。
脳頭蓋No19	不明	不明	右側頭骨のみ。右外耳道の後壁に骨瘤。
脳頭蓋No20	不明	不明	右側頭骨が遺存。
脳頭蓋No21	不明	不明	左側頭骨と左蝶形骨大翼が遺存。
脳頭蓋No22	不明	不明	左側頭骨が遺存。
脳頭蓋No23	不明	不明	左側頭骨と耳小骨のツチ骨・キヌタ骨が遺存。左外耳道の後壁に骨瘤。
脳頭蓋No24	不明	不明	右側頭骨の一部が遺存。
脳頭蓋No25	不明	不明	後頭骨の一部が遺存。
脳頭蓋No26	不明	不明	咽頭結節周辺が遺存。
脳頭蓋No27	不明	未成年	咽頭結節周辺が遺存。蝶後頭軟骨結合が癒合していない。
脳頭蓋No28	不明	不明	前頭骨の左眼窩上縁が遺存。赤色顔料が付着。
脳頭蓋No29	不明	不明	前頭骨の右眼窩上縁と頬骨の一部が遺存。赤色顔料が付着。
脳頭蓋No30	不明	不明	右側頭骨の錐体が遺存。
脳頭蓋No31	不明	不明	右側頭骨の錐体が遺存。
脳頭蓋No32	不明	不明	右側頭骨の錐体が遺存。
脳頭蓋No33	不明	不明	右側頭骨の錐体が遺存。微量の赤色顔料が付着。
脳頭蓋No34	不明	不明	左側頭骨の錐体が遺存。赤色顔料が付着。
脳頭蓋No35	不明	不明	左側頭骨の錐体が遺存。
脳頭蓋No36	不明	不明	頭頂骨の一部が遺存。
脳頭蓋No37	不明	不明	頭頂骨の一部が遺存。
脳頭蓋No38	不明	不明	後頭骨の一部が遺存。
脳頭蓋No39	不明	不明	頭頂骨の一部が遺存。

表3 顔面頭蓋の人類学的特徴

人骨番号	性別	年齢	特徴など
顔面頭蓋No 1	不明	壮年	顔面頭蓋が遺存。遺存する歯をはじめとして赤色顔料が付着。左右の上顎洞に軽度の炎症。上顎歯、下顎歯ともに切歯はMartinの2度の咬耗、残りの遺存歯もMartinの1度の咬耗。
顔面頭蓋No 2	不明	壮年	上顎骨と下顎骨の一部が遺存。上顎骨～下顎歯に赤色顔料が付着。左右の上顎洞に軽度の炎症。遺存歯の咬耗はMartinの1～2度。

人骨番号	性別	年齢	特徴など
顔面頭蓋No 3	不明	成人	不完全な右上顎骨と右下顎骨が遺存。赤色顔料が付着。右上顎洞に軽度の炎症。遺存歯の咬合面にMartinの1度の咬耗。
顔面頭蓋No 4	不明	壮年	不完全な左上顎骨が遺存。赤色顔料が付着。左上顎洞に軽度の炎症。遺存歯にMartinの2度の咬耗。
顔面頭蓋No 5	不明	壮年	不完全な左上顎骨が遺存。赤色顔料が付着。左上顎洞に軽度の炎症。歯の咬耗はMartinの2度。
顔面頭蓋No 6	不明	成人	不完全な右上顎骨が遺存。遺存歯の咬耗はMartinの1度。
顔面頭蓋No 7	不明	成人	不完全な右上顎骨が遺存。わずかな赤色顔料が付着。上顎第2大臼歯歯根部の遠心面に約2mmのエナメル滴。遺存歯2歯の咬耗はMartinの1度。
顔面頭蓋No 8	不明	不明	左上顎骨の一部が遺存。左上顎洞に副鼻腔炎と思われる炎症。
顔面頭蓋No 9	不明	不明	右上顎骨の一部が遺存。
顔面頭蓋No10	不明	不明	下顎底だけの下顎骨が遺存。
顔面頭蓋No11	不明	壮年	下顎枝など不完全な下顎骨が遺存。赤色顔料が付着。切歯の咬耗はMartinの2度。
顔面頭蓋No12	不明	壮年	下顎枝など不完全な下顎骨が遺存。左大臼歯の咬耗はMartinの2度。
顔面頭蓋No13	不明	壮年後期	不完全な下顎骨の左側が遺存。下顎左第2大臼歯は生前に離脱し歯槽閉鎖。遺存歯の咬耗はMartinの2～3度。
顔面頭蓋No14	不明	成人(20歳前後)	不完全な下顎骨の左側が遺存。赤色顔料が付着。遺存歯にほとんど咬耗が認められない。第3大臼歯が萌出している。
顔面頭蓋No15	不明	不明	下顎頭、下顎切痕、筋突起からなる下顎骨の左側が遺存。
顔面頭蓋No16	不明	不明	下顎角から歯槽にかけての下顎骨の右側が遺存。
顔面頭蓋No17	不明	成人(20歳前後)	大臼歯周辺の下顎骨の右側が遺存。遺存歯に咬耗が認められず、第3大臼歯が萌出している。
顔面頭蓋No18	不明	壮年	大臼歯周辺の下顎骨の右側が遺存。遺存歯の咬耗はMartinの2度。
顔面頭蓋No19	不明	不明	右頬骨が遺存。
顔面頭蓋No20	不明	不明	右頬骨が遺存。
顔面頭蓋No21	不明	不明	左頬骨が遺存。

表4 寛骨の人類学的特徴

人骨番号	性別	年齢	特徴など
寛骨片No 1	男性	不明	右寛骨の寛骨臼周辺が遺存。大坐骨切痕の角度が小さい。
寛骨片No 2	不明	壮年	右寛骨の恥骨体周辺が遺存。恥骨結合面の形態から、この個体は壮年と判定した。
寛骨片No 3	不明	熟年後期	右寛骨の恥骨体周辺が遺存。恥骨結合面の形態から、この個体は熟年後期と判定した。
寛骨片No 4	不明	熟年	左寛骨の恥骨体周辺が遺存。恥骨結合面の形態から、この個体は熟年と判定した。
寛骨片No 5	不明	壮年	左寛骨の恥骨体周辺が遺存。恥骨結合面の形態から、この個体は壮年と判定した。
寛骨片No 6	不明	不明	左寛骨の下前腸骨棘周辺が遺存。
寛骨片No 7	不明	不明	右寛骨の寛骨臼周辺が遺存。
寛骨片No 8	不明	不明	左寛骨の寛骨臼切痕周辺が遺存。
寛骨片No 9	不明	不明	左右不明の寛骨臼周辺が遺存。
寛骨片No10	不明	不明	左右不明の寛骨臼周辺が遺存。

表5 体幹骨の人類学的特徴

	頸椎	胸椎	腰椎	備考（遺存部位や特徴など）
椎骨片	3	3	2	No.1：腰椎椎体に変形性脊椎症と思われる骨増殖。 No.2：腰椎椎体に弱い骨増殖。

表6 体肢骨の人類学的特徴

	R	L	不明	備考（遺存部位や特徴など）
肩甲骨片	2	1	-	No.1：右肩甲骨関節窩、関節頸周辺。 No.2：左肩甲骨外側縁周辺。 No.3：右肩甲骨内側縁、肩甲棘周辺。
鎖骨片	2	3	-	No.1～No.3：鎖骨中央部。No.4：右鎖骨胸骨端。 No.5：左鎖骨胸骨端。
上腕骨片	3	1	-	骨体が遺存。
橈骨片	3	2	1	骨体が遺存。No.2に赤色顔料が微量付着。
尺骨片	2	3	-	骨体を中心に遺存。
手根骨片	1	-	-	舟状骨。
中手骨片	1	1	-	No.1：右の第2中手骨。No.2：左の第3中手骨。
大腿骨片	13	11	5	No.4：遠位部骨端が癒合していないので未成人。 No.5：後面に赤色顔料が微量付着。
脛骨片	9	10	-	No.1：右脛骨遠位部骨端が癒合していないので未成人。 No.18：左脛骨近位部骨端が癒合していないので未成人。
腓骨片	3	1	1	骨体を中心に遺存。No.3は外果のみ。
膝蓋骨片	-	1	-	ほぼ完全に遺存。
足根骨片	2	2	-	No.1～No.3：距骨。No.4：右舟状骨。



写真3 えびの市千人塚供養塔に納められた古人骨

表7 頭蓋計測値(mm)および示数

Martin's No.	計測項目	頭蓋1 (女・壮)	頭蓋2 (男・壮後)	頭蓋3 (男・壮後)	頭蓋4 (男・壮)	頭蓋5 (男・壮)	頭蓋7 (男・壮後)	脳頭蓋1 (女・壮後)	脳頭蓋2 (男・壮)
1	頭蓋最大長					183			
8	頭蓋最大幅					143			
17	バジオンプレグマ高		147	139					
3	グラベロラムダ長					183			
5	頭蓋底長		105						
9	最小前頭幅	98	97		93	95		85	89
10	最大前頭幅	115	120		118	123		111	122
7	大後頭孔長			31					
16	大後頭孔幅			28					
26	正中矢状前頭弧長	126	140		126	133	137	108	122
27	正中矢状頭頂弧長			125	121	133		134	116
28	正中矢状後頭弧長			120					
29	正中矢状前頭弦長	106	122		109	114	119	99	110
30	正中矢状頭頂弦長			112	109	119		115	104
31	正中矢状後頭弦長			101					
8/1	頭蓋長幅示数					78.1			
9/10	横前頭示数	85.2	80.8		78.8	77.2		76.6	73.0
9/8	横前頭頭頂示数					66.4			
16/7	大後頭孔示数			90.3					
27/26	矢状前頭頭頂示数				96.0	100.0		124.1	95.1
28/27	矢状頭頂後頭示数			96.0					
29/26	矢状前頭示数	84.1	87.1		86.5	85.7	86.9	91.7	90.2
30/27	矢状頭頂示数			89.6	90.1	89.5		85.8	89.7
31/28	矢状後頭示数			84.2					
40	顔長		104						
45	頬骨弓幅	(128)	((146))						
46	中顔幅	100	98		94				
48	上顔高	64	71						
51	眼窩幅(左)	42	45						
	眼窩幅(右)	43	46		40				
52	眼窩高(左)	29	32						
	眼窩高(右)	29	33		34				
54	鼻幅	24	27		24				
55	鼻高	45	49		43				
43	上顔幅	105	107		103				
44	両眼窩幅	97	99		(97)				
50	前眼窩間幅	17	16						
F.	鼻根横弧長	20	21						
57	鼻骨最小幅	5	9						
48/45	Kollmann上顔示数	(50.0)	((48.6))						
48/46	Virchow上顔示数	64.0	72.4						
52/51	眼窩示数(左)	69.0	71.1						
	眼窩示数(右)	67.4	71.7		85.0				
54/55	鼻示数	53.3	55.1		55.8				
40/5	顎示数		99.0						
50/44	眼窩間示数	17.5	16.2						
50/F	鼻根湾曲示数	85.0	76.2						



写真4 えびの市千人塚供養塔 頭蓋No.1(女性・壮年)



写真5 えびの市千人塚供養塔 頭蓋No.2(男性・壮年後期)



写真6 えびの市千人塚供養塔 頭蓋No.3(男性・壮年後期)

地下(豎坑)式横穴墓と墳丘の相関関係

例 言

- 1 本報告は、文部省科学研究費補助金重点領域研究「遺跡探査」に基づいて行った、西都市西都原古墳群所在の酒元ノ上地区7号横穴墓の発掘調査および理化学的分析の結果である。
- 2 調査は宮崎県教育委員会と天理大学遺跡探査チームとの共同調査の形態をとり、現地調査は1995年7月24日から8月2日までを第1次調査、1995年12月17日から12月27日までを第2次調査、1996年9月5日から9月15日までを第3次調査として、のべ32日間実施した。
- 3 掲載した挿図の方位は調査時の磁北である。
- 4 遺物の実測・浄書は森本征明（天理大学4回生、当時）が行った。
- 5 挿図の縮尺は土器が1：3、金属器が1：2である。
- 6 既報告の各種理化学的分析に提供した試料番号と整合性を保つため、第3次調査出土遺物は数字の前に Artifact の略号「A」を付けている。第1次調査・第2次調査出土遺物は数字のみで表している。
- 7 本報告の執筆分担は目次に示したとおりである。
- 8 英文要約は天理大学国際文化学部教授 Walter Edwards による。
- 9 出土遺物などの整理の費用は2002年度天理大学学術研究助成費研究課題：「地下（竪坑）式横穴墓と墳丘の相関関係」（研究代表者：置田雅昭）から支弁した。
- 10 本報告は2003年度天理大学学術図書出版助成をうけた『地下（竪坑）式横穴墓と墳丘の相関関係』の一部である。
- 11 株式会社古環境研究所が行った自然科学分析の費用は宮崎県教育委員会が負担した。
- 12 本報告の編集は高野政昭（天理大学附属天理参考館学芸員）が行い、置田雅昭が補訂した。

挿図11	酒元ノ上地区7号横穴墓	平面図・断面図.....	74
挿図12	酒元ノ上地区7号横穴墓	玄室の石敷き検出状況図.....	75
挿図13	酒元ノ上地区7号横穴墓	玄室の遺物出土状況図(土器図の縮尺は1:6).....	76
挿図14	酒元ノ上地区7号横穴墓	玄室出土須恵器実測図.....	78
挿図15	酒元ノ上地区7号横穴墓	玄室出土土師器実測図.....	79
挿図16	酒元ノ上地区7号横穴墓	玄室出土耳環・鉄製品実測図.....	80
挿図17	酒元ノ上地区7号横穴墓	墓道出土須恵器・土師器・耳環実測図.....	82
挿図18	西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓における植物珪酸体分析.....		86
挿図19	西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓における花粉ダイアグラム.....		93
挿図20	奈良県宇陀郡見田・大沢1号墳の一隅突出型前方後方墳 縮尺300分の1 (『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第44冊 1982年より).....		102
挿図21	高原町日守地下(豎坑)式横穴墓と墳丘の復元図 (『墳丘のない墓の探査研究』2001年より).....		102

表 目 次

	頁
表1	西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓における植物珪酸体分析結果.....85
表2	西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓における花粉分析結果.....90~92
表3	西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓における樹種同定結果.....95
表4	西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓における寄生虫卵分析・花粉分析結果.....97

第 I 章 調査の概要

1 地下遺構探査法の考古学的活用の実践研究

置田 雅 昭 (天理大学教授)

研究代表者	天理大学文学部	置田 雅 昭
研究分担者	天理大学名誉教授	金 関 恕
	天理大学文学部	桑 原 久 男
	天理大学国際文化学部	Walter Edwards
	マイアミ大学地球物理学応用考古学	
	探査研究所中島研究室	Dean Goodman
	天理大学附属参考館	山 内 紀 嗣
	天理大学附属参考館	高 野 政 昭
	天理大学附属参考館	日 野 宏
	天理大学附属参考館	小田木治太郎
	宮崎県教育委員会	北 郷 泰 道

はじめに

日本列島の墳丘をもつ墓は弥生時代に始まり、紀元8世紀まで営まれた。この間の紀元3～6世紀は前方後円墳という特色ある墳丘を築いた。古墳時代である。紀元5世紀に朝鮮半島から横穴式石室が伝えられ、遺骸を埋葬する主体部を始め、墓制が大きく変化する。例えば、それ以前には主体部を盛り土の中に設置していたが、横穴式石室では下半分を地山に置き、上半分を盛り土で覆うようになった。横穴式石室の導入より少し遅れて、墓室全体を地山に築いた横穴墓が出現した。横穴墓は墓室に至る道がおおむね平らか、垂直かによって、横穴墓、地下式横穴墓(あるいは地下式古墳)と呼ばれてきた。前者は東北から九州の各地に分布し、後者は九州南部の限られた地域に分布する。最近、墓室に至る道が斜めになった横穴墓が宮崎県下で発見され、「折衷型」地下式横穴墓と命名されている。3者は地山を削り抜いて墓室を作る点で共通するにもかかわらず、異なる墓制のような印象を与える。そこで炭坑用語を借用して、墓道の形状により平坑(炭坑用語では水平坑と称するが、厳密に水平でないものもあるので「ひらこう」とする)式横穴墓・竪坑式横穴墓・斜坑式横穴墓と呼ぶことを提唱する。墓道が入口から墓室にかけて昇るものは従来から横穴墓とされてきたので、これは平坑式横穴墓に加える。

宮崎県下で探査を行ったのは2基の斜坑式横穴墓である。墓道は埋葬後にある程度埋められ、窪地として残っていたが、その後に堆積が進んで、墓道の所在が分からなくなっていた。墓の周囲には墳丘や土器などがなく、遺跡の所在そのものがまったく分からなくなっていた。

宮崎県を探査場所に選定したのは、この地が火山灰の様な堆積で探査に適していると考えたこと、県教育委員会が遺跡探査に積極的であったからである。

西都市西都原古墳群での探査と発掘調査

発掘調査で平坑式横穴墓および斜坑式横穴墓が確認されている場所を探査した。3 次につながる現地での探査と発掘調査の時系列は次の通りである。

第 1 次調査（測量と探査）1995年 7・8 月

- 1、宮崎県と西都市教育委員会によって発掘された、西都原古墳群酒元ノ上地区遺跡を調査地に選定し、まず、地形測量を行った。この地は西都原古墳群の南よりにあつて、南西に緩やかに傾斜する場所である。
- 2、斜坑式横穴墓の存在が確実な場所（A 地区）を、レーダと電気探査で探査し、地中からの応答パターンをチェックした。レーダ探査の結果は、考古学的に予測される遺構を明瞭にとらえることができたが、電気探査は発掘結果と照合してようやく推定できる程度であった。その理由は複合していると思われるが、地面が極端に乾燥していたことと、用いた 2 極法が適切でなかったのも一因であろう。
- 3、新たな横穴墓を探すために隣接地（B 地区）を探査し、レーダ探査で異常応答地点を 3 箇所発見した。うち 1 箇所は、後に、発掘後に砂を埋めた場所であることが判明した。2 箇所（X1・X2）の異常応答地点は考古学的所見から、空洞であり、墓道を共有するものと推定され、X1 推定空洞は X2 推定空洞より深いことが知られた。これを 7 号墓と名付けたが、この段階で墓道が斜坑式であるとの判断はできなかった。
- 4、B 地区における電気探査では径 1 m 以内の異常応答地点が認められたほか、深い場所では北東から南西に、浅い谷の埋没していることが推定された。径 1 m 以内の異常応答は、考古学的には縄文時代の集石遺構と推定されるが、発掘していないので確認できていない（西村 1997）。
- 5、推定空洞地点と非空洞推定地点の地中 20cm で温度調査を行った。測定開始の午前 8 時 45 分から 11 時の間は推定空洞地点が非空洞推定地点より摂氏 0.4 度から 1.7 度低く、午後には 2 地点間に相関関係のないことが明らかになった（挿図 2）（参考：挿図 6～8、1996 年測定）。以上で夏期の実験を終了した。

第 2 次調査（7 号横穴墓の探査と部分的発掘調査）1995 年 12 月

重点領域研究「遺跡探査」総括班（代表 西村 康）の援助を得て実施した。

- 6、レーダ探査で 7 号墓の発掘場所を限定した。あらためて行った、レーダ探査のスライス平面図では X1 推定空洞が径 1.8×2.1m 以上、2.8×3.1m 以内の南北に長い隅円方形、X2 推定空洞は径 1.8×2.1m 以上、2.9×3.2m 以内の南北に長い楕円形と判断された。
- 7、あわせて、地中温度調査を行った。温度調査では冬季にあつても推定空洞地点の地中温度が他より低いことが知られた（挿図 4、5）。地中温度調査では X1 推定空洞の大きさは東西 3 m 以内、南北 3 m 前後と推定された。
- 8、レーダ探査で墓道を特定し、16×18m の範囲の表土を剥ぎ、遺構検出面から墓道の 4 分の 1 を発掘した。その結果、X1 墓室入口の床は地表下 2.8m、X2 墓室入口の床は 2.1m にあつて、レーダ探査で X1 墓室が深く、X2 墓室がそれより浅いとした推定に合致することが

知られた(置田 1996)。

- 9、墓室前面まで発掘し、ボーリング棒で径10cmの穴をあけ、2つの墓室内部をNHK宮崎放送局の親指カメラでビデオに収めた。その結果、墓室は空洞を保っていて、X1墓室には白い棒状の大腿部と推定される骨、土師器椀2点、須恵器高坏1点があること、床は石敷きであること、少量の落下土が見られることなどが明らかになった。すなわち、土器は据え置いたままの状態、うっすらとほこりが積もっていた。高坏は長脚2段の特徴を持ち、6世紀末～7世紀初頭であることが知られた。X2の墓室は平たい鉄製品かと推定されるものが見えたが、他に遺物は見えなかった。なお、カメラ挿入部分から空洞までの距離はX1墓室では1.6m、X2墓室では1.4mあった。
- 10、X1墓室のカメラ挿入に先立って行った空洞内温度測定では、19.5℃で変動幅がほとんどなく、同じ時間帯の空洞上部の地中温度は9.10℃、地上の温度は16.18℃であった。すなわち、この時期の空洞内温度は地上温度や地中温度より高いことを示していた(挿図4・5)。以上で冬期の調査を終了し、埋め戻した。

第3次調査(7号横穴墓X1墓室の発掘調査)1996年9月

宮崎県教育委員会文化課が主体になり、重点領域研究「遺跡探査」総括班(代表 西村 康)の協力を得て、発掘調査を行った。発掘調査は墓道全体とX1墓室を対象とし、X2墓室は開封せずに保存することにした。X1墓室の開封にあたっては、考古学的な調査のほかに、形質人類学・分析化学・微化石学の研究者の参加を求め、土壌サンプルを採取して分析することにした。また、遺構の残存状況を調査し、以後の保存対策に資することを目的にした。

- 11、発掘調査の結果、墓道は長さ7.22m、幅4m、深さ3.1mあり、斜坑式であることが知られた。墓道の堆積は大きく3層に分かれる。下層は墓室から排出した黄色土、中層は墓室を閉鎖後に埋め戻した黄色土混じり褐色土、上層はその後に堆積した黒色土である。

中層上面にはまつりに用いたと推定される土器片がみられたほか、X2墓室の掘削の際にはある程度埋没していた墓道を、竪坑式に再発掘したことが観察できた。レーダ探査図ではこうした堆積層の細部を判読できていなかった。

- 12、墓室には流入土が認められたが、奥半分は当初のままの床が露出していて、うっすらとほこりがかぶったような状態だった。墓室の広さは東西2.55m、南北1.9m、高さ0.95mで、墓室に至る通路は幅0.51m、長さ1.85m、高さ0.85mである。墓室の大きさはレーダのスライス平面図の最大の大きさより約90%であり、地中温度で推定した大きさの約80%である。すなわち、レーダでは実際より1.1倍、温度測定では1.2倍大きく表れることを示している。
- 13、墓室を観察の結果、壁に小動物の穴があり、また、堆積土の上に雨落ちの穴があったりして、閉鎖後に外界の影響を受けていたことが知られた。
- 14、人骨、遺物の取り上げと並行して、土壌サンプル146点を採取した。出土遺物は、採集した細片も含めて、総数62点で、その内訳は須恵器19点、土師器19点、瓦3点、耳環5点、釵子1点、鉄鏃1点、刀子2点、鉄釘1点、不明鉄製品1点、砥石1点、炉礫9点である。このうち、ほぼ完形ないし完形に近い土器は、ほとんどが墓室からの出土である。
- 15、墓室開口前の温度は20℃、湿度100%で、墓室内での作業中は温度が上昇し、湿度は下が

る。これは作業用の電気の点灯と、換気の結果である。しかし、作業終了後に入口を土嚢で封鎖すると 2 時間ほどで温度は 25 で安定し、湿度も 100% に復する（挿図 9、10）。

16、すべての調査の終了後、目視で、墓室の残存状況を観察した。天井に亀裂が入り、数 cm の落差があって、天井が徐々に沈下しつつあると判断された。

形質人類学・理化学・微化石学分析の結果

17、形質人類学的研究は九州大学大学院田中良之教授、同大学院金宰賢助手が担当した。人骨取り上げに際しての観察では 3 体以上の埋葬であるとのことであった。墓室からは 2 対の耳飾りが出土しており、耳飾りを付けない人骨が別に 1 体以上あったのかもしれない。

18、理化学的研究は東京水産大学和田俊教授が担当した。分析に提供した土器は須恵器 4 点（A26・27・33・35）と土師器 3 点（A28・30・32）の計 7 点である。このうち A26 の須恵器は伏せて置かれていたもので、他の何かを盛りつけてあった可能性のある土器との、比較のための試料である（挿図 14）。和田氏の報告では、墓室内に据え置かれていた須恵器（A27）と高坏（A33）から、ドコサヘキサエン酸（DHA）およびイコサペンタエン酸（EPA）に相当するピークが見いだされた。これは魚介類に特徴的な脂肪酸であり、そうしたものを盛りつけてあった可能性を示唆するという（和田 1997・98）。和歌山県東国山古墳（6 世紀）出土の土器に貝殻、魚骨、靱が遺存していた例があり、和田氏の分析結果は考古学的予測とも整合する。

19、微化石学的研究のうち植物のプラント・オパール分析を宮崎大学藤原宏志教授、同大学宇田津徹朗博士が担当した。藤原氏の報告によればイネ（O. Stai.）・イネ粉（Rice g.）・ヨシ（Phrag.）のプラント・オパールは認められなかった。墓室内採取のサンプルからはタケ亜科属（banb）、ウシクサ属（ススキ Andoro）が多く認められた。墓室内プラント・オパールの組成は地表のクロボク層の組成と類似し、慎重な検討を必要とするというものであるが、民俗例にウシクサ属植物で敷物を作る例があり、遺骸の下にササの葉を敷いた可能性は否定できないというものであった（藤原 1997）。この墓室からは棺釘などが出土せず、遺骸を何で覆っていたかが不明である。この点、プラント・オパールの分析結果からは、植物質の敷物などで遺骸が覆われていた蓋然性が高いと判断される。

20、花粉分析、回虫卵分析研究は天理大学附属天理参考館学芸員（当時）金原正明氏、古環境研究所金原正子氏に依頼した。花粉の遺存はごくわずかであり、いずれも風媒花植物であるから、食物、供献に関連するものとは見なしがたいとの報告である。また、回虫卵により魚の種類を特定できないかを検討するため、DHA 分析に提供した土器内堆積物の残滓を分析した。その結果、回虫卵は検出されなかったが、当初から存在しなかったのか、分解によって失われたものかは判断できないという（本報告 第 2 章 5 1）。

まとめ

西都原での探査ならびに発掘調査の手順は以下のように行った。

地形測量 探査 部分的発掘 小型カメラなどによる内部撮影 埋め戻し 映像の検討 探

査・地形図から前の発掘地点を特定 発掘再開 関連科学者の参加 墓室内の温度調査 墓室に進入 人骨ほかサンプルの採取 考古学的発掘と並行してサンプル採取 サンプルの理化学的分析 総合的検討。

この実験では地上に墳丘などを残さない墓でも、レーダ・電気などの探査によって発見することが可能であることを明らかにした。また、地中温度でも探査可能であることを示唆した。但し、地中温度調査の場合はこれらが大きな空洞を保っていた墓であったからで、より小さな空洞も予測できるか、あるいは陥没した空洞でも予測できるかは今後実験を重ねる必要がある。

探査などで発見された未開封の墓を発掘するのに、あらかじめ小型カメラ、ファイバースコープなどにより内部を覗き、人骨・副葬品の遺存状態を観察することの有効性を実証した。この結果、西都原ではビデオに映った土器の型式から墓の年代を6世紀末～7世紀初頭と限定することができた。

墓室の開封には形質人類学、分析科学者の参加を求めることで、発掘調査を円滑に進めることができた。とりわけ人骨などが遺存している場合には、その取り上げに人類学者の参加を求める必要があるし、分析試料の採取は、専門家に依頼することにより、試料の汚染を最小限に抑えることができる。また、分析理化学者の参加を求めることで、資料の保存状況を伝えることができる。とくに、試料採取後に分解がすすむ物質については敏速な分析を求めることができよう。

本研究にかかわる関連の研究成果は次の通りである。

- 置田雅昭 1995, 地下遺構探査法の考古学的活用の実践,
文部省科学研究費補助金「遺跡探査」ニュースレター, No.14, 10-11頁.
- 置田雅昭・北郷泰道・Dean Goodman・高野政昭, 1995,
宮崎県西都原古墳群原口地域における第1次地中探査,
平成7年度九州史学会大会公開講演・研究発表要旨, 37頁.
- 置田雅昭・桑原久男・北郷泰道・Dean Goodman・山内紀嗣・高野政昭・小田木治太郎, 1996,
宮崎県西都原古墳群原口地域における調査,
文部省科学研究費補助金重点領域研究「遺跡探査」第4回研究成果検討会議論文集,
63-75頁.
- 金関恕・置田雅昭・Walter Edwards・Dean Goodman, 1997,
平成8年度地下遺構探査の考古学的実践活用,
文部省科学研究費補助金重点領域研究「遺跡探査」第5回研究成果検討会議論文集,
73-82頁.
- 藤原宏志・柳沢一男・武藤勲・佐々木章・宇田津徹朗, 1997,
宮崎：西都原および吾平原横穴墓の墓室におけるイネ科植物遺物,
文部省科学研究費補助金重点領域研究「遺跡探査」第5回研究成果検討会議論文集,
149-156頁.
- 和田俊・渡部徳子・木村茂・高橋和也, 1997,

遺構・遺物中の堆積物の化学分析による遺跡探査，
文部省科学研究費補助金重点領域研究「遺跡探査」第 5 回研究成果検討会議論文集，
177-195 頁．

西村 康，1997，地下式横穴探査 西都原古墳群

文部省科学研究費補助金重点領域研究公開シムポジウム（5）「遺跡探査」遺跡
探査の最前線，27-30 頁．

エドワーズ・ウォルター，1997，地下式横穴探査 - 西都原古墳群 - 西口地区第 7 号墓の発掘調
査，文部省科学研究費補助金重点領域研究公開シムポジウム（5）「遺跡探査」
遺跡探査の最前線，31-35 頁．

Masaaki Okita・Dean Goodman・Walter Edwards・Hisao Kuwabara, 1997,
Excavation of 6 th - 7 th Century A.D. Cemeteries in Miyazaki, Kyusyu,
Second International Conference on Archaeological Prospection.

和田 俊，1998，西都原横穴墓から見出された脂肪酸，
文化財と探査，VOL.1, No.1, 7-14 頁．

Walter Edwards・Masaaki Okita・Dean Goodman, 2000,
Investigation of a Subterranean Tomb in Miyazaki, Japan,
Archaeological Prospection, 7, 215-224 頁．

遺跡名の訂正について

調査の当初は遺跡名を西都原古墳群原口地区（西口地区と表記したのは単純な誤り）として
きたが、原口遺跡が別があり、宮崎県教育委員会文化課は当該地域を酒元ノ上地区と称すると
のことであるので、以後、この名称に改めた。

2 宮崎県の横穴墓の概要

東 憲 章（宮崎県立西都原考古博物館）

1) 分布と総数

宮崎県における横穴墓の分布は、北から順に 5 つの地域に大別される。

- ①五ヶ瀬川上流域の高千穂町、日之影町
- ②五ヶ瀬川下流域の延岡市
- ③五十鈴川下流域の門川町、日向市
- ④小丸川下流域から一ツ瀬川中・下流域、及び石崎川下流域の高鍋町、木城町、新富町、
西都市、佐土原町
- ⑤大淀川中・下流域の国富町、宮崎市

宮崎県南半部から大隅地域に分布する地下式横穴墓とは、④⑤の宮崎平野部で分布が重なる

ものの、地下式横穴墓が数多く群集する内陸部の西諸県・北諸県地域には、横穴墓は全く分布していない。また、鹿児島県においては、薩摩・大隅の両地域ともに横穴墓の分布は認められない。したがって、⑤の地域の曾井横穴墓が列島最南端の横穴墓となる。

県内全域の横穴墓の概要は、戦前から精力的に分布調査を行った曾我部長良による業績がある。『日向の横穴』『日向の横穴 続編』にまとめられた横穴墓の総数は1,048基である。各種開発事業が着手される前からの作業であり、その後の保護措置の基礎資料となった。しかし、分布図の作成が十分とは言えず、現在ではその存在が確認できないものもある。2001年に集成された資料で、現在確認できる総数は722基、そのうち調査が行われたものは241基である。

2) 横穴墓の構造的特徴

宮崎県内の横穴墓は、その分布からも推されるように、九州島東岸沿いに広がったものと、九州山地を越え西九州地域からの影響のもとに造営されたものの二つの系統が認められる。

前述した①の地域では、方形基調の玄室に、両側壁に沿って屍床を有する構造が特徴的であり、総じて天井は低く、平形あるいは緩やかなドーム形を呈す。

対して、②～⑤の地域では、縦型長方形プランの玄室に、天井部は寄棟の屋根形で高いものが多数を占める。床面には排水施設を設けるものや礫床のものが見られるが、屍床を有するものは認められない。

玄室規模は、最大のものが④の地域の隅ヶ迫5号墓で17.5㎡、最小のものは①の地域の今狩平2号墓で1.2㎡である。

3) 特殊遺物、墳丘、壁画

特徴的な出土遺物として、春姫登横穴墓（高千穂町）、千畑9号墓・7号墓（西都市）、池内B-1号墓の装飾大刀、千畑7号の方格規矩鏡、池内横穴墓（宮崎市）の銅碗がある。

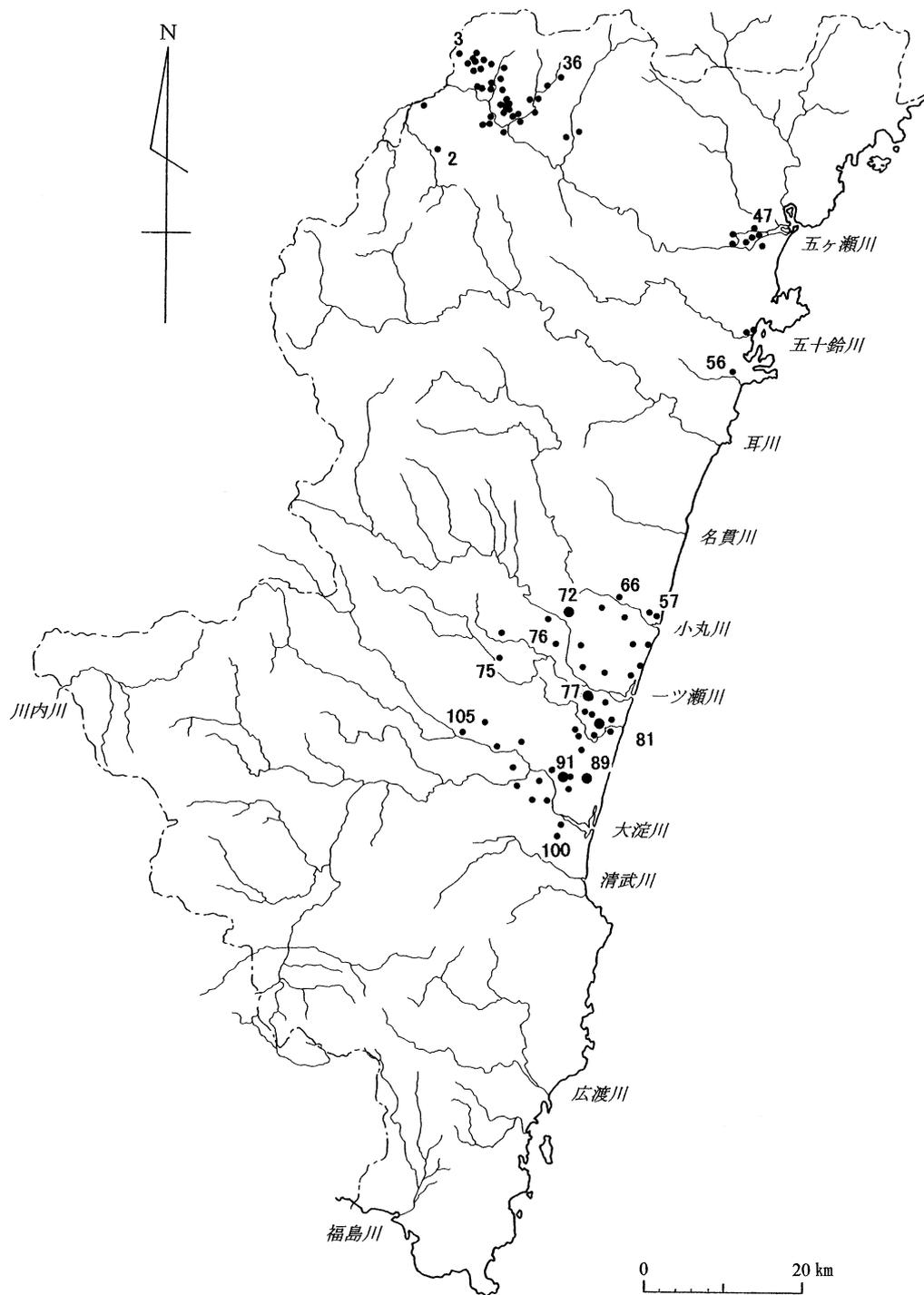
後背墳丘を有する横穴墓として、蓮ヶ池12号墓・53号墓（宮崎市）、酒元ノ上3号墓（西都市）がある。また、池内横穴墓A群、富吉横穴墓群（宮崎市）でもその可能性が指摘されている。

横穴墓では、家屋の構造を線刻や浮き彫りで表現した装飾が多く見られるが、祝田南1号墓（宮崎市）、広原1号墓・3号墓（宮崎市）、土器田東1号墓（佐土原町）、蓮ヶ池33号墓・53号墓では、線刻による具象画が見られる。土器田では、舟・馬・鳥・魚・人物が、広原では多数の人物が、蓮ヶ池53号墓では、舟・鳥・多数の人物・鬼面等が描かれている。

4) 築造年代

宮崎平野部である④⑤の地域では、玄室や墓道への須恵器供献が一般的であり、その年代観による横穴墓の出現時期は、TK43段階あるいは今少し遡る時期が想定される。築造の最盛期はTK209段階～隼上りⅠ段階であり、隼上りⅢ段階には築造を停止する。

他の地域では不明な点が多いが、①の地域では、須恵器の供献は逆に例外的で、刀剣や鉄鎌、馬具といった鉄製品が中心に副葬される。鉄鎌の形態等から、宮崎平野部よりも早く、6世紀を前後する時期には出現した可能性が高く、それは九州中西部に近いという地理的条件によるものと考えられる。



挿図1 日向（宮崎県）の横穴墓分布

第Ⅱ章 西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓

1 位置と環境

東 憲章

西都市街地の西、標高60～80mの洪積台地を中心に展開する国指定特別史跡西都原古墳群内に立地する。古墳群には、総数311基の高塚古墳（2基の陵墓参考地を含む。）と数十基の地下式横穴墓が混在する。高塚古墳は、前方後円墳31基、方墳1基、円墳279基がいくつかのグループを形成しながら展開し、3世紀末頃から7世紀初頭まで造営された。

地下式横穴墓は、鉄製短甲3領、刀剣、鉄鏃、乳文鏡、玉類、金製装具など豊富な副葬品と最大の遺構規模を誇る4号墓を筆頭に、豎坑が楔形に長大化の傾向を示す堂ヶ嶋地下式横穴墓群まで、5世紀後半から7世紀前半に造営されている。

酒元ノ上地区横穴墓群は、古墳群のほぼ中央、鬼の窟古墳から南に300mの、開析谷に面した西向き緩斜面に立地する。平成7年、農地整備事業に伴う事前調査で発見され、ただちに現地保存された。発掘調査や地中探査によって、10本の長楔形の墓道と、二重周溝を有する円墳1基、小墳丘（3号墓道に伴う）から構成されることが判明した。1～7号墓道は、西向き緩斜面に掘削されているが、8～10号は平坦面から掘削されている。

墓道奥壁にのみ主体部を有する1墓道1穴のもの（1号、2号）と、墓道奥壁と側壁に主体部を持つ1墓道2穴のもの（3号、4号、6号、7号、8号）に大別される。5号、9号、10号は未確認であるが、墓道の規模から後者と同じく1墓道2穴タイプと推定される。

主体部は、玄室プランに長方形、略方形、不正楕円形などが見られ、いずれも平入り（横型）両袖である。天井部はドーム形で低く、U字形や長方形の工具による掘削痕が観察される。線刻や朱彩、棚状施設や排水施設は見られない。玄室床面は、礫床のものと素掘り床の両者が見られる。屍床や棺は認められないが、素掘り床のものも、頭部と足下に人頭大の川原石を配している。閉塞は板によるものと思われ、羨道入り口部に立てかけ、外側から川原石で固定したものと思われる。墓道埋土の観察から、埋葬後に閉塞板が覆われる程度までは埋め戻され、その後は長期間かけて自然埋没したものと判断された。墓道埋土中に、焼土や破碎された須恵器片が確認されたことから、比較的長期にわたる墓前祭祀が行われたと推定される。

同横穴墓群の最大の特徴は、各主体部の羨道入り口前の床が、方形や楕円形に5～10cm程度の深さで掘り込まれていることである。埋葬行為の際に機能的な面で意味を成さないこの掘り込みは、地下式横穴墓の豎坑を意識したものであろう。墓道を伴い、壁面に羨道と玄室を掘削するという横穴墓のスタイルを採りながら、主体部のみは、豎坑の痕跡や玄室の形態など地下式横穴墓の伝統を保つ。まさに二つの墓制が融合した形態であり、出土須恵器（隼上りⅡ段階）による年代観からも、地下式横穴墓の終焉と横穴墓への転換という墓制の画期を物語るものである。

2 参加者一覧と調査日誌

置田 雅 昭

西都市酒元ノ上地区横穴墓群第1次現地調査(1995年7月24日～8月2日)参加者一覧

天理大学関係 置田雅昭・高野政昭・竹谷俊夫・藤原郁代

山本謙作・吉田綾子・山下直樹・古川 毅・矢持久民枝・永田朋子・八重樫
由美子・吉岡 潤・石田祐子・岸見康宏(以上学生) 堀口 謙(卒業生)

宮崎県関係 北郷泰道・東 憲章

奈良国立文化財研究所 西村 康

兵庫県教育委員会 西口和彦

マイアミ大学地球物理学応用考古学探查研究所中島研究室 Dean Goodman・前畑幸雄

西都市酒元ノ上地区横穴墓群第2次現地調査(1995年12月17日～27日)参加者一覧

天理大学関係 置田雅昭・Walter Edwards

川竹恵梨花・山本謙作・佐伯純也・池田和雅・原 知子・薄 和義・近藤奈
津子・八重樫由美子・波戸崎由美子・山田久恵・浅沼千裕・橋川敬子・永田
朋子・松田知之・古川 毅・深川義之・東山喜一・吉岡 潤(以上学生)

宮崎県関係 北郷泰道・東 憲章

奈良国立文化財研究所 西村 康・高妻洋成

宮崎大学 宇多津徹朗(プラント・オパール分析担当)

九州大学 田中良之・金 宰賢(形質人類学分析担当)

帝京科学大学 中條利一郎(科学分析担当)

東京水産大学 和田 俊(食品化学分析担当)

兵庫県教育委員会 西口和彦

マイアミ大学地球物理学応用考古学探查研究所中島研究室 Dean Goodman・前畑幸雄

西都市酒元ノ上地区横穴墓群第3次現地調査(1996年9月5日～15日)参加者一覧

天理大学関係 置田雅昭・Walter Edwards

川竹恵梨花・山本謙作・佐伯純也・池田和雅・原 知子・薄 和義・近藤奈
津子・八重樫由美子・波戸崎由美子・山田久恵・浅沼千裕・橋川敬子・永田
朋子・松田知之・古川 毅・深川義之・東山喜一・吉岡 潤(以上学生)

宮崎県関係 北郷泰道・東 憲章・長津宗重

奈良国立文化財研究所 西村 康・高妻洋成

宮崎大学 宇多津徹朗(プラント・オパール分析担当)

九州大学 田中良之・金 宰賢(形質人類学分析担当)

帝京科学大学 中條利一郎(科学分析担当)

東京水産大学 和田 俊(食品化学分析担当)

兵庫県教育委員会 西口和彦

西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓第1次調査日誌(永田・岸見作成日誌を基に高野が加筆)

1995年7月23日(日) 晴れ 時々 曇り(台風のため大シケ)

午前、天理大学調査団一行、宮崎に到着。

7月24日(月) 晴れ

8時30分 作業開始。

調査区全体(A・B・C地区)の草刈りに入る。背丈を越える夏草に悪戦苦闘。

測量会社によって座標杭が打ち込まれる。

午後、B地区の杭打ち。

草刈り続行。A地区、C地区草刈り完了。

17時 作業終了。

7月25日(火) 晴れ

8時30分 草刈り・測量・杭打ちの班に分かれて作業開始。

測量班は主にA地区の測量。

杭打ち班は電気探査のためのA地区の杭打ちと、全地区の杭の高さを測定。

17時 作業終了。

7月26日(水) 晴れ

8時30分 測量・電気・レーダの班に分かれ作業開始。

測量班は前日に引き続き、A地区及びB地区の地形測量。

電気班は、兵庫県教育委員会の西口先生の指導を得、宮崎県がすでに発掘調査を実施した箇所より1m東側のポイントラインを設定し2極法で1ライン探査。

その後同じ地区でウェンナー法を用い7ラインを調査。

レーダ班は、電気班と同じくA地区の発掘調査が行われた場所より東を探査。午後からは、B地区南をレーダ探査。

17時30分 作業終了。

7月27日(木) 晴れ

8時30分 測量・電気・レーダの班に分かれて作業開始。

池内横穴墓群調査班1班は、A地区草よけ作業後、池内横穴墓地形測量のため10時より宮崎市市内へ移動。

測量班はB地区の地形測量後、A地区の杭の高さを測定。

電気班はA地区の発掘された地域も含め、30mの幅で東の限界点まで2極法で探査。

レーダ班はB地区全体を探査、午後よりB地区南の三角地帯を探査。

B地区南東部に空洞応答があったことから、墓室と羨道の存在を推定する。

16時30分 作業終了。

7月28日(金) 晴れ

8時30分 測量・電気・レーダの班に分かれて作業開始。

測量班はC地区南の西都原古墳群200号墳を測量した後、前日までの測量不足分を補う。

電気班は兵庫県埋蔵文化財センターの西口氏、奈良国立文化財研究所の西村康先生の助言を得、B地区の南半分約500㎡を探査。午前中は奈良国立文化財研究所の磁気探査RM15型機で、2極法1m間隔で作業。午後からは天理大学機で、2極法2m間隔で探査。

電気探査は土が極端に乾燥しており、常に電極棒を刺すポイントに水を差しながら測定を行う。

レーダ班は宮崎県の発掘調査済の地区の東側に続いている羨道と墓室のレーダによる確認作業を行う。良好な成果を得た。

17時 作業終了。

7月29日(土) 晴れ

8時30分 測量・電気・温度調査班に分かれて作業開始。

測量班は午前中B地区に補助杭を打った後、他班を補助。

電気班はC地区に探査区を設定。2極法で探査を実施。

終了後、前日行ったB地区での探査範囲を確認。

温度班はA地区において30m×6ラインの探査地区を設定、1m毎に地中温度を測定する。

終了後、A地区において土壌サンプルを採取。

14時30分で作業を終了し、西都原古墳群を散策した後、宿へ戻る。

7月30日(日) 晴れ

8時30分 宮崎市内に位置する池内横穴墓群に全員で移動。

10時到着 池内1班と共に地形測量を12時まで行う。

午後より自由行動。学生は、西都原調査期間中唯一の休日を楽しむ。

この日、池内調査1班と2班が交代した。

7月31日(月) 晴れ

8時30分 作業開始。

終日レーダ探査に重点を置いた作業となる。

9時より任意ポイント(空洞からはずれていたことが後に判明)にて地中温度の定点調査を10分ごとに行う。

A地区の発掘調査済地区から外れた地区で、マイアミ大学機でレーダ探査が行われ、午後からはB地区南半分において、同じくマイアミ大学機によってレーダ探査が行われる。

また、C地区で天理大学機による探査を行った後、A・B地区の境で探査を行った結果、異常応答地点を発見する。

17時 作業終了。

8月1日(火) 晴れ

8時30分 作業開始。

前日までのデータ分析の結果、A・B地区の境に半地下式横穴墓があると推測されるため、この地区に重点を置いた作業となる。

前日、マイアミ大学機ではこの地区のデータを採らなかったため、朝一番で調査が行われる。

結果、やはり空洞と思われる異常応答が確認される。

この地区に、異常応答地点 A と通常応答地点 B を設定し、定点地中温度調査を午前中は10分ごとに、午後からは30分ごとに行う。

レーダ探査の後、同地区を2極法で電気探査する。

また、C地区で天理大学機によってレーダ探査を行おうとするが、機材が揃わず断念する。

B地区においてボーリング調査を行い、土壌サンプルを採取。

18時30分 作業終了。

8月2日(水) 晴れ

8時30分 作業開始。

前日に引き続き、異常反応地点 A と通常応答地点 B において、定点地中温度調査を行う。

C地区において天理大学機によってレーダ探査。

西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓第2次調査日誌(永田・岸見作成日誌を基に加筆)

1995年12月17日(日) 曇り のち 晴れ

午前。天理大学調査団一行フェリーで宮崎入り。

12月18日(月) 曇り のち 雨

8時30分 現地到着。

A地区南端部において、温度・湿度測定を開始。

草刈り班と実測班に分かれて作業を開始する。

実測班は、夏の調査で打ち込まれた杭を基に調査地区を設定。2m間隔に杭を打ち込む。

10時 夏の調査結果を基にB地区で天理大学機レーダの試運転を行い、異常応答地点を再確認する。

異常応答地点と通常応答地点の2地点に地中温度探査用の温度計を設置する。

午後、マイアミ大学機レーダで調査地区全体を探査。

その後、天理大学機でレーダ探査と電気探査を並行して開始するが、レーダのケーブルと電気探査のコードが交差することによって、波形と数値に影響を及ぼすことが分かったため、レーダ探査を先行して行う。

電気探査は2極法で行った。

実測班は継続して杭打ちを行い、それぞれに高さを落とす。

夕刻、地中温湿度計をB地区に移し、地中温度計とともに一晩中計測するようにセットした後、作業を終了。

なお、この温度・湿度計は調査期間中可能な限り継続して測定することとする。

12月19日(火) 晴れ

8時30分 温度調査班・草刈り班・崖面削り出し班に分かれて作業開始、前日からの定点温湿度調査は継続する。

温度調査班は、調査区に13ラインを設定し1mごとに各店の地中温度を測定。

その後、茨城大学の岡本先生一行による平面と崖面(断面)の赤外線写真の撮影と伝熱調査

が行われる。

草刈り班は、A地区で草を刈りつつ夏の調査の際に使用した杭の確認作業。

合間を縫って、B地区北にビティーを組み立てる。

11時 発掘調査地区の設定を行った後、鍬入れ式を行い、表土剥ぎに移る。

午後、各班作業続行。

地中温度調査は、前日と同じく一晩中継続して測定する。

作業終了後、東京工業大学はA地区で同大学パルスレーダの試運転。

12月20日（水）曇り のち 晴れ

8時30分 作業開始。

全員でトレンチ内黒色土を掘り下げ、一部アカホヤ層を検出する。

A地区では、東京工業大学による磁気探査が行われる。

午後、作業続行。

温度調査班は、崖面に4ラインを設定し断面の温度調査。

明朝までの地中温度計をセットし作業を終了する。

12月21日（木）晴れ

8時30分 作業開始。定点温湿度調査続行。

平面はアカホヤ面を追う形で掘り下げ、断面は墓道の掘り込みと思われる箇所を精査。

ビティーが午後から行われる磁気探査に影響を与える可能性があるため解体する。

10時30分 掘り下げた面のみ電気探査を2極法で行う。

その後、同地区で1mごとの温度調査を行う。

午後、B地区全体で東京工業大学による磁気探査が行われる。

この間、12時から16時までは2地点間温度調査を中止する。

天理大学一行は、この探査中作業ができないため西都原古墳群を散策する。

15時30分 作業再開。

掘り下げを続行する。

断面の地中温度を測定した後、作業終了。

12月22日（金）晴れ

8時30分 作業開始。定点温湿度探査継続。

発掘調査地区全体をアカホヤが粒状にできるまでそろえる。

断面は精査した後、分層。

遺物の取り上げとビティーの組み立てを行う。

午後、遺構検出作業により調査区北部に横穴墓の墓道が及ばないことが分かったため、調査地区を狭めて調査続行。

崖面の断面図を作成。

15時30分 天理大学機レーダを調査地区の西から東へ走らせ再々度確認した後、作業終了。

12月23日（土）晴れ

8時30分 作業開始。定点温湿度調査続行。

調査地区南部で天理大学機レーダを西から東へ走らせ、墓道を確認。

遺構精査を行い、墓道のセンターに任意のラインを設け、四等分した一部をトレンチとして掘り下げを開始。

崖面は墓道の底を追って掘り下げ、並行して平板実測を行い、この日の作業を終了する。

12月24日(日) 晴れ 時々 強風

8時30分 作業開始。定点温度調査は続行。

トレンチ内で空洞推定地の東面・北面の2点と通常地点1点、計3点の地中温度調査を行う。墓道トレンチの掘り下げ・壁出しと、現地説明会のためのパネル作り、レーダ・電気探査の準備、現場のテープ張りなどをする。

12時15分 トレンチ東面に追葬時のものとみられる羨門が地表面より約250cm下で見つかる。

13時 鬼の窟古墳の現地説明会組とトレンチ周辺掃除組とに分かれる。

14時 現地説明会。宮崎埋蔵文化財センターの主催で、レーダ・電気探査の実演も行う。好評であった。

現地説明会の後、片付けをして作業終了。

12月25日(月) 晴れ

8時30分 作業開始。定点温湿度調査は続行。

B地区墓道トレンチ北側において、できる範囲のみ2極法で電気探査を行う。

9時 NHK宮崎放送局到着。墓道北側羨道のボーリング開始。

9時41分 直径約10cmの穴が貫通。温度測定の後、NHK宮崎放送局の親指カメラ挿入。

トレンチ東面において3点間地中温度調査開始。

10時59分 親指カメラにより玄室内に人骨確認、あわせて、須恵器の高坏や土師器の坏もみられた。

発掘調査地区の東側の埋め戻し開始。

墓道東側羨道のボーリング開始。

14時 墓道北側側面において2点間定点温度調査を開始。

14時30分 貫通、温度測定の後、親指カメラ挿入。

16時 片付けの後作業終了。

12月26日(火) 晴れ

8時30分 作業開始。定点温度調査続行。

墓道周辺に実測のための杭打ちをした後、墓道内部の断面図と周辺の平面図作成。

調査地区南側の埋め戻し開始。

記念レンガの作成の後、墓道底に砂を敷き、ここにレンガを納め墓道の埋め戻し。崖面の土嚢積みを開始。

16時30分 作業終了。

12月27日(水) 晴れ

8時30分 作業開始。

全域を埋め戻す。

10時30分に終了し、土壌サンプルの採取をB地区調査区の西側で行う。

12時 一連の作業を終え、西都原古墳群遺跡探査第2次調査を終了する。

西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓第3次調査（エドワーズ作成日誌を基に加筆）

1996年9月6日（金） 晴天

午後、1時に現場に到着。柳田宏一（県文化課）指揮の元、作業員が除草および表土剥ぎ。去年発掘の墓道輪郭が確認できた面で止める。今年の調査区域は次のように設定した。

- ・東側：去年の発掘範囲の東側の境界線と平行して、3m西にした。長さは、去年の線の4mの杭より10mの杭までの間のみ。
- ・北側：去年の発掘範囲と同じ。
- ・西側：去年の発掘範囲と同じ。
- ・南側：東側の線の10mの地点より西に、東側の線と直交して、去年の南側の線に接するまで線を引いた。接点より西は、去年の南側の線をそのまま利用する。

9月7日（土） 晴天

午前、去年の発掘上面を精査し、去年掘った墓道の4分の1の範囲を下げ初めた。主軸、または主軸と直角する線を切り直して、新しい主軸の北端を去年のものより約40cm西へくるように据えた。

午後、去年掘った墓道の範囲を掘り直して、新しく設けた主軸とそれに直交する線（主軸より東の部分）で新たな断面を作る。

なお、X1の入り口より南へ20cmぐらいのところ、X1ののぞき穴より40-50cm高い位置で、須恵器1片が断面に現われた。去年つくった土層図で言えば、「下方の赤黒土」の中にあたるが、この層は墓道を埋め戻したときの土と思われる層（黄色土魂混じり黒土）の上に位置し、羨道に流れ込むような形をなしている。埋葬後、ある期間がたってから堆積した土の中に、この土器片が破片のまま流れ込んだのではないかと思われる。

9月8日（日）晴天

午前、切り直して掘った墓道の北東4分の1の東・南壁を掃除し、写真撮影を行う。

午後、北東の4分の1の壁は、東さんによって層分けが行われた後、学生（山本、池田）が断面図を作成。主軸より西へ40cmのボークを一時的に残して、作業員によって北西の4分の1を掘り下げ（黒褐色土の下層まで）、同じように主軸と直交する線より南へ40cmのボークを一時的に残して、南東の4分の1を地山まで掘り下げ。南東の4分の1の南壁を精査。作業員によって、東側のボークと北側のボーク（北端から主軸の交差点より1.2m付近まで）を掘り下げ。

羨道の2分の1を発掘するうち上部が開口、写真撮影には小さいので掘り広げる。5時撮影の準備開始、6時30分終了。墓室に温室時計を設置し、羨門に土嚢を積んで帰る。

夜、NHK 宮崎が墓室の様子を放映。

羨道の中に入り込んだ土を断ち割って東の方（北東4分の1）を掘って、羨道の天井から堆積層まで50cmぐらいの隔たりが開いた地点まで奥へ進んだ。最後の50cmぐらいは羨道の床面より10cmぐらいの土を残した。そこから覗いて、玄室の中に土師器の椀が右壁付近、真ん中の手前、左寄りの奥め（須恵の高坏の右）にそれぞれ一個ずつ観察された（置田先生による

と、左側の手前にもう一個あると言う)。

また、左側の側壁に下顎があって、その左側が入り口の方へ向けられている。Ramus は部分的にしかないが、大歯臼2本を含む歯は良好な状態で残っている。中央の奥の方に大腿骨があるが、みたところでは4本の骨(つまり、2体分)が不自然な関係にある。このようすからすると、これらの骨は最初に置かれた位置ではなく、少なくとも一度骨になってから動かされているように思われる。なお、高坏より左の方へ、床面に置かれている石の間から白い粒のように見えるものが3つくらいあったが、これも骨の破片かも知れない。

9月9日(月)晴天一時雨

午前、昨日の最後の作業で羨道の中の土を多くとったため、玄室の中をより細かく観察できた。羨門を閉じた板の痕跡を探すが、全く見えない。むしろ、下層2層には何の変化もなく、墓道から羨道に土砂の流入状況を観察できた。上層も同じ感じ。

午後、墓道の南端付近に須恵器平瓶の2分の1くらいの破片が、黄色粘土ブロック混じりの黒褐色土より現われた。羨道主軸より西側に堆積していた土を床面より10cmぐらいの高さまで下げて、主軸に沿って土壌のサンプルを取る。

9月10日(火)晴

置田3時まで現地作業、所用で天理に帰る。エドワーズも所用のため現地不在。県教育委の方と学生で現場運営。

墓室内の写真撮影。金さん、墓室内人骨の取り上げ。墓道断面図の分層。

9月11日(水)晴

墓道堆積層の写真撮影。墓道の平面図を平板実測。墓道出土の須恵器の撮影と取り上げ。墓室内の距離設定。

9月12日(木)晴天のち雨

午前、天理から宮崎へ戻って、12時過ぎに現場に入る。

午後、玄室内で、グリッドに番号を付ける。すなわち奥から羨門に向かって1、2、3、4、5、西から東に向かってA、B、C、D、E、Fとする。

奥から土を取りながらグリッド毎サンプリングした(ただし、A1グリッドとF1グリッドはサンプルを取らなかった)。エドワーズがE1、D1、とF2グリッドでサンプルを取った。D1グリッドは大腿骨などが集中していた範囲で、骨の破片がかなり残っているので、形のわかりそうなものを収集した。なおグリッドの南西隅付近で、黒褐色土層中に四肢の骨の破片と思われた物を手に取って見たら、刀子であった。

出土状況の写真を撮るための掃除を学生に任せたら、事情がわからずに刀子の下の黒褐色土まで取り上げて、床面を出してしまった。出土状況は床面の直上ではなく、それより2-3cmぐらい高く黒褐色土層の中からであって、しかも斜めに置いてあったので、玄室が作られた時からある程度経過した時点でその位置に置かれたのであろう

9月13日(金)晴天

玄室内サンプリングは一通り終る。D4、D5グリッドの西側に残したボークを除いて、掃除も一通り終わったが、3ライン(A3からF3)より北は石が多くて、床面はまだ出していない。

羨道と玄室の境に横たわっている須恵器は、台付のもので時代は8世紀に入りそうなので、玄室内の土器よりずいぶん新しい感じがする。この土器は、羨道の北端の床面に置いてある大きな石の上より、土圧で北東の方向に落ち込んだ可能性があって、元は石に乗せてあったのかも知れない。また、この石のすぐ北側に、床面に回りより一段と黒い土が帯状に東西に延びていて、羨道の先端に設けられた閉塞施設の名残かも知れない。すると、石と須恵器は、閉塞後に「墓前」に置かれた可能性もある。

9月14日(土) 晴天

午前、玄室内の遺物撮影(4ラインと3ラインの鉄製品を除く)後、遺物のレベルを入れた。午後、1-3ラインの実測済み(レベルを含んで)の遺物を取り上げた。土器の一部を、和田俊先生が持って帰る。宮崎大学の藤原先生らが現場を訪れ、2と3ラインのBからE列のグリッドでプラントオパール分析のサンプルを取った。D4-D5グリッドに残っていたボークを外し、CとD列の4・5ラインのグリッドを写真撮影のために掃除をした。その際、C4グリッドから金銅耳環が出土した。CとD列の4・5ラインのグリッドの写真撮影後、取り上げた。

9月15日(日) 晴天

午前、C4、C5、D3、D4グリッドに残っていた遺物は、写真撮影後に取り上げた。写真のための掃除をするときに、玄室内の西側壁の南半分、溝らしい落ち込みがあって、左側の袖に続くように見えるので、一応は排水用の施設として考えられる。しかし、玄室内の敷石の回りに相当するところなので、敷石と比べて掘りやすいだけに掘り過ぎたから溝状になっている可能性もある。また、玄室は全体として北から南へと低くなるので羨道までは排水の役割が果たせるが、羨道自体は南から北へ向けて低くなるから、排水溝として設けられたかはやや疑わしい。

午後、学生(佐伯、山本)によって上層の敷石が実測された後、取り外して下層の敷石の掃除をした。上層から落ちてきた骨片及び歯以外は、下層の敷石の上面に埋葬関係の出土品が意外に少なかった。

奥の石の間や上面の黒い土は、粘りが強くて真黒な色をしている点で墓道の土層と多少性格の違うものに見える。埋葬関係の有機物が腐って、羨道から流れ込んだ少量の火山灰と混ざってできたものだと思う。

9月16日(月) 晴天

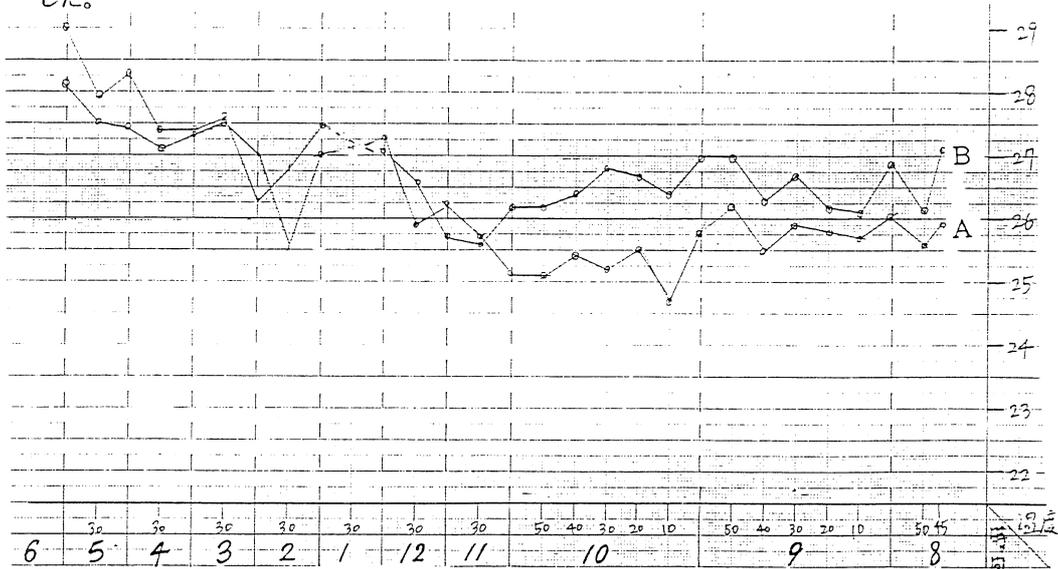
午前、玄室の下層の敷石を掃除した後、撮影が行われた。また、外では全体を掃除した後、全景写真と記念写真の撮影を行い、11時30分に作業を打ち切った。

挿図2

西都原古墳群酒元ノ上地区第1次調査 (1995年8月1日)

2点間地表温度調査データ (A空洞応答地点、B 4m離れた通常応答地点)

最初の温度調査はデジタル温度計を用い、手作業で行った。この作業で午前8時から11時の間は空洞上の地表温度が低く、午後には2地点間に相関関係がなくなるを見いだした。

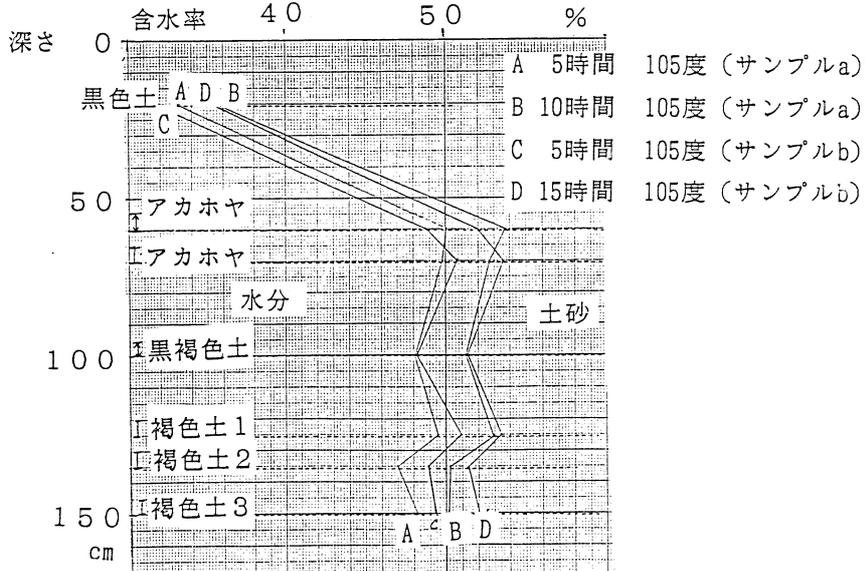


挿図3

西都原古墳群酒元ノ上地区第1次調査

土中含水率曲線 (1995年8月1日1時採取土壌、岸見ほか測定作図)

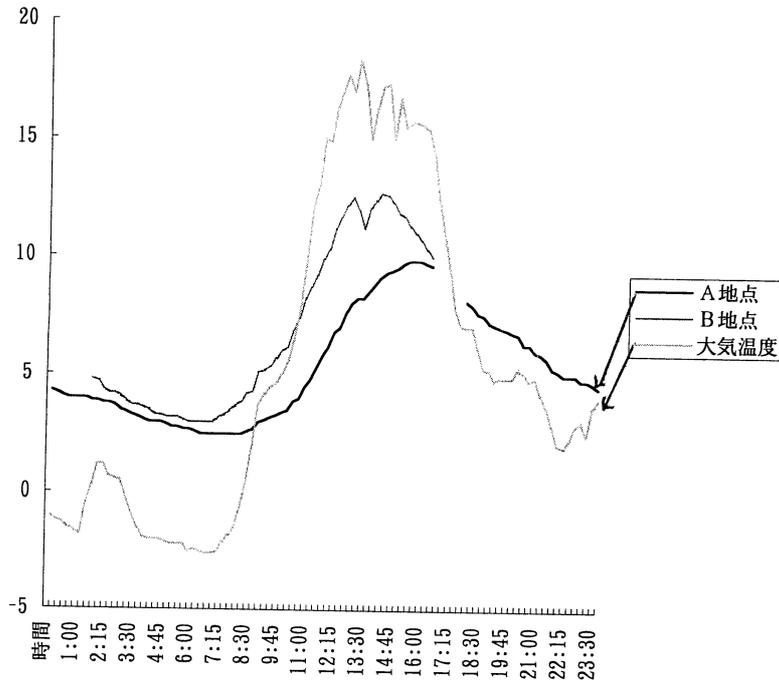
地表下50cm以下では含水率が50%前後を推移する事を見いだした。



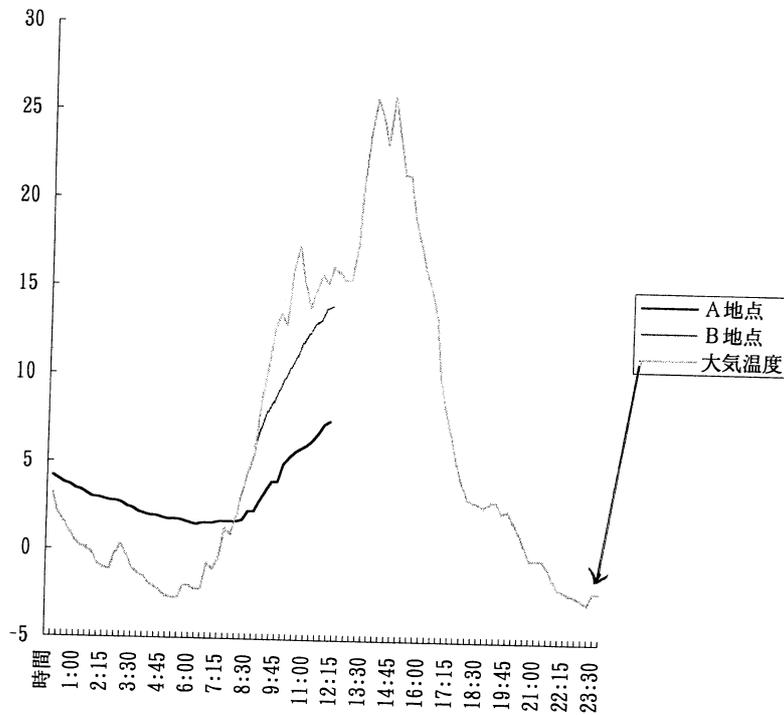
挿図4

西都原古墳群酒元ノ上地区第2次調査(1995年) 温度調査データ

2点間温度調査12月20日



2点間温度調査12月21日

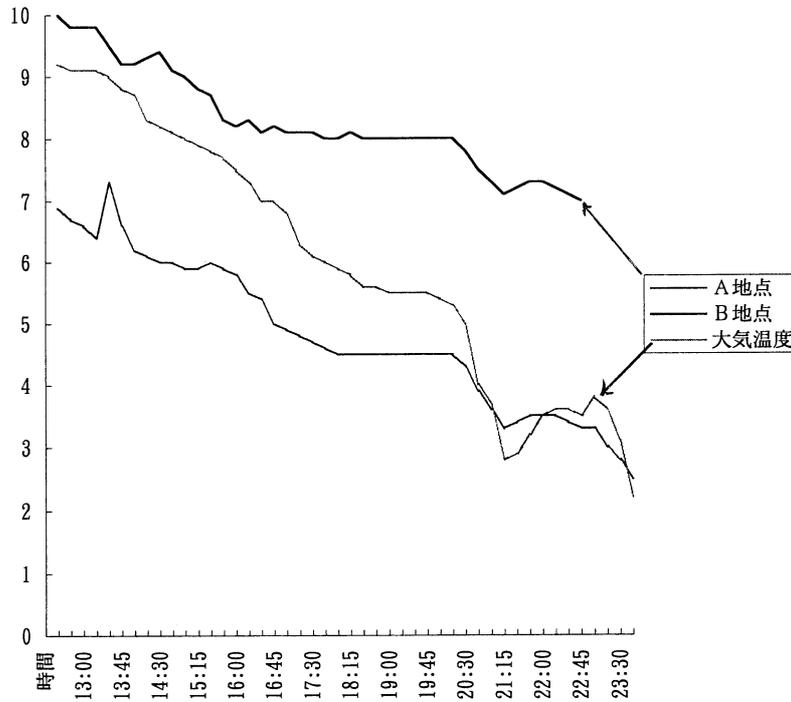


測定地区：B地区トレンチ内
 測定地点：A，北側玄室上と思われる異常応答地点（表土はぎ取り後 黒色土）
 B，通常応答地点（トレンチ外草地）
 大気温度，地表から15cmの地点

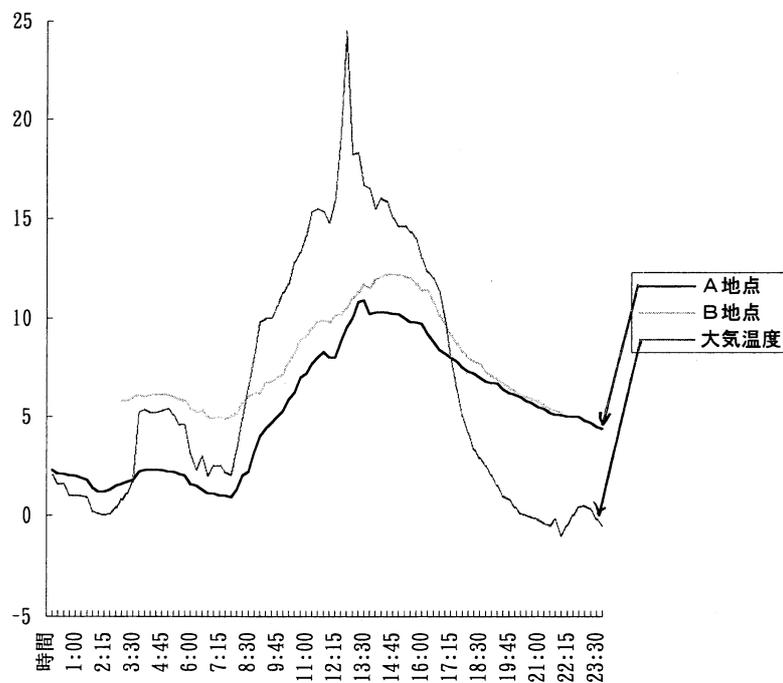
挿図5

西都原古墳群酒元ノ上地区第2次調査(1995年) 温度調査データ

2地点間温度調査12月18日



2点間温度調査12月19日



測定地区: B地区トレンチ内

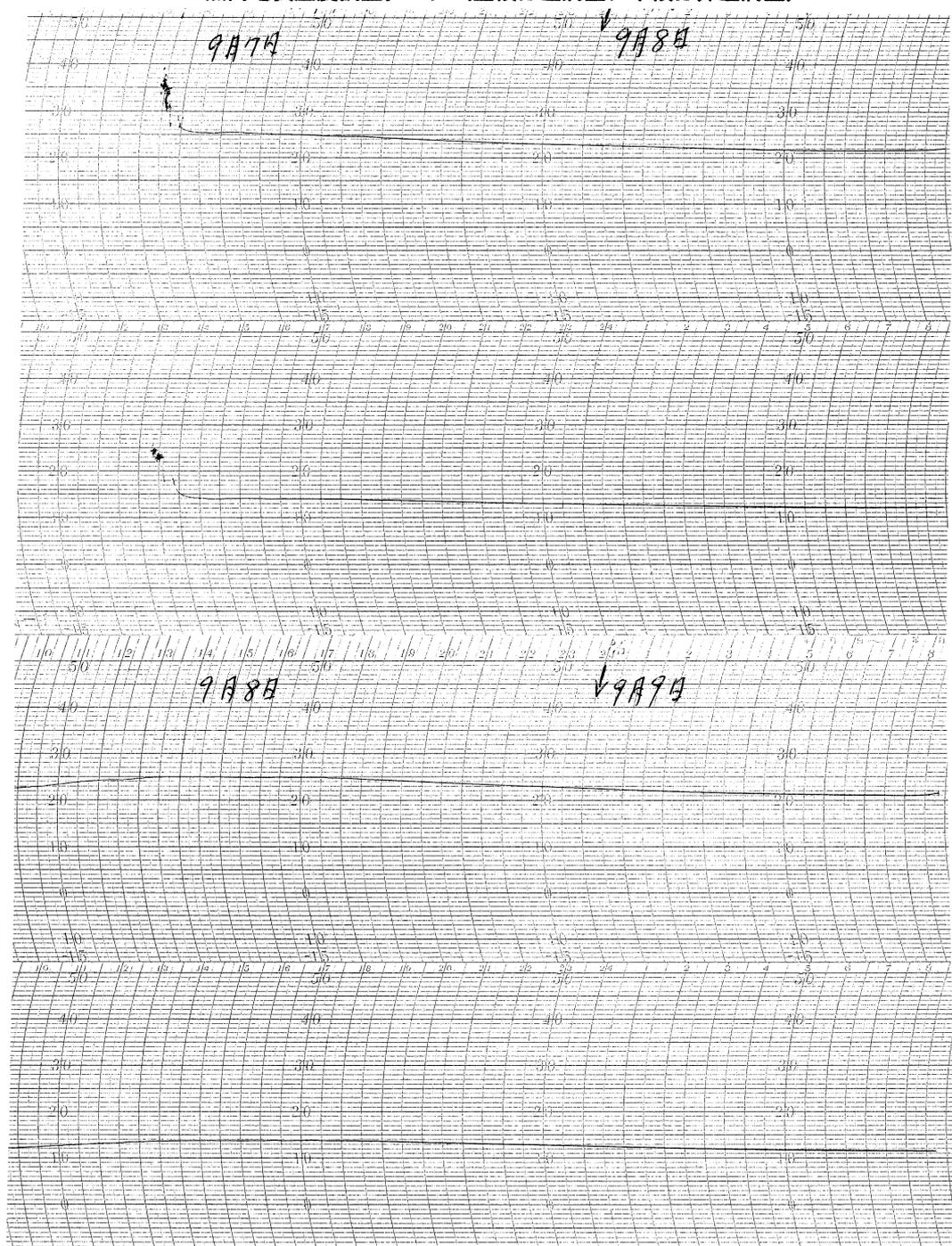
測定地点: A, 北側玄室上と思われる異常応答地点(半草地)

B, 通常応答地点(12時30分~16時30分 耕作土)
(16時30分~)

大気温度, 地表15cmの地点で測定。

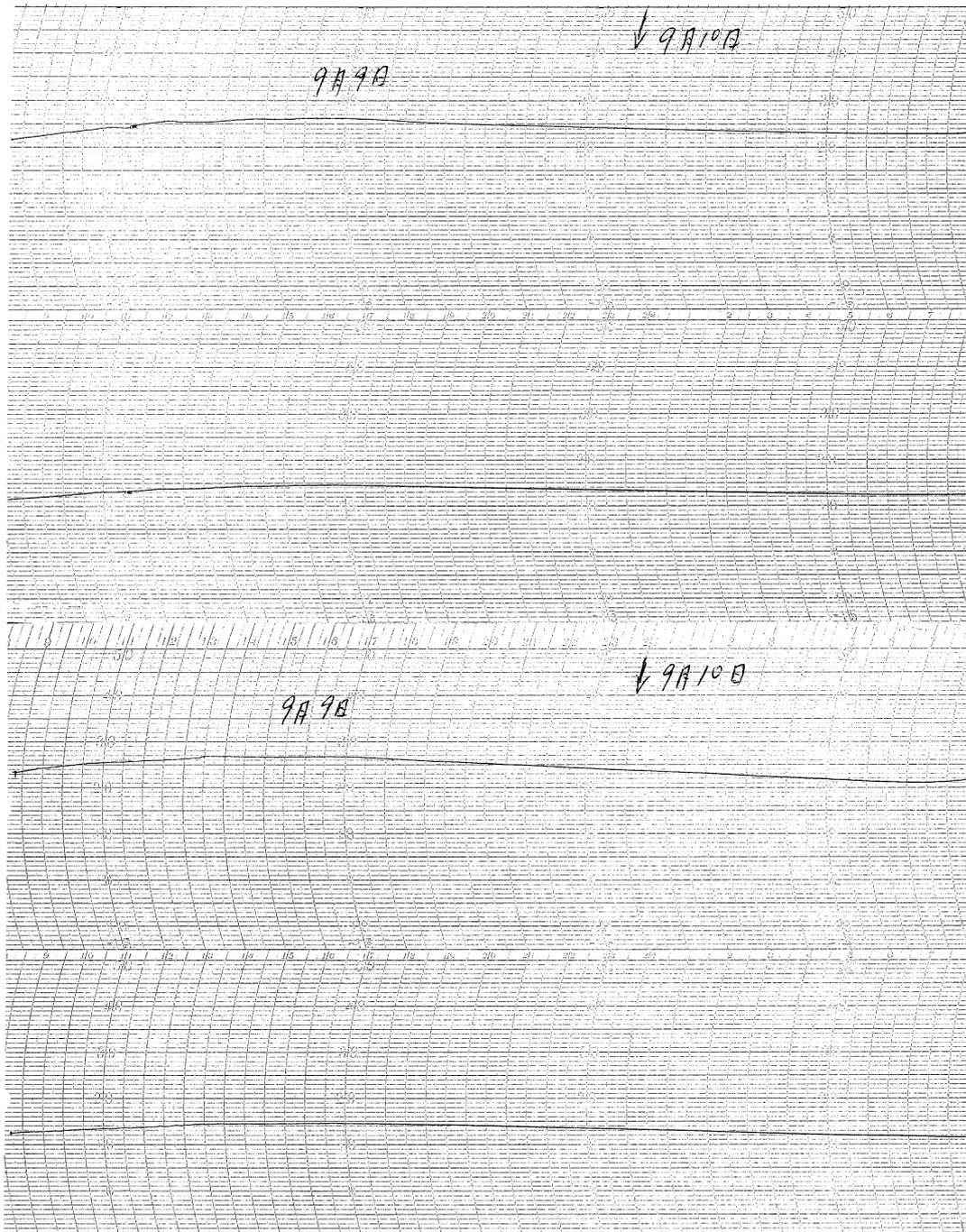
挿図6

西都原古墳群酒元ノ上地区第3次調査(1996年)
2点間地表温度調査データ(上段は空洞上、下段は非空洞上)



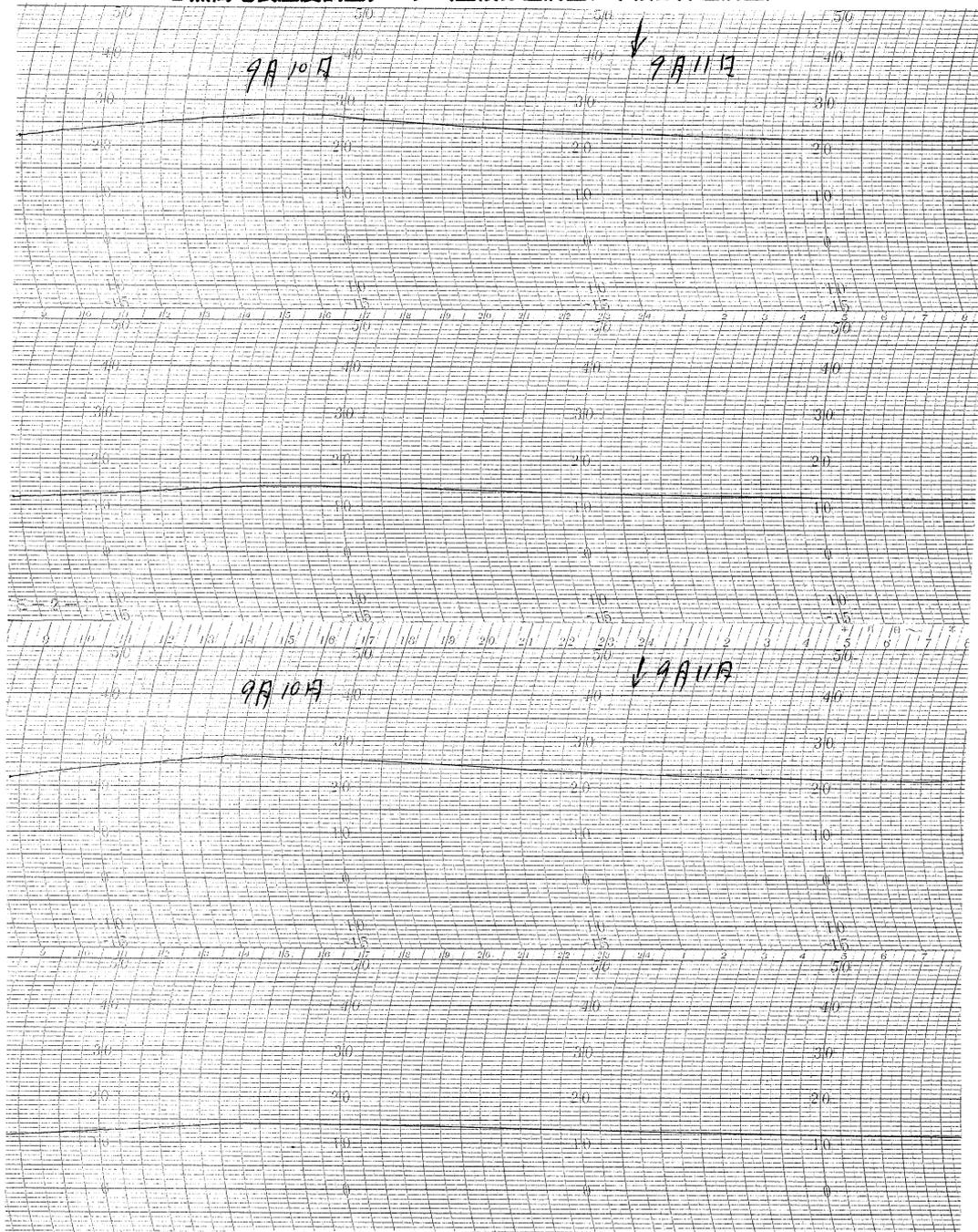
挿図7

西都原古墳群酒元ノ上地区第3次調査(1996年)
2点間地表温度調査データ(上段は空洞上、下段は非空洞上)



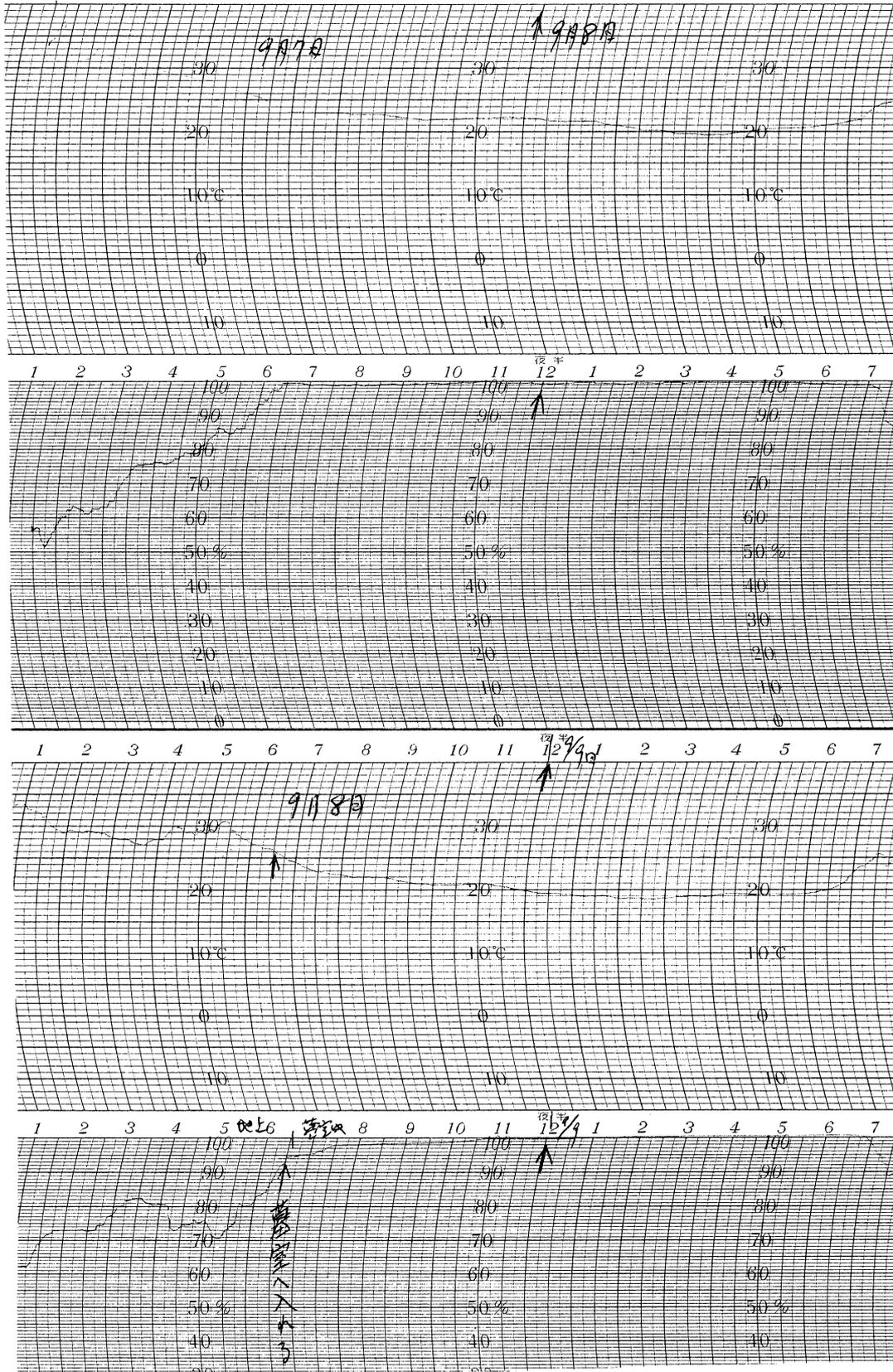
挿図8

西都原古墳群酒元ノ上地区第3次調査(1996年)
2点間地表温度調査データ(上段は空洞上、下段は非空洞上)



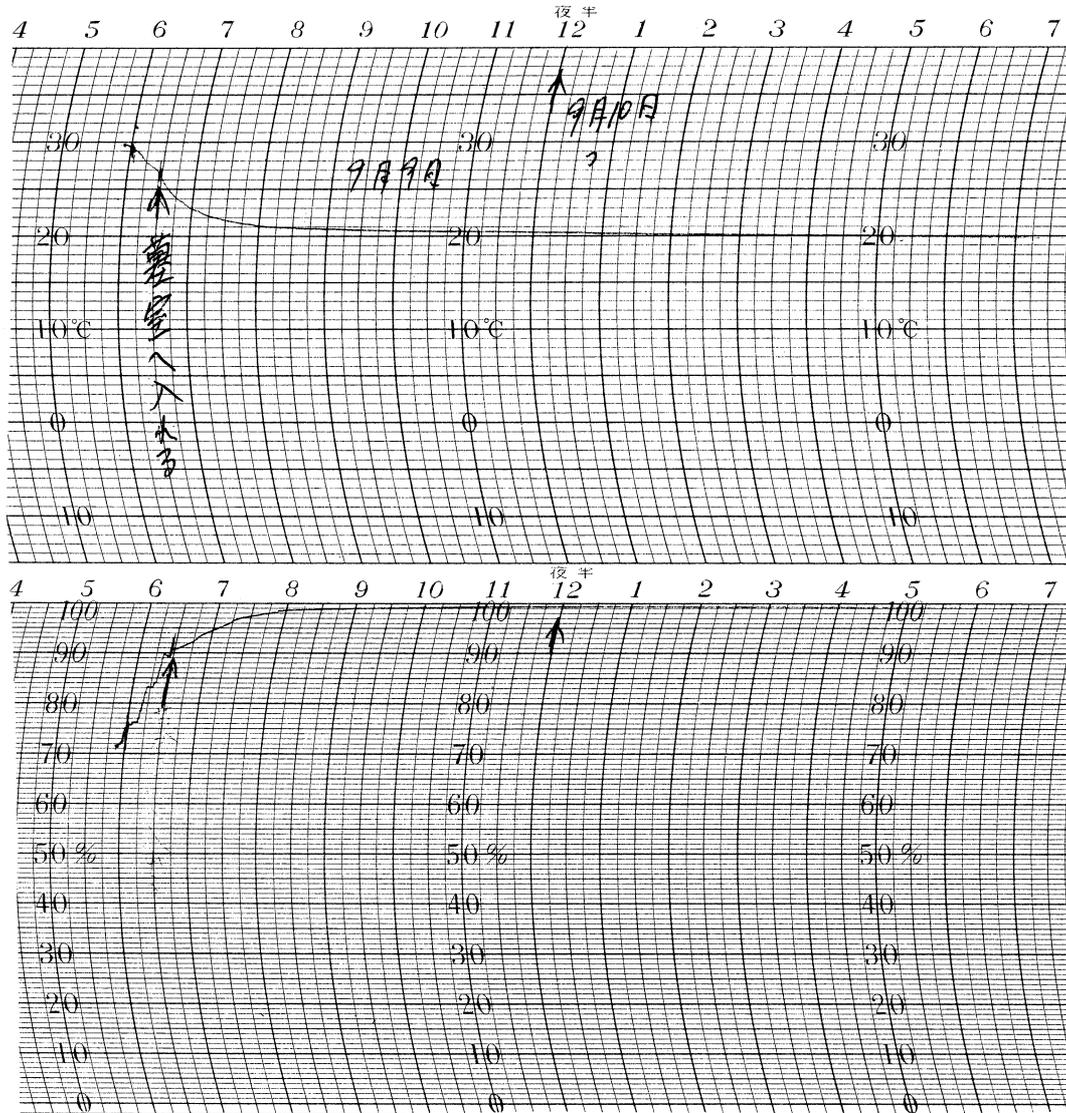
挿図9

西都原古墳群酒元ノ上地区第3次調査(1996年)
 墓室内温湿度調査データ(上段は温度、下段は湿度)



挿図10

西都原古墳群酒元ノ上地区第3次調査(1996年)
墓室内温湿度調査データ(上段は温度、下段は湿度)



3 遺構

高野 政 昭（天理大学附属天理参考館）

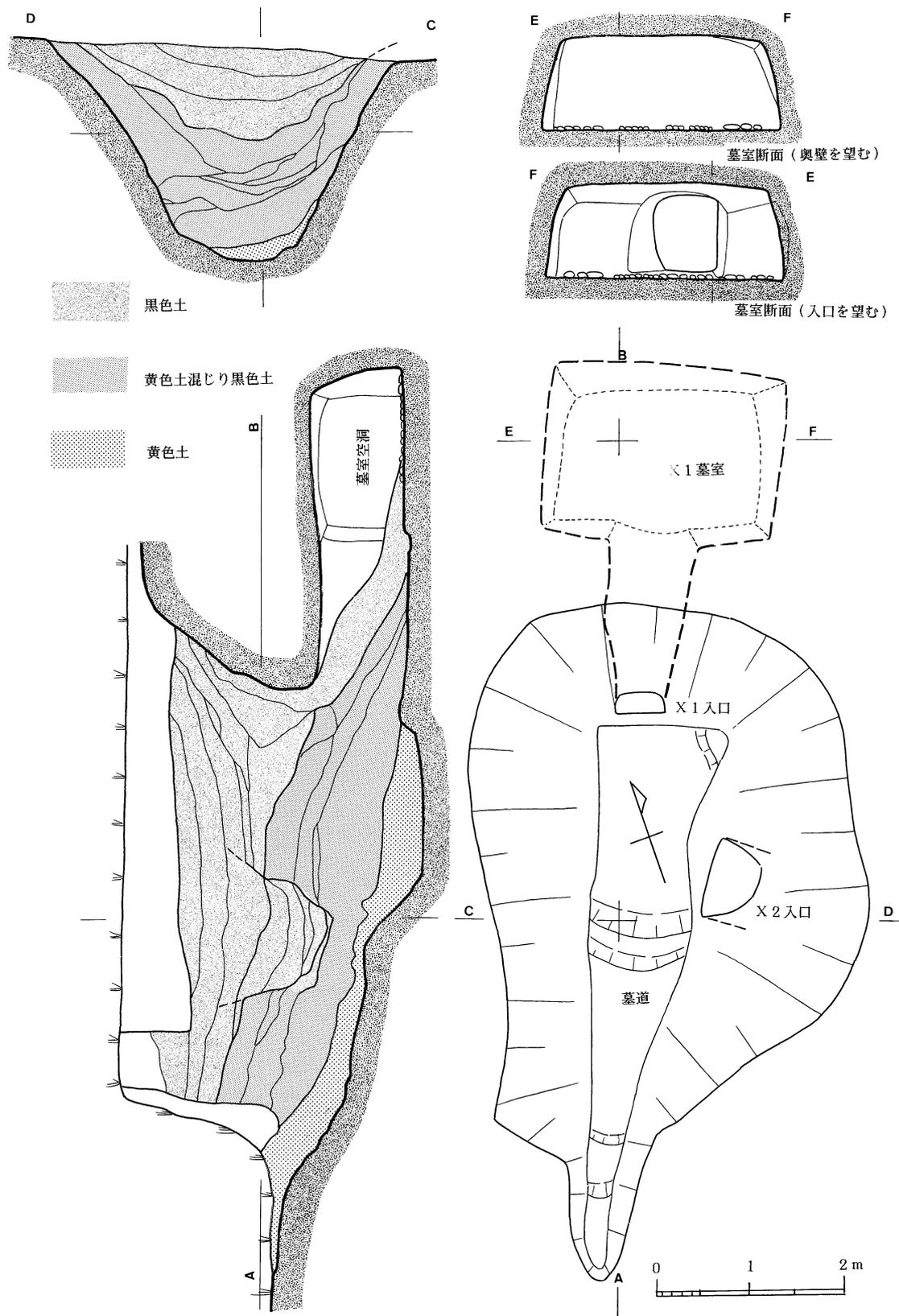
横穴墓は西都原古墳群が営まれた台地の南縁部に位置し、標高60～70mの南西に緩やかに傾斜した斜面に築かれている。墓壙は濁黄灰色の火山灰層を掘り込み、平面形が長二等辺三角形を呈する墓道と奥行きに対して幅の広い長方形の墓室からなる。墓道と墓室の間は短い羨道で連なる。

墓道は先端から羨門に向かって徐々に広く、深くなり、階段状を呈して下がる。墓道の最大幅は、掘り込みの肩で3.9m、底部で1.4m、最も深い部分で3.2mある。墓道の堆積は1995年の発掘調査で部分的に把握していたが、全体の発掘によっても基本的には変わらなかった。すなわち、黒色土系の上層と、黄褐色系の下層に大別され、上下2層の境には完形品を含む土器が認められた。下層は黒色土が全く混じらない黄色土と、黒色土と黄色土が混じった黄褐色土よりなる。埋め戻しの終了に伴い、土器を用いたまつりが行われ、その後自然堆積があって、墓道は比較的長い期間くぼみとして残っていたと推定される。墓道は深さのおよそ3分の1を埋め戻している。なお、調査の対象外であったもうひとつの墓室（X2）は、X1墓室の埋葬が終了し、墓道が埋められた後に、新たに豎坑を掘削して築いたもので、X2墓室が新しいことが堆積状況から判断できる。

墓室は羨道と玄室を明確に作っており、最も狭い部分での羨道の幅が0.51m、高さ0.85mで、長さは1.85mである。羨門の閉塞については、板を立てかけたであろうという解釈が一般的である。しかし、土層観察で確たる証拠は見いだせなかった。墓道の堆積土は締まっており、羨道の堆積土は柔らかいという所見は変わらないが、両者の境が明確でない。羨門に閉塞の板を受ける切り欠きもなかった。玄室は奥行きが1.91m、幅2.55mの長方形で、高さは0.95mである。壁はわずかに内傾し、天井はおおむね平坦である。床は平らで円石を敷く。円石の3分の1は動かされ、当初の石敷きに重なっていた。旧状を保つ石敷きには葺石のように目地がみられる。すなわち、径20cm前後の石を列状に並べ、その間を拳大の石で埋める。敷石が動かされた理由は、追葬の際に寄せられたと考えられるが、なぜそうしたのかは判然としない。玄門には長さ1.45m、幅0.25m、深さ0.20mの溝が掘り込まれている。これは排水のためのものではなく、羨道と玄室を区切るための仕切り溝と考えられる。

玄室への流入土は親指カメラで観察した状態と変わらなかったが、壁の一部に小動物があけた穴があり、堆積土の表面に玄室天井からの浸透水が落ちてできた穴があったりして、閉塞後、完全な空洞を維持していたとみることはできない。埋葬当初は羨門が塞がれていたはずであり、墓室は密閉状態であった。やがて、閉塞板あるいは有機質の板状品が腐朽すると、黄色土混じりの黒色土が羨道部へ流れ込み、一時的に羨門が開くことによって、空洞内が外界と接触していたことが知られる。その後、開口部から黒色土が流入し、再び羨門が閉塞状態になるまで、黒色土の流入が続き、平面的には玄室の中央付近まで、黒色土が覆うこととなった。

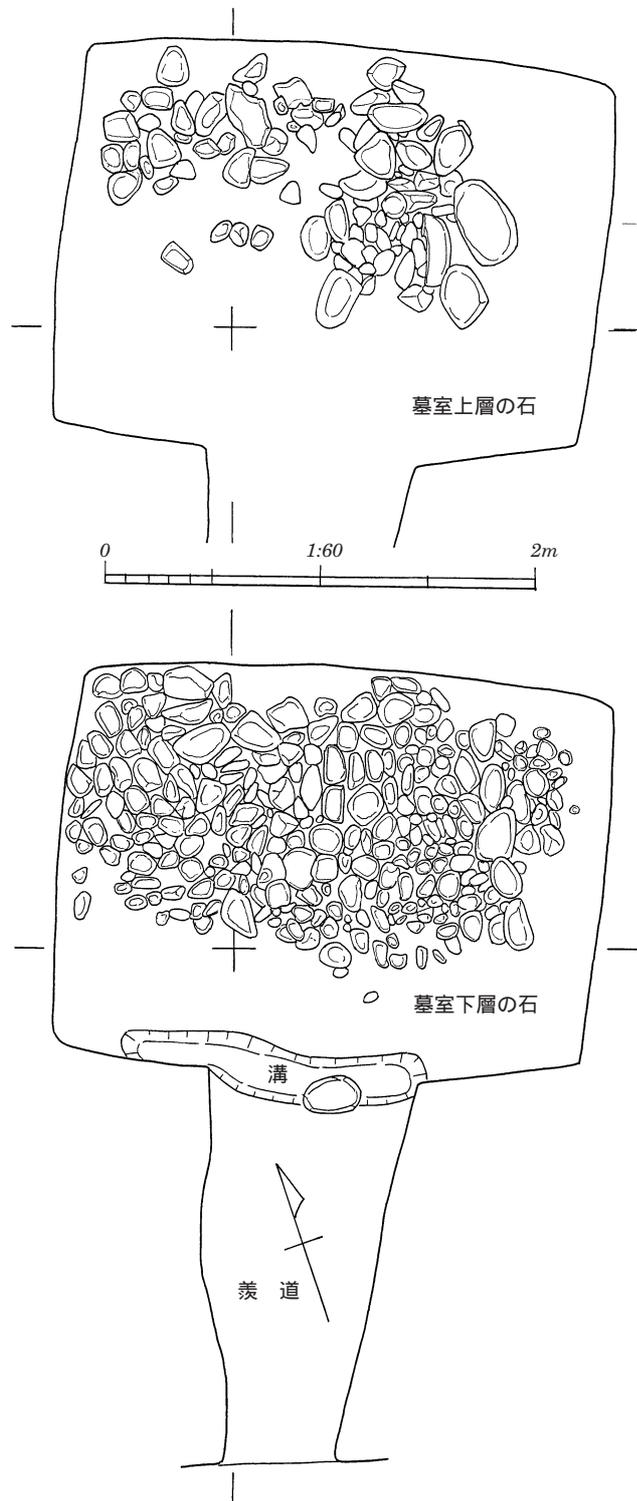
人骨は頭部、大腿骨など主要な部分がよく依存していたが、玄室奥寄りに片づけたもので、当初の位置を保つものとの識別は検討を要する。頭位を示す下顎骨や歯は、玄室の西壁沿いに



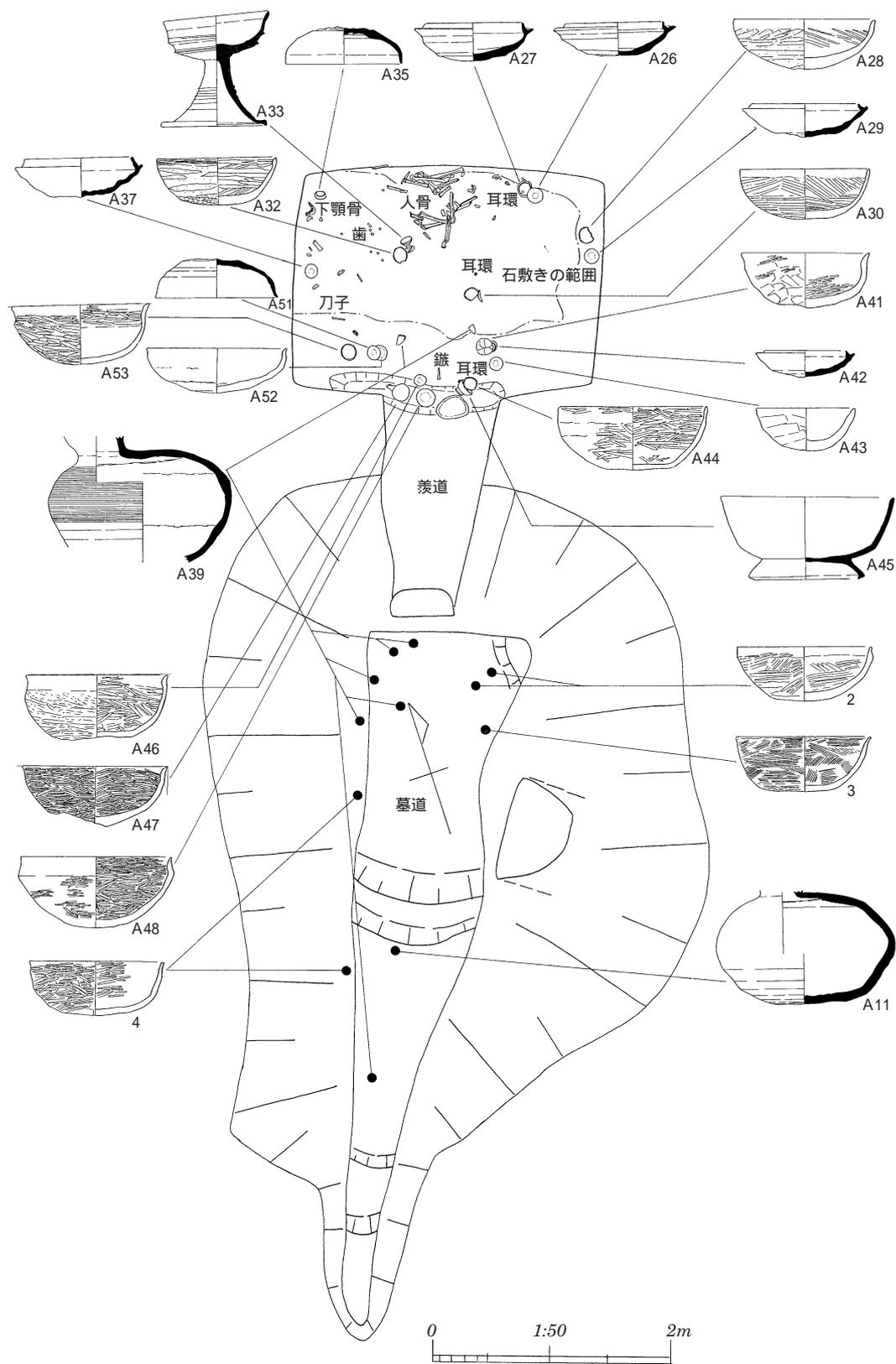
挿図11 酒元ノ上地区7号横穴墓 平面図・断面図

集中するが、おそらく、追葬時に移動させている可能性が高い。取り上げ時での所見は3体以上である。遺物は身体に装着していたであろう耳環のほかに、鉄刀子、鉄鏃、土器がある。耳環の出土状況、鉄刀子の数からも3体以上の埋葬は妥当である。

土器は須恵器坏蓋・同坏身・同高坏・同平瓶、土師器坏・同椀など計20点ある。ほとんどが完形品ないしそれに近く、破片が散乱するのは後述する須恵器平瓶(A39)のみである。須恵器坏などは枕として用いたことをうかがわせる出土状況(A35・A36)もみられたが、別に、口を上へ据え置いたもの、2点の土器を重ねて伏せたものなどがある。土器もある程度移動されていると思われるが、玄室の入り口近くに集中する土器(A44~48)は埋葬終了後のまつりに伴うものであろう。特に、玄門中央に置いた1個の石の上に据え置いた須恵器坏(A45)が羨道からの流入土で転落した状況であり、横穴墓利用の最終場面を示すものである。墓室および墓道から出土した土器はほとんどが完形品であるなか、須恵器平瓶(A40)は破片が羨門近くの墓道西側と、玄室の南側中央に分かれて検出された。これは明らかに何らかの意図を持って人為的に破碎した後、置かれたものとみられる。



挿図12 酒元ノ上地区7号横穴墓 玄室の石敷き検出状況図



挿図13 酒元ノ上地区7号横穴墓 玄室の遺物出土状況図

4 遺物

森本 征明

酒元ノ上地区7号横穴墓の第1次調査～第3次調査で出土した遺物は、採集した細片も含めて、総数62点で、その内訳は須恵器19点、土師器19点、瓦3点、耳環5点、釵子1点、鉄鏃1点、刀子2点、鉄釘1点、不明鉄製品1点、砥石1点、炉礫9点である。このうち、ほぼ完形ないし完形に近い土器は、ほとんどが墓室からの出土である。

墓室から出土した土器は、須恵器11点、土師器11点、金属製品は耳環4点、鑷子1点、鉄鏃1点、刀子2点、不明鉄製品1点である。

出土した11点の須恵器の器種構成は坏蓋2、壺蓋1、坏身5、台付椀1、高坏1、平瓶1である。坏身5に対して、坏蓋2というのは、少ない気がする。壺蓋が1点あるが、蓋をするべき壺は検出されなかった。一方、土師器はどれも椀形ないし坏形を呈する。口径、高さにややばらつきがあるが、小型坏（挿図15 A43）をのぞき、ほぼ同じ形態をなす。

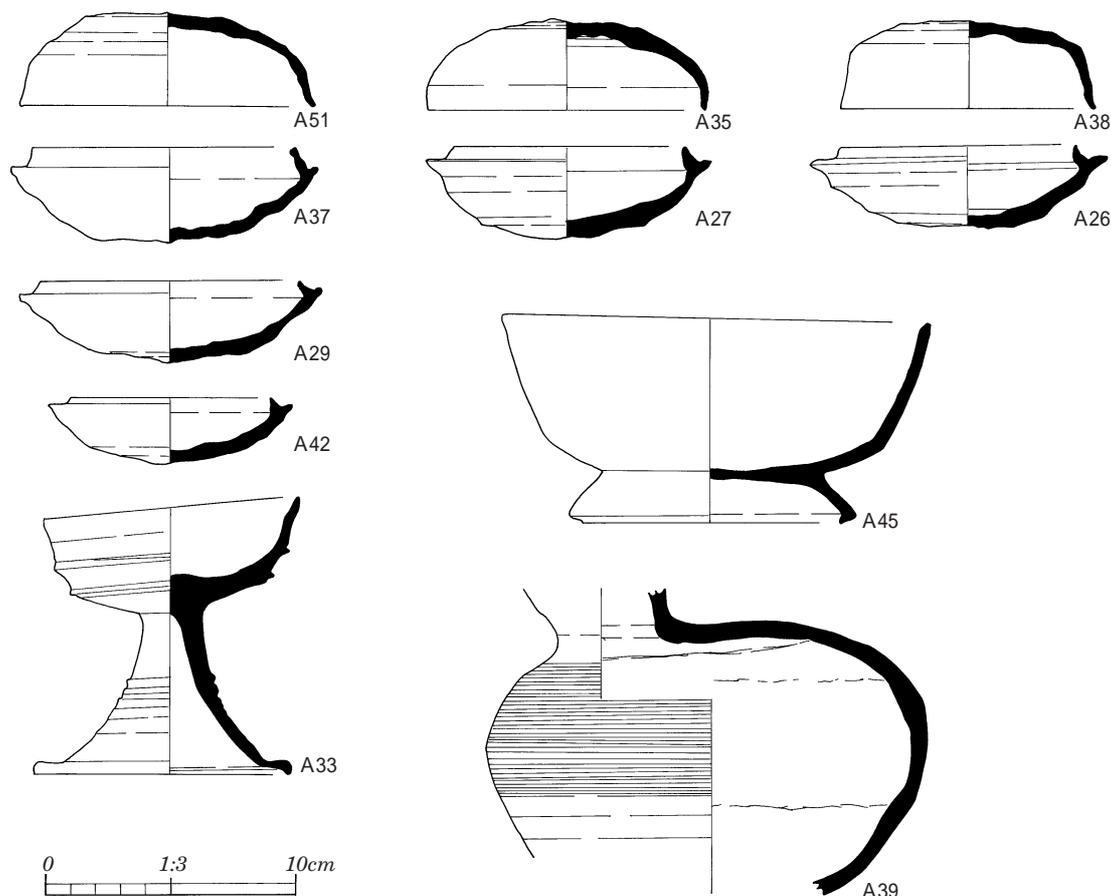
なお、遺物番号については、既報告で用いた各種分析の試料番号と合わせるため、1996年第3次調査出土遺物は数字の前に「A」を付け、1995年第2次調査出土遺物は数字のみで表している。

墓室（挿図14～16、図版15～17）

須恵器坏蓋（挿図14 A51・A35）A51は平坦な天井部から緩やかに口縁部へとつながる。口縁端部は丸くおわる。天井部外面を回転ヘラケズリし、口縁部および内面は回転ナデ調整する。焼成は良好、暗緑灰色を呈する。口径12.0cm、器高3.9cm。A35は天井部から口縁部にかけて、緩やかに丸みをもち、口縁部は内湾気味に小さく屈曲する。内外面を回転ナデ調整する。焼成は良好で灰色を呈する。口縁部と内外面の3分の1に二次的変色がみられる。口径11.8cm、器高3.8cm。

須恵器壺蓋（挿図14 A38）平坦な天井部から口縁部との境で角度を変えて下方にのびる口縁をもつ。胎土に若干の砂粒を含み、青灰色を呈する。口径10.5cm、器高3.6cm。

須恵器坏身（挿図14 A37・A27・A26・A29・A42）いずれも蓋受けをもつ。A37は底部から緩やかに湾曲して体部がのびる。蓋受けは水平よりやや上を向いて突出する。口縁部が内傾して立ち上がり、端部は丸くおわる。全体に回転ナデ調整する。胎土には微少な砂粒を含み、焼成は良好で灰色を呈する。内面に赤色顔料の付着がみられる。口径10.8cm、器高3.0cm。A27は口縁部が内傾して立ち上がり、端部は尖り気味におわる。全体に回転ナデ調整し、内底面には強い仕上げナデがみられる。口縁の一部と外面の3分の1が二次的変色する。焼成は良好で暗青灰色を呈する。口径12.6cm、器高3.8cm。A26は底部から体部が緩やかに立ち上がり、蓋受けは平面をもってやや斜め上方に突出し、立ち上がりはやや内傾してのび、中位で直立する。端部は尖り気味におわる。内外面の2分の1に二次的変色がみられ、口縁部を細かく打ち欠いている。胎土は細かく、焼成は堅緻、暗青灰色を呈する。口径12.5cm、器高3.4cm。A29は緩やかに立ち上がった体部に水平よりやや上向きに向いて蓋受けが突出する。立ち上がりは短く



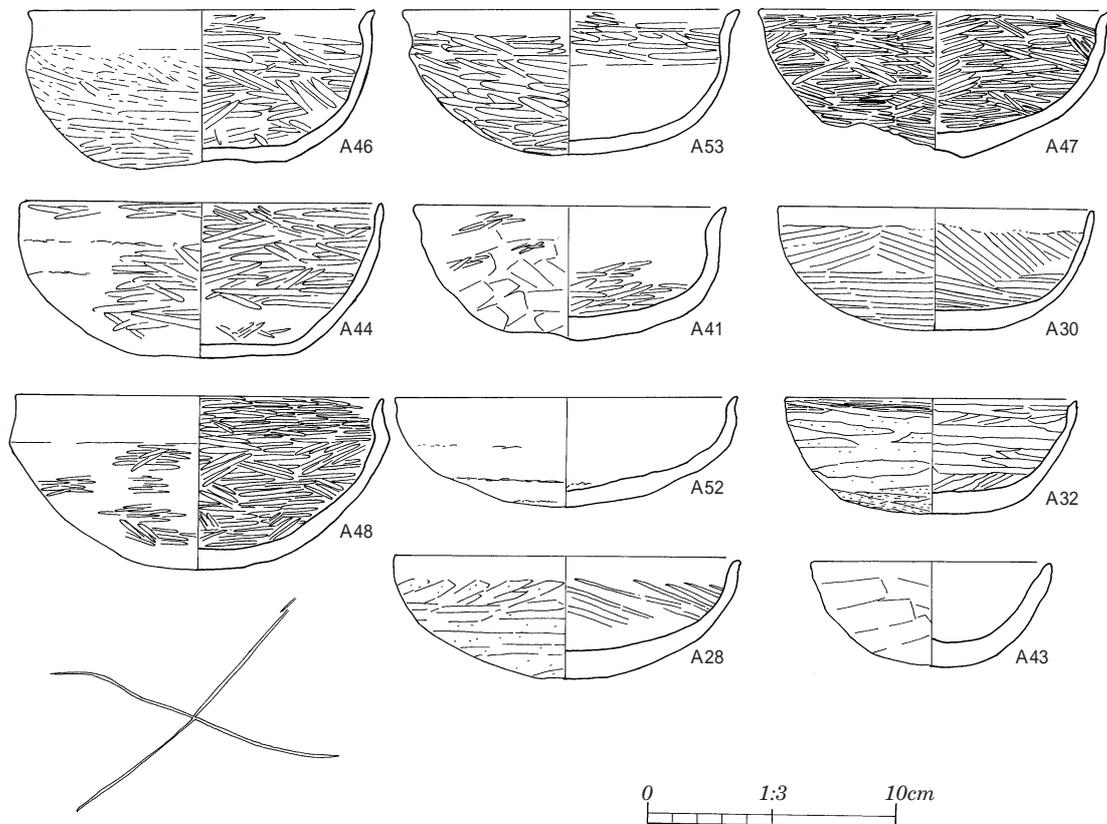
挿図14 酒元ノ上地区7号横穴墓 玄室出土須恵器実測図

わずかに内傾し、尖り気味におわる。口径12.4cm、器高3.4cm。A42はほかに比べやや小型である。緩やかに立ち上がった体部に水平よりやや上向きに向いて蓋受けが突出する。立ち上がりは短くわずかに内傾し、尖り気味におわる。口径7.8cm、器高2.8cm。

須恵器椀（挿図14 A45）平坦な底部から口縁部がやや開き気味に立ち上がり、口縁部は丸くおわる。高台は「八」の字形に張り、端部はつまむように強くナデたため内側に突出する。底部外面を回転ヘラケズリした後、全面を回転ナデ調整する。胎土には微少な砂粒を若干含み、灰色を呈する。口径17.5cm、器高8.5cm。

須恵器高杯（挿図14 A33）長脚の無蓋高杯である。体部下半に強いナデによって2条の突線をつくり出す。脚部は「八」字形に開き、裾部はさらに外方へ屈曲し、端部は下方へつまみ出す。透かし孔は穿たれていない。口縁部の5分の1と脚裾部の3分の2を打ち欠いている。胎土は細かく、堅緻、青灰色ないし暗青灰色を呈する。杯部内面に径5.4cmの重ね焼きの痕跡が残る。口径10.5cm、器高11.5cm、裾部径10.6cm。

須恵器平瓶（挿図14 A39）肩部上面を別の円板状粘土で充填したのち、中心から位置をずらして頸部をとりつける。頸部はほとんど直線的に広がる。口縁部を欠く。外面は肩部から体部にかけてカキ目調整し、底部はヘラケズリ調整する。胎土に若干の砂粒を含み、焼成は良好である。緑灰色を呈する。最大腹径18.1cm。



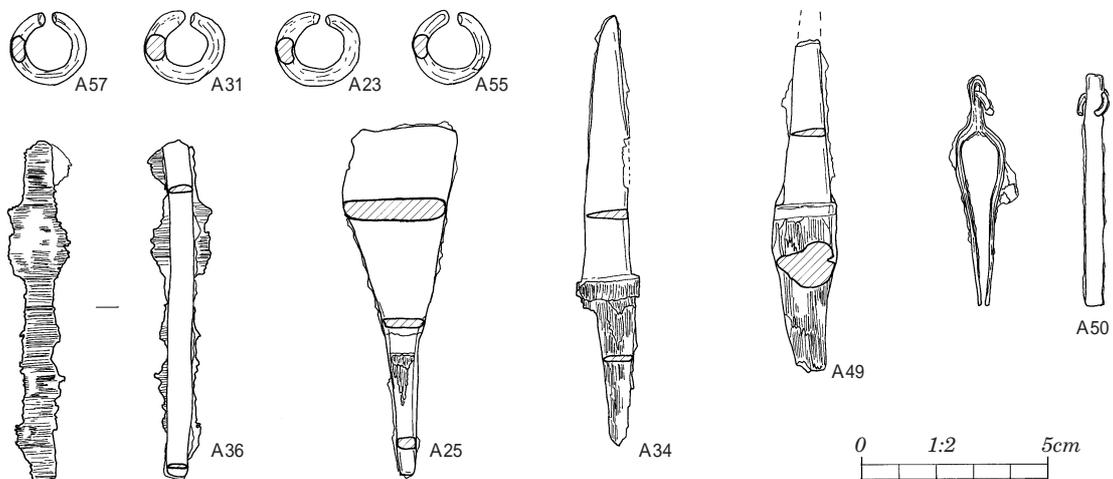
挿図15 酒元ノ上地区7号横穴墓 玄室出土土師器実測図

土師器坏（挿図15 A46・A53・A47・A44・A41・A30・A48・A52・A32・A28・A43）丸底の底部から体部が緩やかに立ち上がり、口縁部がわずかに屈曲して外反するもの（A46・A53・A47・A41・A48）、直立気味のもの（A44・A30・A32・A28）、体部と口縁部の境に稜をもつもの（A48）、小型のもの（A43）がある。

A46は平底気味の底部から体部が湾曲して立ち上がり、口縁部はわずかに屈曲して外反する。口縁端部はやや尖り気味におわる。内外面に横ないし斜め方向の細かいヘラミガキを施している。胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟弱。橙色を呈する。口径14.0cm、器高6.4cm。A53は丸底の底部から体部が緩やかに湾曲して立ち上がり、口縁部は直立気味にのびたあと、わずかに外反する。外面全体に細かいヘラミガキを施す。口縁部内面は横ナデしたあとに、ヘラミガキ調整する。胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟弱。黄橙色を呈する。口径13.6cm、器高6.0cm。A47は底部の2分の1が欠けているので、底部の形は不明。体部は緩やかに湾曲して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁端部はやや尖り気味である。内外面ともに丁寧なヘラミガキを施す。胎土には砂粒をほとんど含まない。焼成はやや軟弱。内外面に赤彩を施している。また、外面の4分の1に二次的変色がみられる。口径14.4cm、残存器高6.7cm。A44は平底気味の底部から緩やかに体部が立ち上がり、口縁部は直立気味にのびる。口縁部内外面をナデ調整する。体部外面は摩滅が著しく、わずかにヘラミガキの痕が残る。体部内面は細かいヘラミガキを施す。外面には粘土紐の接合痕が残る。胎土に砂粒をわずかに含み、焼成はやや軟弱。

口径14.5cm、器高6.7cm。A41はやや肉厚で、丸底の底部から緩やかに立ち上がった体部に、わずかに外反した口縁がつく。口縁端部は尖り気味におわる。底部から体部にかけてヘラケズリ調整し、口縁部付近は横ナデのあとヘラミガキする。体部内面はナデ調整し、底部付近はヘラミガキする。胎土に砂粒をほとんど含まず、焼成は良好。明黄褐色を呈する。口径13.2cm、器高6.4cm。A30は平底気味の底部から体部が緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸い。内外面は丁寧なヘラミガキを施す。胎土に若干の砂粒を含み、焼成は良好、橙色を呈する。口径13.1cm、器高5.0cm。A48は半球状の体部から緩い稜をなして口縁部は屈曲し、外反する。口縁端部は尖り気味におわる。口縁部は横ナデしたあとにヘラミガキ調整を施し、体部内面は丁寧なヘラミガキを施す。胎土に若干の砂粒を含み、焼成はやや軟弱である。底部外面に「×」印のヘラ描き沈線がある。口径14.1cm、器高7cm。A52は丸底の底部から浅い体部が緩やかに立ち上がる。口縁部はわずかに屈曲し、口縁端部は丸くおわる。ほかに比べて雑なつくりで、粘土の接合痕が明瞭に残る。胎土に多くの砂粒を含み、焼成はやや軟弱。内面にベンガラが付着しており、その容器として使用された可能性がある。口径13.9cm、器高4.4cm。A32は平底気味の底部から体部が緩やかに立ち上がり、直立気味に口縁がのびる。口縁端部を横ナデし、体部から底部にかけてヘラケズリののち粗いヘラミガキを施す。内面は精美的な横ナデ、ヘラミガキ調整である。内外面に赤彩を施す。底部外面に木の葉の圧痕が残るが、ミガキによりほとんど見えない。胎土にほとんど砂粒を含まない。口径14.0cm、器高4.9cm。A28は丸底の底部から体部が緩やかに立ち上がり、直立気味に口縁がのびる。口縁端部は丸くおわる。底部外面をヘラケズリ調整し、体部から口縁部にかけて、ヘラケズリののちヘラミガキする。口縁端部は横ナデ。整形が不十分で肉厚で雑なつくりである。胎土に多くの砂粒を含み、明黄褐色を呈する。口径12.2cm、器高4.8cm。A43はほかに比べ、小型で肉厚である。外面はケズリ調整し、内面はナデ調整する。外面の2分の1が二次的に変色している。口径9.8cm、器高4.2cm。

耳環（挿図16 A57・A31・A23・A55）いずれも銅芯金貼である。A57・A31・A23は腐食が著しく、部分的に金箔が残る。A57は長径2.05cm、短径2.0cm、断面径0.65cm。A31は長径2.15



挿図16 酒元ノ上地区7号横穴墓 玄室出土耳環・鉄製品実測図

cm、短径1.95cm、断面径0.7cm。A23は長径2.2cm、短径2.1cm、断面径0.65cm。A55は長径2.05cm、短径1.95cm、断面径0.6cm。

鉄鏃（挿図16 A25）鑿刃式の鏃である。刃部は腐食のため、空洞化している。茎部は長方形を呈し、関近くに木質が残る。現存長9.6cm、刃部幅2.7cm。

刀子（挿図16 A34・A49）A34はほぼ完形。研ぎ減りのせいか、刃部は切先部にかけて細くなり、関近くで幅が最も広い。関は刃側・背側の両方にある。茎は基部に行くほど細くなる。柄部には木質が主軸方向に残る。全長11.7cm、刀身長7.2cm、関部幅1.7cm、背の厚み0.2cm。A49は切先を欠く。7と同様関近くで刃部の幅が最も広い。柄縁から0.5cmまでの範囲に木質がみられず、この部分には薄い金属板を巻いている可能性がある。柄部には全体に厚く木質が残る。現存長9.0cm、刃部幅1.2cm、背の厚み0.2cm。

鉄鑷子（挿図16 A50）幅0.5cmの薄い鉄板を折り曲げてつくった鑷である。屈曲部に環状の金具が取り付けられている。全長6.3cm。

不明鉄製品（挿図16 A36）器種・用途不明の鉄製品である。扁平な釘状を呈する。片面には主軸方向と直行するように、散孔材の木質が残る。木製容器の木質が付着したものかもしれない。1点のみの出土であり、先端を欠失した鈍であろうか。残存長9.2cm、幅0.6cm、厚み0.15cm。

墓道（挿図17、図版17）

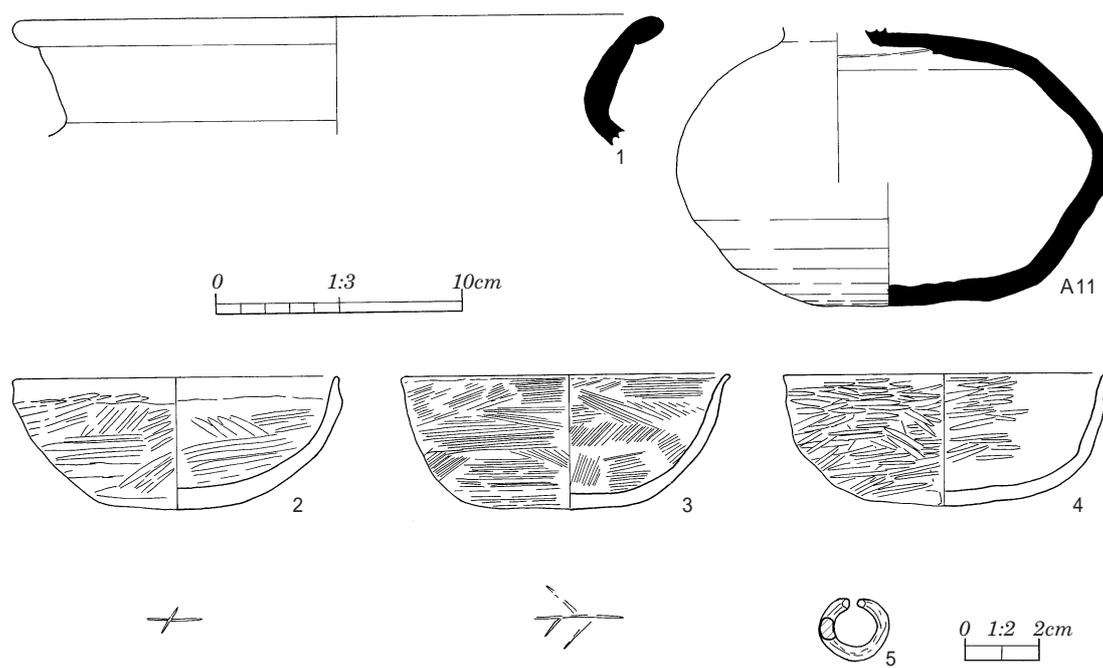
須恵器甕（挿図17 1）口縁部の破片である。「く」字形に開き、口縁端部は外側に折り返して丸みをもつ。内外面ともナデ調整を施す。胎土は精良で、灰色を呈する。焼成は良好。復元口径26.4cm。

須恵器平瓶（挿図17 A11）肩部上面を別の円板状粘土で充填したのち、中心から位置をずらして頸部をとりつける。内面と外面上半部を回転ナデ調整し、外面下半部はヘラケズリ調整する。胎土に1～3mmの砂粒を含み、焼成はやや軟弱である。灰色を呈する。最大腹径18.0cm。

土師器坏（挿図17 2～4）2は平底気味の底部から緩やかに湾曲して立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸くおわる。口縁部内外面に横ナデを施し、外面は緩やかな稜をなす。体部から底部にかけては、粗いヘラミガキを施す。底部外面には2本の直線が交差するヘラ描きの記号がみられる。全体に肉厚で、胎土は精良である。焼成は良好。口径13.2cm、器高5.4cm。3は平底の底部から直立気味に体部が立ち上がり、口縁部はやや外反する。内外面に不定方向のハケ目を施し、口縁端部はナデ調整する。底部外面に木の葉痕がみられる。胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや軟弱である。口径13.3cm、器高5.5cm。4は丸底の底部から直立気味に立ち上がり、口縁端部は丸みをもつ。外面は底部をヘラケズリ調整し、体部はヘラケズリののち細かいヘラミガキを施す。口縁端部は横ナデ調整する。内面は横ナデ調整ののち部分的にヘラミガキする。胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。口径13.4cm、器高5.4cm。

採集品

耳環（挿図17 5）銅芯金貼で、一部金箔がはがれているが、残りは非常によい。長径1.9cm、短径1.7cm、断面径0.6cm。本資料は発掘調査終了後、県文化課職員により発掘地区近くで採集されたものである。近くには削平された円墳が確認されており、7号墓出土とは限らない。



挿図17 酒元ノ上地区7号横穴墓 墓道出土須恵器・土師器・耳環



写真1 酒元ノ上地区7号横穴墓出土鉄製品のX線写真(左から、A34、A50、A36、A25、A49)

5 1)

西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I . 植物珪酸体分析

1 . はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000)。

2 . 試料

分析試料は、7号横穴墓の玄室内などから採取された計19点である。試料の詳細を挿図18に示す。

3 . 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300w・42kHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5}g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ヨシ属 (ヨシ) の換算係数は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、メダケ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および挿図18に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。なお、イネ科栽培植物(イネ、ムギ類、ヒエ、アワ、キビなど)に由来する植物珪酸体は、いずれの試料からも検出されなかった。

[イネ科]

キビ族型、ヨシ属、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)、ウシクサ族B(大型)、シバ属

[イネ科 タケ亜科]

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(チシマザサ節やチマキザサ節など)、ミヤコザサ節型(おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、未分類等

[イネ科 その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

羨道入口床(試料13)では、植物珪酸体がまったく検出されなかった。羨道真中床(試料14)では、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。羨道奥(試料15)では、ススキ属型、ウシクサ族A、ネザサ節型が比較的多く検出され、ミヤコザサ節型なども少量検出された。

羨門前の埋土(試料17、19、21)では、メダケ節型やネザサ節型が比較的多く検出され、ススキ属型、ウシクサ族A、ミヤコザサ節型なども検出された。また、樹木(その他)も少量検出された。

玄室内(試料22~95)では、ほとんどの試料でメダケ節型やネザサ節型が比較的多量に検出され、ススキ属型やウシクサ族Aも比較的多く検出された。また、クマザサ属型やミヤコザサ節型も検出され、部分的にキビ族型、ヨシ属、シバ属、樹木(その他)なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると、メダケ節型およびネザサ節型が優勢であり、部分的にススキ属型も多くなっていることが分かる。

墓室側面(試料135)および地山(試料136)では、植物珪酸体がほとんど検出されなかった。

5. 考察

今回の分析では、イネやムギ類などの穀類(粃殻)、およびイネやススキなどのイネ科植物を利用した敷物等の検出が期待されたが、これらを示唆する明瞭な結果は得られなかった。

7号横穴墓の玄室内の試料では、メダケ節型やネザサ節型が多量に検出され、ススキ属型、ウシクサ族A、ミヤコザサ節型なども検出された。このような植物珪酸体組成は、当時の遺跡

周辺の土壌（黒ボク土）と類似しており、崩落に伴って混入した土壌に由来する可能性が高いと考えられる。羨門前の埋土でも、玄室内とおおむね同様の植物珪酸体組成であることから、崩落によって混入した土壌の影響を受けている可能性が考えられる。

文献

- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83。
 杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用 古代農耕追求のための基礎資料として。考古学と自然科学，20，p.81-92。
 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学。同成社，p.189-213。
 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1） 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法。考古学と自然科学，9，p.15-29。

表1 西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	7号横穴墓																				
		13	14	15	17	19	21	22	23	34	40	46	58	65	71	77	86	95	135	136		
イネ科	Gramineae (Grasses)																					
キビ族型	Panicaceae type					7	15	14			14	7			14	7	7					
ヨシ属	Phragmites (reed)													7								
ススキ属型	Miscanthus type			34	7	7	22	65	29	7	27	45	59	36	84	63	36	36				
ウシクサ族A	Andropogoneae A type			61	74		37	72	66	30	41	45	52	58	42	42	44	71				
ウシクサ族B	Andropogoneae B type									7			7									
シバ属	Zoista												22							7		
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)																					
メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake			20	15	65	52	130	87	60	210	22	89	137	211	139	95	121				
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa			109	81	137	89	202	175	45	278	156	163	304	260	202	204	256	8			
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)					7	7	29	29		20	15	52	14	21	14	51	28				
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa			15	20	103	43	52	65	80	30	41	22	43	49	35	51	50		15		
未分類等	Others			23	122	66	86	37	101	109	15	115	82	74	130	84	174	153	199	8	22	
その他のイネ科	Others																					
表皮毛起源	Husk hair origin			7	7		7	14	7	7	7	22	15	22	7	7						
棒状珪酸体	Rod-shaped			8	204	125	94	74	434	335	112	306	224	289	419	373	369	481	491	38		
未分類等	Others			38	306	280	266	259	419	372	217	306	238	437	455	373	390	438	405	45	39	
樹木起源	Arboreal																					
その他	Others					7	7	14						14								
植物珪酸体総数	Total			0	83	883	766	712	658	1562	1297	524	1365	909	1230	1641	1527	1440	1560	1664	98	67

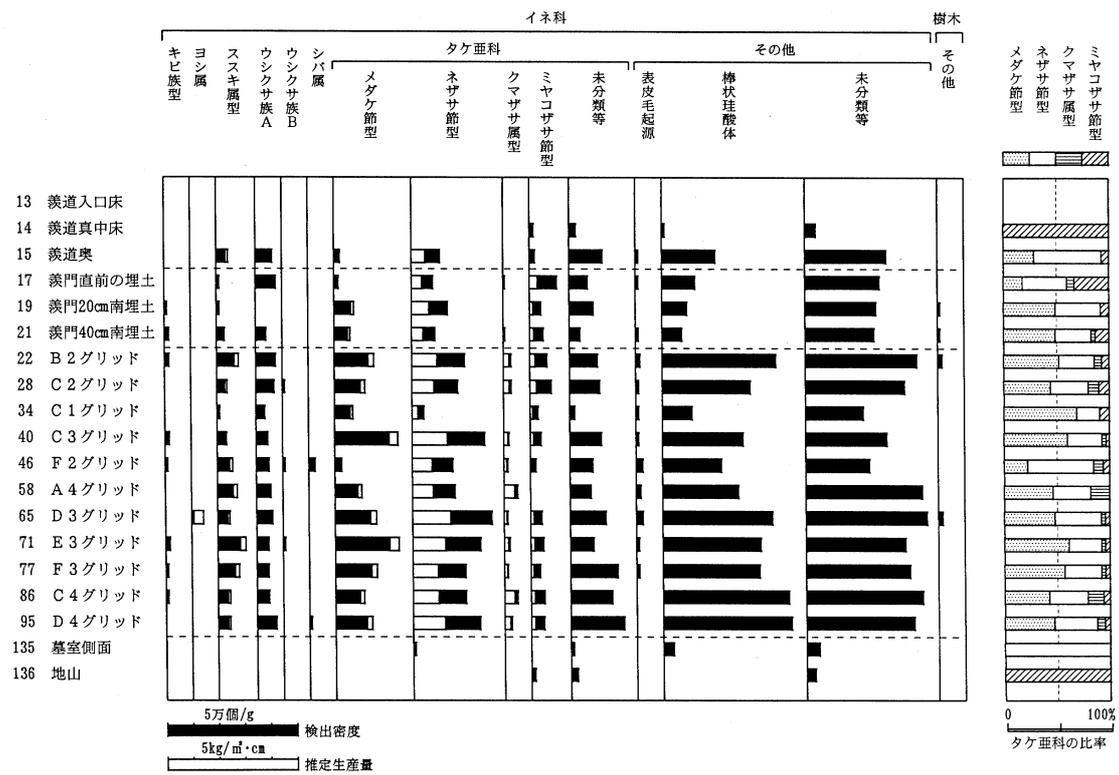
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

ヨシ属	Phragmites (reed)																					0.46
ススキ属型	Miscanthus type			0.42	0.09	0.09	0.27	0.81	0.36	0.09	0.34	0.55	0.73	0.45	1.05	0.78	0.45	0.44				
メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake			0.24	0.17	0.75	0.60	1.51	1.01	0.69	2.44	0.26	1.03	1.59	2.45	1.61	1.10	1.40				
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa			0.52	0.39	0.66	0.43	0.97	0.84	0.22	1.34	0.75	0.78	1.46	1.25	0.97	0.98	1.23	0.04			
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)			0.06		0.06	0.22	0.22			0.15	0.11	0.39	0.11	0.16	0.10	0.38	0.21				
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa			0.05	0.06	0.31	0.13	0.16	0.20	0.24	0.09	0.12	0.07	0.13	0.15	0.10	0.15	0.15				0.04

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake			29	18	49	49	52	44	69	60	22	47	48	61	58	42	47				
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa			64	42	43	34	34	36	22	33	63	36	44	31	35	37	41	100			
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)					6	4	7	9	4	9	18	3	4	4	15	7					
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa			100	7	33	8	13	7	10	9	3	6	4	4	4	6	5				100

第II章 西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓



挿図18 西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓における植物珪酸体分析

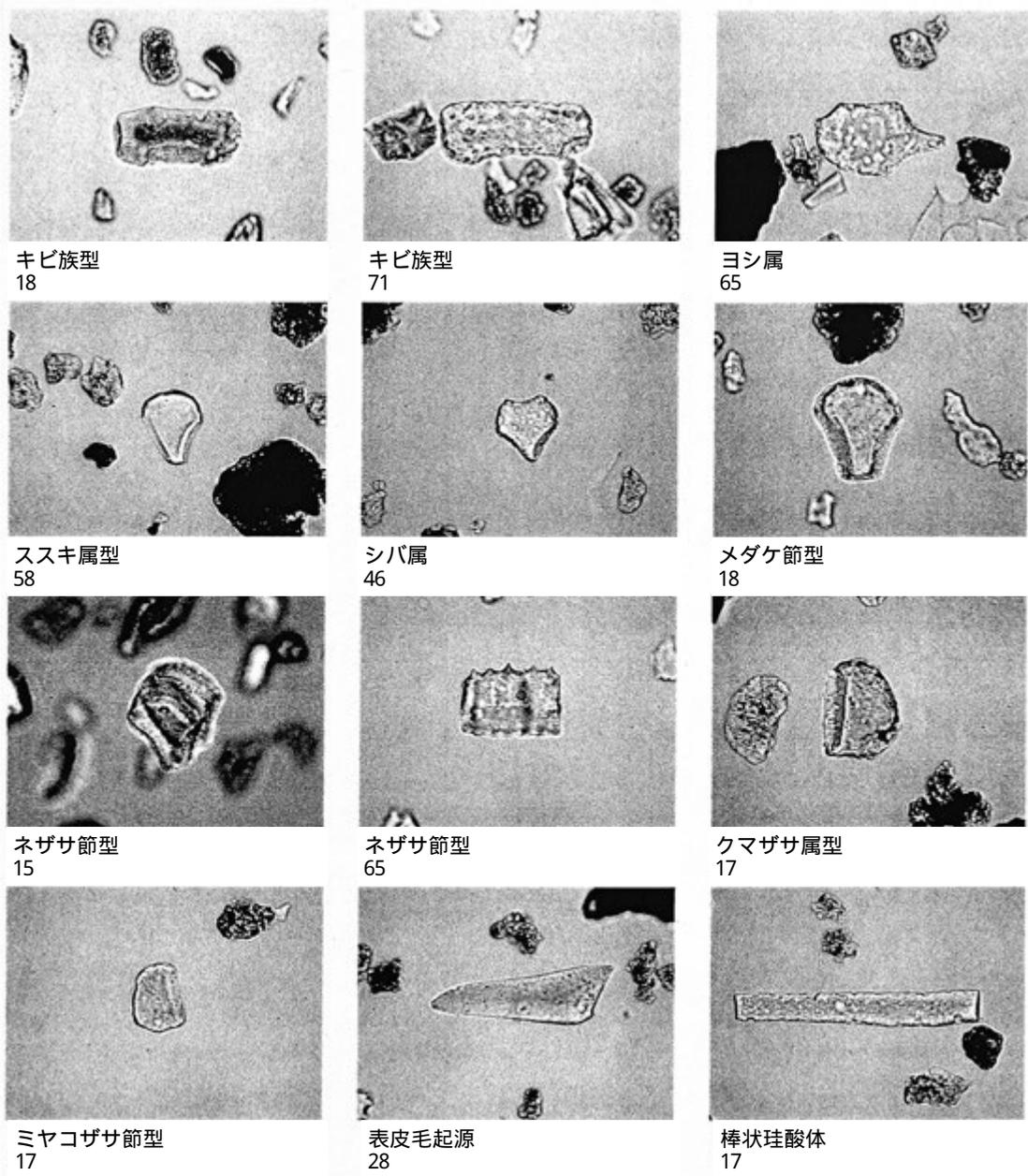


写真2 植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

Ⅱ．花粉分析

1．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象にした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存しない場合もある。

2．試料

分析試料は、7号横穴墓の玄室内および基本土層断面などから採取された計63点である。

3．方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈殿法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（ ）で結んで示した。

4．結果

分析結果を表2に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科 アサダ、クリ、シイ属
マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属 ケヤキ、エノキ属
ムクノキ、サンショウ属、カエデ属、ハイノキ属、ニワトコ属 ガマズミ属、タニウツギ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科 イラクサ科、マメ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、アブラナ科、アリノトウグサ属 フサモ属、セリ亜科、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属、ベニバナ

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

(2) 花粉群集の特徴

1) 基本土層断面

樹木花粉よりも草本花粉とシダ植物孢子の占める割合が高い。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科が優占し、タンポポ亜科、キク亜科、マメ科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属の出現率が高く、クリ、コナラ属コナラ亜属、マツ属複維管束亜属、ツガ属などが伴われる。

2) 7号横穴墓

玄室内部の資料では、部分的にイネ、ヨモギ属、キク亜科、コナラ属アカガシ亜属などが検出されたが、いずれも少量である。また、試料90(E4グリッド)ではベニバナが1個検出された。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

7号横穴墓の玄室内部では、微量ながら栽培植物のベニバナの花粉が検出された。ベニバナの花粉は、献花もしくは染色や薬用などの特殊な用途によってもたらされた可能性が考えられる。類例は少ないが、奈良県藤ノ木古墳(6世紀後半)の石棺内や同県上之宮遺跡(6世紀後半)などでも、ベニバナの花粉が検出されている。花粉があまり検出されないのは、乾燥的な環境下で花粉が分解されたためと考えられる。

7号横穴墓が構築された当時は、イネ科、ヨモギ属、タンポポ亜科、マメ科、シダ植物などの草本が生育する日当たりの良い比較的乾燥した人里の環境であったと考えられ、周辺ではアブラナ科などを栽培する畑作が行われていたと推定される。また、周辺地域にはカシ林を主とする照葉樹林が分布していたと考えられ、マツ類、ナラ類、クリなども生育していたと推定される。

文献

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復元。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p. 248-262.

金原正明・金原正子(1993)石棺内の花粉分析および消化管内容物残渣の観察。斑鳩藤ノ木古墳, 第3次調査報告書。奈良県立橿原考古学研究所, p. 17-26.

中村純(1973)花粉分析。古今書院, p. 82-110.

中村純(1980)日本産花粉の標徴。大阪自然史博物館収蔵目録第13集, p. 91.

島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, p. 60.

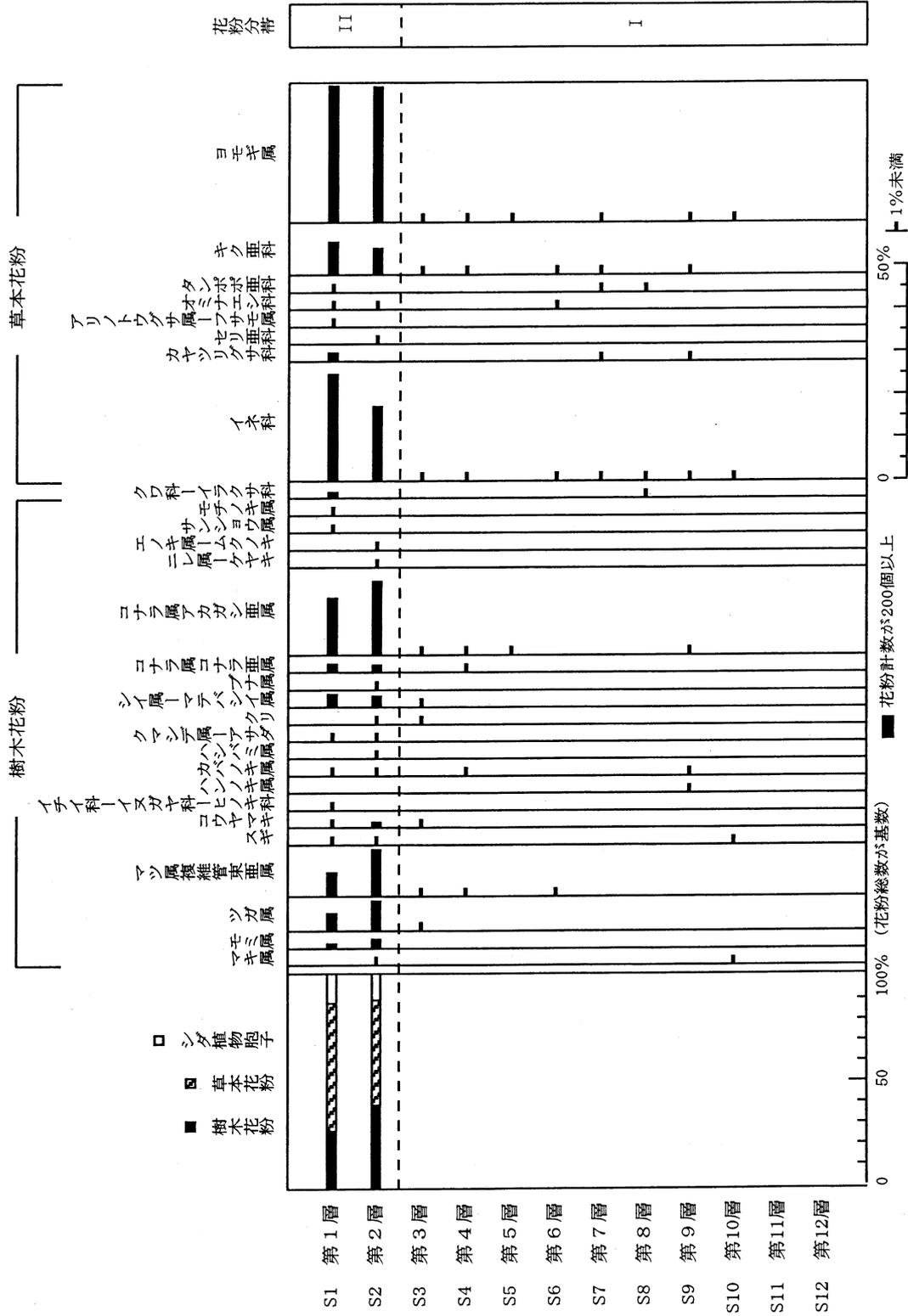
表2 西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓における花粉分析結果

学名	分類群	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9	S10	S11	S12	S13	S14	S15	S20	S25	S29	S32	S35	S38	S41	S44	
		第1層	第2層	第3層	第4層	第5層	第6層	第7層	第8層	第9層	第10層	第11層	第12層	深達真中床	深達真中床	深達真中床									
Arboreal pollen																									
Podocarpus	樹木花粉										1									2					
Albizia	マキ属	4	8																				1	1	
Taiga	ツガ属	15	28	1																			1	1	
Pinus subgen. Dylexylon	マツ属 種 雑木亜属	20	44	1	2	1														2					
Cryptomeria japonica	スギ	1	1								2											4			
Scadophyes erecticollata	コウヤマキ	1	5	1																					
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科・イヌカヤ科・ヒノキ科	2																							
Myrica	ヤブモモ属																								
Juglans	クルミ属																								
Alnus	ハンノキ属								1																
Betula	カバノキ属	1	1	1					1													1	1		
Corylia	ハシハミ属	1	1																						
Corylus-Ostrya japonica	クマシロ属・アサダ	1	1																						
Castanea crenata	クリ	2	2	1																					
Castanopsis-Pazania	シイ属・ヤチバシイ属	11	10	1																					
Fagus	ブナ属	1																							
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属	7	7																						
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属	47	68	2	4	4				1												1	1		
Ulmus-Zaluzna serrata	ニレ属・カヤキ	1																							
Calix-Aphananthe aspera	エノキ属・ムクノキ	1																							
Zanthoxylum	サンショウ属	1																							
Ilex	モチノキ属	1																							
Arboreal, Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	5																							
Monocot. Urticaceae	クワ科・イラクサ科																								
Nonarboreal pollen	草本花粉																								
Gramineae	イネ科	90	70	7	3	7	2	3	2	2										2	7		2	11	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	7								1															
Fagopyrum	ソバ属																								
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科・ヒユ科																								
Halimolobos-Myriophyllum	アキノトウサゲ属・フサモ属	1																							
Apiaceae	セリ属科	2																							
Plantago	オオバコ属	3	3																						
Valerianaceae	オオバコ属	3	3																						
Lactucoidae	オオバコ属	3	3																						
Asteroidae	オオバコ属	27	24	3	1	2	1	1	1																
Asteroidae	オオバコ属	113	125	8	6	1	1	1	2	1															
Artemisia	ヨモギ属																								
Certhium fuscipes	ベニバシ																								
Fern spore	シダ植物胞子																								
Monolete type spore	単条溝胞子	40	37	13	9	7	8	3	3											1	24	1	9	3	2
Triplate type spore	三条溝胞子	17	19	3	3	7	32	18	2	4										1	60	9	17	1	3
Arboreal pollen	樹木花粉	112	180	7	8	4	1	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	
Arboreal, Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	5	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
Nonarboreal pollen	草本花粉	245	223	18	10	1	11	6	4	8	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
Total pollen	花粉総数	382	403	25	18	5	12	6	5	11	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
Unknown pollen	未同定花粉	5	4	0	1	0	0	0	1	1	1														
Fern spore	シダ植物胞子	57	56	16	9	14	40	21	2	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
Holmibid eggs	寄生虫卵	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	
	明らかでない消化残渣	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	

学名	分類群	S47	S50	S53	S56	S59	S63	S66	S69	S72	S75	S78	S82	S84	S87	S90	S93	S96	S99	S121	S122	S123	S124	S125	S126	
木本花粉																										
Arboreal pollen																										
<i>Podocarpus</i>																										
<i>Abies</i>																										
<i>Tsuga</i>																										
<i>Pinus subgen. Dikuyon</i>																										
<i>Cryptomeria japonica</i>																										
<i>Sciadopitys verticillata</i>																										
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae																										
<i>Myrica</i>																										
<i>Juglans</i>																										
<i>Betula</i>																										
<i>Corylus</i>																										
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>																										
<i>Castanea cremata</i>																										
<i>Cedanojasis-Tsugania</i>																										
<i>Fagus</i>																										
<i>Quercus subgen. Lepidolanus</i>																										
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>																										
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>																										
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>																										
<i>Zanthoxylum</i>																										
<i>Ilex</i>																										
樹木・草本花粉																										
Arboreal・Nonarboreal pollen																										
Moraceae-Liliaceae																										
Nonarboreal pollen																										
Gramineae																										
Cyperaceae																										
<i>Fagopyrum</i>																										
Chenopodiaceae-Amaranthaceae																										
<i>Hibiscus-Myriophyllum</i>																										
Apididae																										
<i>Plantago</i>																										
Valerianaceae																										
Lactucoidae																										
Asteroidae																										
<i>Artemisia</i>																										
<i>Carthamus fracticus</i>																										
Fern spore																										
Monilate type spore																										
Triplate type spore																										
シダ植物胞子																										
単葉胞子																										
三葉胞子																										
木本花粉																										
Arboreal pollen																										
Arboreal・Nonarboreal pollen																										
Nonarboreal pollen																										
Total pollen																										
未明定花粉																										
シダ植物胞子																										
Fern spore																										
Helminth eggs																										
明らか未消化微体																										

第二章 西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓

学名	分類群	科名	S127	S128	S129	S130	S131	S132	S134	A26	A27	A28	A30	A32	A33	A35	A45
Arboreal pollen		樹木花粉															
<i>Podocarpus</i>		マキ属											1				
<i>Abies</i>		モミ属															
<i>Taxus</i>		ツガ属															
<i>Fimus subgen. Dyplosylon</i>		マツ属雑種類群属									1						
<i>Crythomeria japonica</i>		スギ											1				
<i>Scoloflyus verticillata</i>		コウヤマキ															
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科・イチイガヤ科・ヒノキ科															
<i>Myrica</i>		ヤマモモ属															
<i>Juglans</i>		クルミ属															
<i>Alnus</i>		ハンノキ属															
<i>Betula</i>		カバノキ属															
<i>Corylus</i>		ハシバミ属															
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシロノミ属・アサガ															
<i>Castanea crenata</i>		クワ															
<i>Castanopsis-Fagaria</i>		クワ属・マテハシノミ属											2				
<i>Fagus</i>		ブナ属															
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属											1				
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属									1		3				
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属・クヤキ															
<i>Galls-Aphelandranthus aspera</i>		エノキ属・ムクノキ															
<i>Zanthoxylum</i>		サンショウ属															
<i>Ilex</i>		モチノキ属															
Arboreal · Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉															
Moraceae-Urticaceae		クワ科・イラクサ科															
Nonarboreal pollen		草本花粉															
Cremnateae		イネ科															
Cyperaceae		カヤウリグサ科											17				
<i>Pogonatum</i>		ソバ属											1				
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科・ヒユ科															
<i>Halimolobos-Myriophyllum</i>		アリアトウクワ属・フサモ属															
Apiaceae		セリ科															
<i>Plantago</i>		オオバコ属															
Valerianaceae		オミヤエソ科											2				
Lactucoidae		タンポポ科											1				
Asteroidae		キク科											4				
<i>Arenaria</i>		ヨモギ属											2				
<i>Coriarius hirtortus</i>		ベニバナ															
Fern spore		シダ植物胞子															
Monolete type spore		単条溝胞子															
Triolete type spore		三条溝胞子															
Arboreal pollen		樹木花粉															
Arboreal · Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉															
Nonarboreal pollen		草本花粉															
Total pollen		花粉總数															
Unknown pollen		未同定花粉															
Fern spore		シダ植物胞子															
Helminth eggs		寄生虫卵															
		明らかでない消化液															



挿図19 西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓における花粉ダイアグラム

Ⅲ．樹種同定

1．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2．試料

試料は、7号横穴墓の玄室内から採取された12点の炭化物である。試料の詳細を表3に示す。

3．方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4．結果

結果を表3に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

散孔材 diffuse-porous wood（写真3上段）

横断面：小型の道管が散在する。

放射断面：道管と放射組織が存在する。

接線断面：道管と多列幅の放射組織が存在する。

以上の形質により散孔材に同定される。なお、本試料は保存状態が悪く、小片で広範囲の観察が困難なため、散孔材の同定にとどめた。

広葉樹 broad-leaved tree

横断面：観察する事は困難であった。

放射断面：道管と放射組織が存在する。

接線断面：道管と放射組織が存在する。

以上の形質により広葉樹に同定される。なお、本試料は保存状態が悪く、小片で広範囲の観察が困難なため、広葉樹の同定にとどめた。

タケ亜科 Bambusoideae イネ科（写真3下段）

横断面：基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は木部と師部からなり、その周囲に維管束鞘が存在する。

放射断面及び接線断面：柔細胞及び維管束、維管束鞘が稈軸方向に配列している。

以上の形質よりタケ亜科に同定される。

5 所見

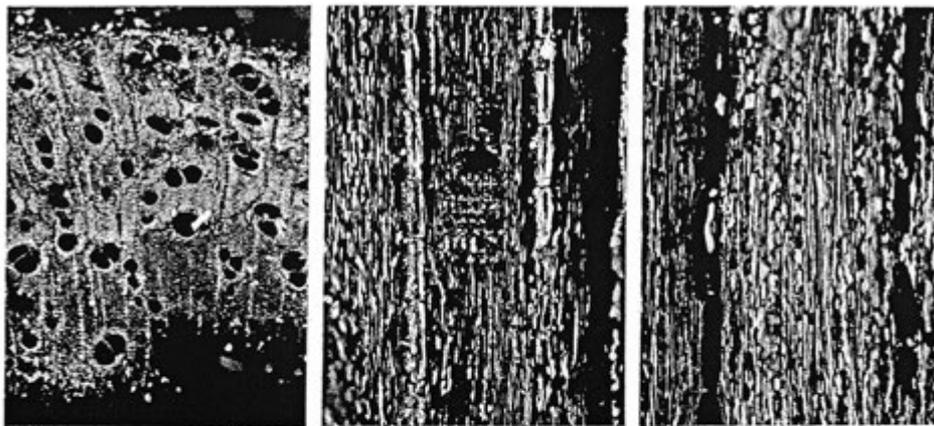
分析の結果、7号横穴墓の玄室内の炭化材では、散孔材4点、広葉樹2点、タケ亜科6点が同定された。いずれも保存状態が悪く、小片で広範囲の観察が困難なため、より詳細な同定は困難であった。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞・木材の構造，文永堂出版，p 20 48，49 100．

表3 西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓における樹種同定結果

試料番号	採取地点	結果 (和名/学名)	
S101	B1グリッド	広葉樹	broad-leaved tree
S103	D2グリッド	タケ亜科	Bambusoideae
S104	F4グリッド	タケ亜科	Bambusoideae
S105	A4グリッド	広葉樹	broad-leaved tree
S106	A3グリッド	散孔材	diffuse-porous wood
S138	E4グリッド	散孔材	diffuse-porous wood
S140	C5グリッド	散孔材	diffuse-porous wood
S141	D4グリッド	散孔材	diffuse-porous wood
S142	下層の土	タケ亜科	Bambusoideae
S143	C4グリッド	タケ亜科	Bambusoideae
S144	B4グリッド	タケ亜科	Bambusoideae
S145	B5グリッド	タケ亜科	Bambusoideae



横断面 0.4mm 放射断面 0.2mm 接線断面 0.2mm
1. S140 散孔材



横断面 0.4mm 放射断面 0.2mm 接線断面 0.2mm
2. S104 タケ亜科

写真3 西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓の炭化材

5 2)

西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓における寄生虫卵分析、花粉分析

古環境研究所 金原正子

金原正明

1. 試料

試料は7号横穴墓の平成8年8月の調査で出土した土器類の表面に堆積していた堆積物7点である。試料番号は付加されていたナンバーを用いる。試料は以下のものである。

A26	B1	グリッド	須恵器坏身	A27	B1	グリッド	須恵器坏身
A28	A2	グリッド	土師器坏	A30	C3	グリッド	土師器坏
A32	I2	グリッド	土師器坏	A33	D2	グリッド	須恵器高坏
A35	F2	グリッド	須恵器坏蓋				

2. 方法

微化石分析法を基本に以下のように行った。

- 1) サンプルを採集する。
- 2) 脱イオン水を加え攪拌する。
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈殿法を施す。
- 4) 25%フッ化水素酸を加え30分静置。(2・3度混和)
- 5) 水洗後サンプルを2分する。
- 6) 片方にアセトリシス処理を施す。
- 7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。
- 8) 検鏡・計数を行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡は生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。同定は所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン()で結んで示した。

なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

3. 結果

各試料とも寄生虫卵は検出されなかった。花粉はA27、A28、A30から小数検出され、他は検出されなかった。

検出された花粉は、樹木花粉6、草本花粉5、シダ植物孢子2形態の計13である。これらの学名と和名および粒数を表に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕 モミ属、マツ属複維管束亜属、スギ、クリ シイ属 マテバシイ属、コナラ属
コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属

〔草本花粉〕 イネ科、カヤツリグサ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕 単条溝孢子、三条溝孢子

4. 考察

各試料とも寄生虫卵が検出されなかったため、寄生虫に関連する宿主や食物の情報は供出できない。花粉はA27、A28、A30から小数検出されたが、いずれも風媒花植物であり、食物、薬用、供献に関連するとはみなしがたい。また、特殊な分類群も含まれていない。風媒花は花粉の絶対量が極めて多く、空中、水、土壌、堆積物に存在するものから供給されたと考えられる。なお、寄生虫卵においては動物質であるため、遺体が分解する環境であれば、同様に分解するため、失われた可能性もある。寄生虫卵は当初から存在しなかったのか、分解によって失われたのかの判断はつきがたい。

参考文献

Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992) Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. *Journal of Archaeological Science*, 19, p.231-245.

金原正明・金原正子(1992)花粉分析および寄生虫. 藤原京跡の便所遺構 藤原京7条1坊, 奈良国立文化財研究所, p.14-15.

金子清俊・谷口博一(1987)線形動物・扁形動物. 医動物学, 新版臨床検査講座, 8 医歯薬 出版, p.9-55.

中村純(1973)花粉分析. 古今書院, p.82-110.

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復元. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.

表4 西都原古墳群酒元ノ上地区7号横穴墓における寄生虫卵分析・花粉分析結果

分類群		A26	A27	A28	A30	A32	A33	A35
学名	和名	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Arboreal pollen	樹木花粉							
<i>Abies</i>	モミ属				1			
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属		1					
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ				1			
<i>Castanea crenata-Castanopsis-Pasania</i>	クリ-シイ属-マテバシイ属				2			
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属				1			
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属		1		3			
Nonarboreal pollen	草本花粉							
Gramineae	イネ科		2		17			
Cyperaceae	カヤツリグサ科				1			
Lactucoeidae	タンポポ亜科			2	1			
Asteroideae	キク亜科			1	4			
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属			2	2			
Fern spore	シダ植物孢子							
Monolate type spore	単条溝孢子	1		1	5			
Trilate type spore	三条溝孢子			3	1			
Arboreal pollen	樹木花粉	0	2	0	8	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	2	5	25	0	0	0
Total pollen	花粉総数	0	4	5	33	0	0	0
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	0	0	0	0
Fern spore	シダ植物孢子	1	0	4	6	0	0	0

第Ⅲ章 まとめ

地下（竪坑）式横穴墓と墳丘の相関関係を中心に

置田 雅昭

はじめに

横穴墓には南九州に固有の地下式横穴墓と全国的に分布する横穴墓がある。また、宮崎県西都原古墳群酒元ノ上地区で発見された横穴墓は墓道が墓室に斜めに向かって下ることから折衷式横穴墓の名称が与えられた。筆者はこれら3種の横穴墓に炭坑用語を援用して竪坑式、平坑式、斜坑式の名称を与えるのが適切ではないかと提言した。しかし、地下式横穴墓、横穴墓の名称は長い歴史的経緯を経たものであり、提言は採用されていない。3種の横穴墓を統一的に論じるために、以下では提言の用語を用いる。すなわち、竪坑式は垂直に、斜坑式は墓室に向かって斜めに降りる墓道を有するものを言う。炭坑用語で言う水平坑がここで言う平坑である。炭坑用語をそのまま採用しないのは、墓道は必ずしも水平ではなく、墓室から出口に向かって下がる例があるからである。

平坑式横穴墓でその背後の丘陵に墳丘をもつ例があることが徐々に明らかになりつつある。この墳丘部分を後背墳丘と呼ぶことが提言されている。仏像の光背との音が同じであり、その意味からしても適切な用語と考える。

平坑・斜坑式横穴墓と後背墳丘

宮崎県下で後背墳丘をもつ平坑式の横穴墓が、最初に認識されたのは宮崎市蓮ヶ池横穴墓群である。12号横穴墓は1号前方後円墳（長さ37m）の後円部に築かれており、52号横穴墓は2号円墳（径17m）の下に営まれている。第4回九州前方後円墳研究会大会『九州の横穴墓と地下式横穴墓』（2001）は後背墳丘の有無に意を注いで作成されており、これによれば、同様の例は以下の古墳群で確認されている。

新富町大字新田原字祇園原横穴墓群（円墳、径10～15m）

西都市大字三宅字酒元ノ上3号横穴墓（円墳、径7m）

宮崎市平和ヶ丘北町池内横穴墓群A1～A4号横穴墓群（前方後円墳、長さ28m）

宮崎郡佐土原大字下那珂字土器田横穴墓群東1号墓

宮崎市富吉横穴墓群2基の横穴墓（1号円墳）

このうち、池内横穴墓群では墳丘から須恵器の破片が採集されていて、横穴墓との一体性を積極的に評価できよう。土器田横穴墓群の例は消滅しているが、当時の写真から墳丘らしい高まりが認められるとされているものである。また、富吉横穴墓群は墳丘と一体の可能性が指摘されている例である。

なお、置田は『池内横穴墓群発掘調査整理報告書』（1997）で後背墳丘をもつ横穴墓が熊本、大分、福岡、山口、島根の広い範囲に分布する事を紹介したが、丹羽野裕は島根県下の後背墳

丘をもつ横穴墓を集成し、松江市、安来市などで7基の前方後円(方)形後背墳丘を紹介している(『一般国道9号建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』13 1997)。

竪坑(地下)式横穴墓と墳丘

地下式古墳研究の第1人者だった石川恒太郎は著書の題に「地下式古墳」の名称を与え、竪坑式横穴墓に盛り土があったことを積極的に評価してきた。しかし、現状では盛り土が削平され、地上に構築物を残さない例が圧倒的に多い。以下では『九州の横穴墓と地下式横穴墓』を参照に、あらためて墳丘をもつ竪坑式横穴墓の確かな例、墳丘があったと推定されている例、特殊な例を抽出してみよう。

・墳丘をもつ確かな例

新富町祇園原古墳群 B グループでは29基の円墳の周堀内外に地下式が分布

西都市西都原古墳群111号円墳(径30m)に4号地下式

102号円墳に5号地下式

無号円墳に9号地下式

堂ヶ嶋地下式横穴墓群1号円墳(径14m)に4基の地下式

宮崎市下北方地下式横穴墓群7号円墳(径25m)に4・5号地下式

8号円墳に6・9号地下式

9号円墳に7・8号地下式

(6・8号地下式は墓室を周堀から外向きに構築)

高崎町原村上地下式横穴墓群7号地下式に黒色土の盛り上がり

野尻町野尻1号円墳に地下式

大萩円墳に3号地下式

高原町日守地下式横穴墓群 推定6基の円墳に各々複数の地下式

えびの市小木原地下式横穴墓群小木原円墳(径30m)と1号地下式

・墳丘と一体の可能性のある例

西都市北水戸地下式横穴墓群

常心原地下式横穴墓群

元地原地下式横穴墓群

宮崎市柿木原地下式横穴墓群

国富町高田原地下式横穴墓群

綾町内屋敷地下式横穴墓群

高城町高城牧ノ原地下式横穴墓群

都城市上村地下式横穴墓群

下川牧ノ原地下式横穴墓群

・特殊な例

えびの市広畑地下式横穴墓群（B類地下式は竪坑が環状に配列し、墓室は外向き）

島内地下式横穴墓群 1号円墳（真幸古墳 径30m）とST94地下式

（もと12基の円墳があった。ST94 地下式は周堀埋没後に構築）

大隅松山町京ノ峯地下式横穴墓群 弥生時代方・円形周溝墓の溝に竪坑を構築

串良町岡崎古墳群 4号円墳（径20m）と1・2・3号地下式

16号円墳と4号地下式

17号円墳と5号地下式（いずれも墓室は外向き）

以上、九州前方後円墳研究会が集成した資料から、墳丘と横穴墓が一体に築かれている例を抽出した。墳丘をもつ確かな例としたものは墳丘が地下式横穴墓の後背墳丘の位置を占めていると考えられるものである。これに対して、特殊な例としたものは墳丘が先に築かれていて、その周堀を利用して竪坑を築いたと推定するものである。京ノ峯地下式横穴墓群のように明らかに異なる時代の遺構の重なりであり、溝底に竪坑を築いたのは掘削土量の削減のためであったと推定される。島内1号円墳は周堀が埋まってから竪坑が掘られているから、すでにあった円墳を後背墳丘として利用したとして良いであろう。また、竪坑が周堀にあっても墓室が墳丘の外にあるものも掘削土量削減の工夫の結果として良いであろう。岡崎4号墳の場合は墳丘に主体部をもっていたから、地下式と墳丘に相関関係はないとして良いであろう。

ところで、西都原4号墳では地下式横穴墓を主体部にしながら、墳丘中心部でも埋葬施設が確認された。ほかに、日守地下式横穴墓群でもA墳丘には3基の地下式横穴墓が築かれ、墳丘中心部分から鉄剣が出土しており、埋葬施設があったものと復元できる。このように墳丘と地下式横穴墓の相関関係は複雑な様相を示している。これらの関係をうまく整理したのが東憲章の九州考古学会での見解である。すなわち、

- 1 地下式横穴墓の墳丘として同時に造られるもの、
- 2 高塚古墳に、地下式横穴墓が寄生的に後から作られるもの、
- 3 地下式横穴墓掘削の廃土を目印程度に盛り上げるもの、
- 4 地下式横穴墓を主体部とする墳丘を利用し、後から埋葬施設が作られるもの、

の4類型を設定した。

小木原円墳の場合は墳丘の発掘も行われているが、埋葬施設はなかったので1に該当する。2は先に特殊な例としたもので、3は大西智和により島内地下式横穴墓群で発掘調査によって確認されている。そして、東は西都原4号地下式の場合、遺物の年代から墳丘埋葬施設が後出するとして、4の類型に属するとしている。

置田は日守地下式横穴墓群で一見無秩序に分布する18基の地下式横穴墓を6個の円を描くことによって、これらに墳丘が伴ったものとしたが、他の地下式横穴墓群でも同様の検討を行う価値があるだろう。

日向国前方後円墳の再検討

地下式横穴墓と墳丘の関係を検討している過程で、特殊な前方後円（方）墳があることに気づいた。すなわち、前方部が左右非対称の古墳が目につく点である。例えば西都原古墳群では

1号墳、13号墳、72号墳などがそれである。共に台地の縁辺に位置するために、地形上の制約からこうした形になったのかと疑っては見たが、全面発掘が行われた100号墳が非対称である。100号墳の場合地形の制約によるものではない。また、宮崎大学が発掘した櫛1号墳も柳沢一男は非対称に復元している。

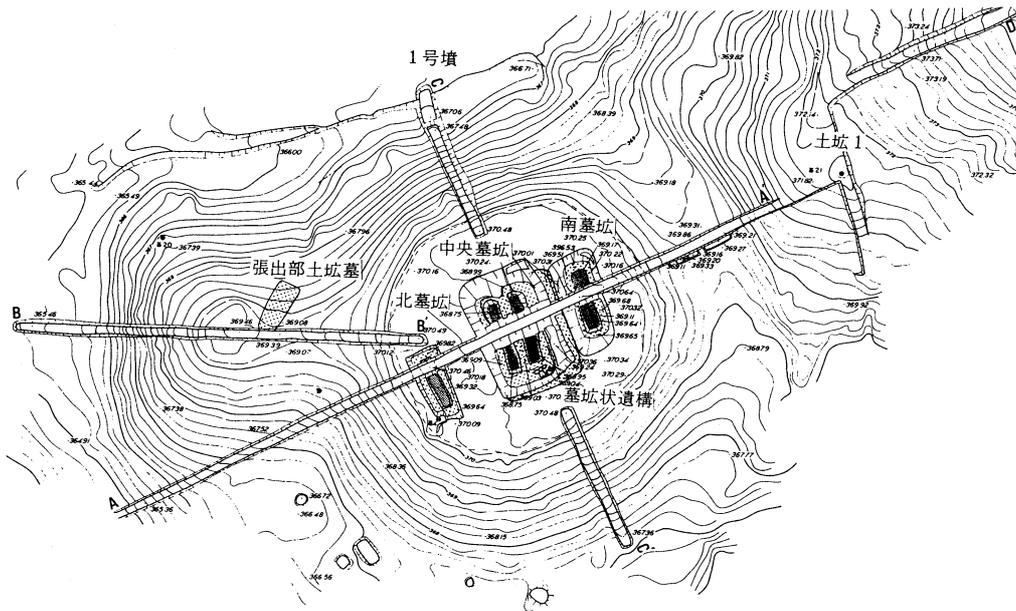
すでに近藤義郎は前方部の左右非対称について、全国的に分布すること、古墳時代各時期にまたがることを指摘している。近藤はこうした工夫は前方部隅角の傾斜角を緩くするためであること、墳丘への上り下りに便ならしめるための処置であったとしている。前方部非対称の古墳立地を検討してみると、傾斜角が緩やかになるのは台地の縁辺側ではなく、台地内側の場合が多い。従って近藤の仮説も妥当性をもっていると言えよう。なお、近藤は宮崎県下の古墳では特に新田原59号墳の図を示して説明している。

もう一点はDean Goodmanが生目古墳群7号墳を探查し、タイム・スライス図をアニメーションにすると後円部は方形でその一隅から前方部が延びる形に見えろと言出した。そこで実測図を検討すると、確かにそのようにも見える。その目でほかの古墳を検討すると西都原56号墳、下北方古墳群13号墳も同様の墳形に見える。奈良県宇陀郡見田・大沢1号墳は全面発掘された古墳であり、一隅突出型前方後方墳として最初に確認されたものである。置田は奈良県天理市マバカ古墳も同様の墳形ではないかと推定している。

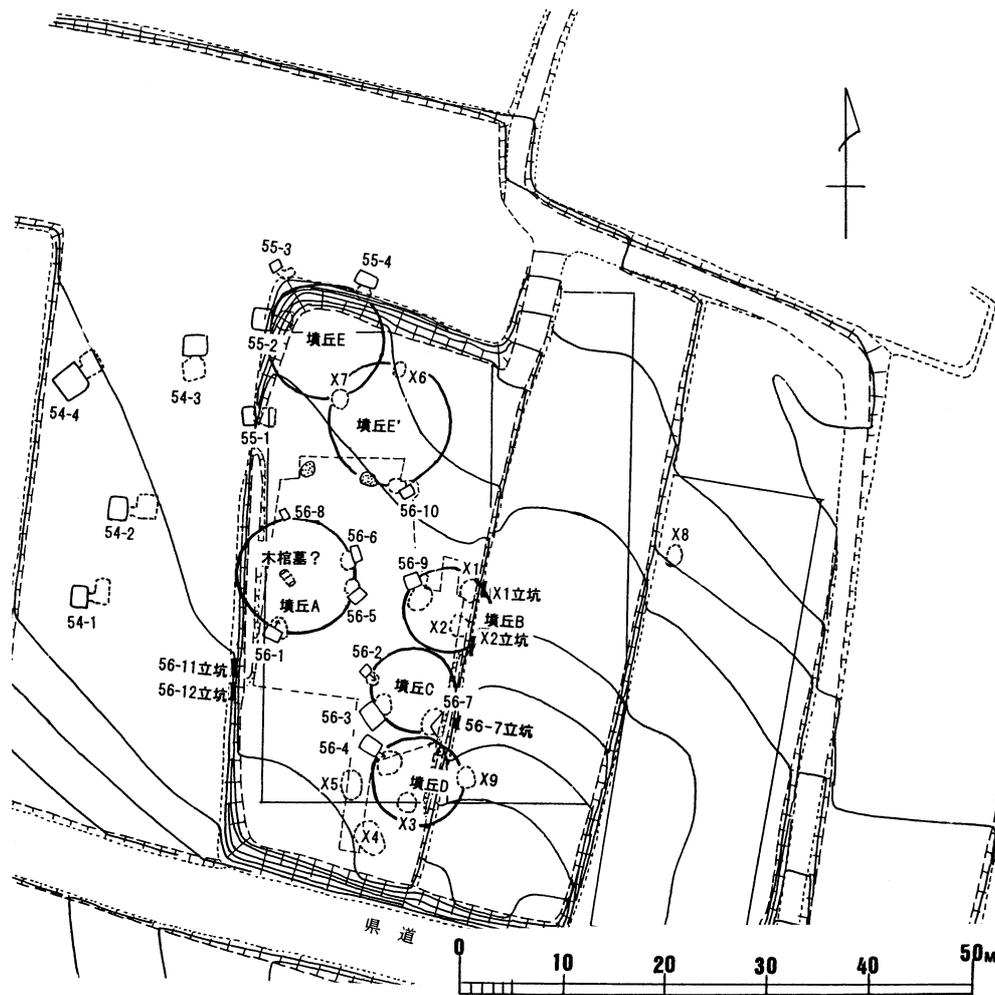
最後に、南九州には前方後方墳が確認されていない。他の地域では数が少ないけれど、前方後方墳は前方後円と混在すること、畿内を除けば前方後方墳が古く、次の段階に前方後円墳が出現するのが一般的である。南九州に前方後方墳が存在しないことが異例である。そこで持田古墳群48号墳は前方後方墳の可能性があるのでないかと提案したい。もちろん最終的には発掘調査で確定するまではなにも言えないが、日向の古墳は大和地域の古墳となんら変わることがないのではないだろうか。

おわりに

横穴墓と墳丘に関しては、第4回九州前方後円墳研究会大会『九州の横穴墓と地下式横穴墓』2001年によって執筆した。すべての原典に当たっていない点をお詫びする。また、東憲章氏には貴重な時間を割いてご教示いただいた。厚く感謝の意を表したい。また、日向国前方後円墳の再検討は『宮崎県史叢書 宮崎県前方後円墳集成』に追うところが多い。日向国の考古学に門外漢の筆者が思いつきを羅列したようなところがある。しかし、違った視点で見る必要もあるのではないかと。地元研究者には失礼があればお許し頂きたい。



挿図20 奈良県宇陀郡見田・大沢1号墳の一隅突出型前方後方墳 縮図300分の1
 (『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第44冊 1982年より)



挿図21 高原町日守地下(竪坑)式横穴墓と墳丘の復元図
 (『墳丘のない墓の探査研究』2001年より)

英文要旨

Excavation of 6th 7th Century A.D. Cemeteries in Miyazaki, Kyusyu

Masaaki Okita, Walter Edwards and Hisao Kuwabara

Department of Archaeology and Department of Japanese Studies, Tenri University,
1050 Somanouchi cho, Tenri, Nara 632 Japan

Dean Goodman

Geophysical Archaeometry Laboratory, University of Miami Japan Division, Otsubu 39 1,
Nakajima Machi, Ishikawa 929 22 Japan

Tombs with horizontally opening burial chambers cut directly into natural strata were built in Japan from the 5th to 8th centuries A.D. Two types are widely recognized: those dug into a slope and approached by a level or upward inclining pathway, and subterranean chambers approached by a shaft cut vertically into the ground. A third type, also subterranean but approached by a path cut on a downward incline, has been recently discovered in Miyazaki; two examples investigated with GPR and conventional excavation are reported here. For both, the approach path had completely filled in, leaving no surface indication of the tombs' existence.

Saitobaru Tomb Cluster Site. A site discovered through conventional excavation to contain subterranean tombs was chosen for tests of prospection techniques. In July August 1995, radar and electric resistivity surveys were conducted on the area previously excavated, with good radar results obtained. An adjacent area was then investigated with GPR, yielding abnormalities judged to represent two subterranean chambers leading from a single approach path (Tomb No.7).

In December 1995, one quarter of the approach to Tomb No.7 was excavated, revealing entrances to two burial chambers (X 1, X 2). A 10 cm hole was bored through the fill of each entrance, and a miniature video camera inserted. Skeletal remains, and late 6th century Sue and Haji pottery, were visible in X 1. Temperature and humidity measured markedly higher inside than at the surface.

X 1 was excavated in September 1996. Judging from skeletal remains and grave goods, it appears that three or more individuals were buried in the 2.55 × 1.91 m chamber. In addition to conventional recording and recovery of remains, samples were taken for analysis of fatty acids, plant opal, pollen, and intestinal parasites. Among the results obtained thus far, residues of DHA (docosahexaenoic acid) and EHA (icosapentaenoic acid)

in the pottery suggest that fish or shellfish was included among the funerary offerings. Plant opal of bamboo and other grasses indicate that stalks of such plants were perhaps used to line the floor of the chamber.

Airabaru Tomb Cluster Site. Subterranean features were clearly revealed through a GPR survey conducted by Dean Goodman ; subsequent excavation by the local Board or Education indicated the presence of seven tombs, approached by paths cut on a downward incline.

A conventional excavation of the burial chamber of Tomb No.6 was conducted by our team in July 1996. Prior to opening the lone sealed chamber, a miniature video camera and fiberscope were inserted for visual observation. These revealed that the chamber walls and ceiling were covered with red pigment, subsequently analyzed as an iron oxide. The floor was also seen to be divided by low balks into two roughly symmetrical areas serving as alcoves for burials, running along the left and right side walls of the chamber, and separated by a narrow central corridor. In subsequent investigation, the chamber measured 2.39 × 2.12 m. In addition to skeletal remains, more than 1,000 glass beads were recovered among the funerary goods. Samples were also taken for the same types of analysis as mentioned above for Saitobaru. Results received to Date show plant opal remains similar to Saitobaru, with minute rice traces perhaps due to the use of straw rope in transporting materials to the site.

(Abstract prepared by Edwards)

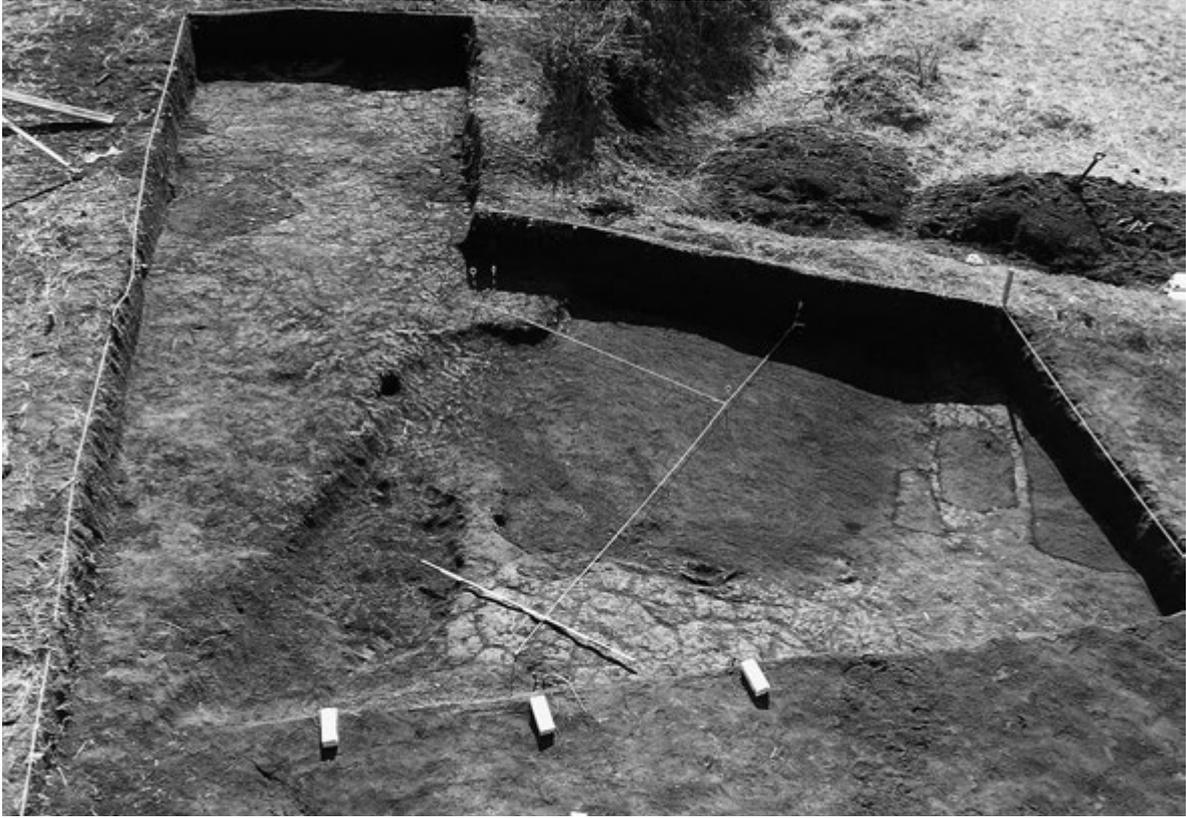


酒元ノ上地区7号横穴墓 墓室(×1)の羨門検出状況

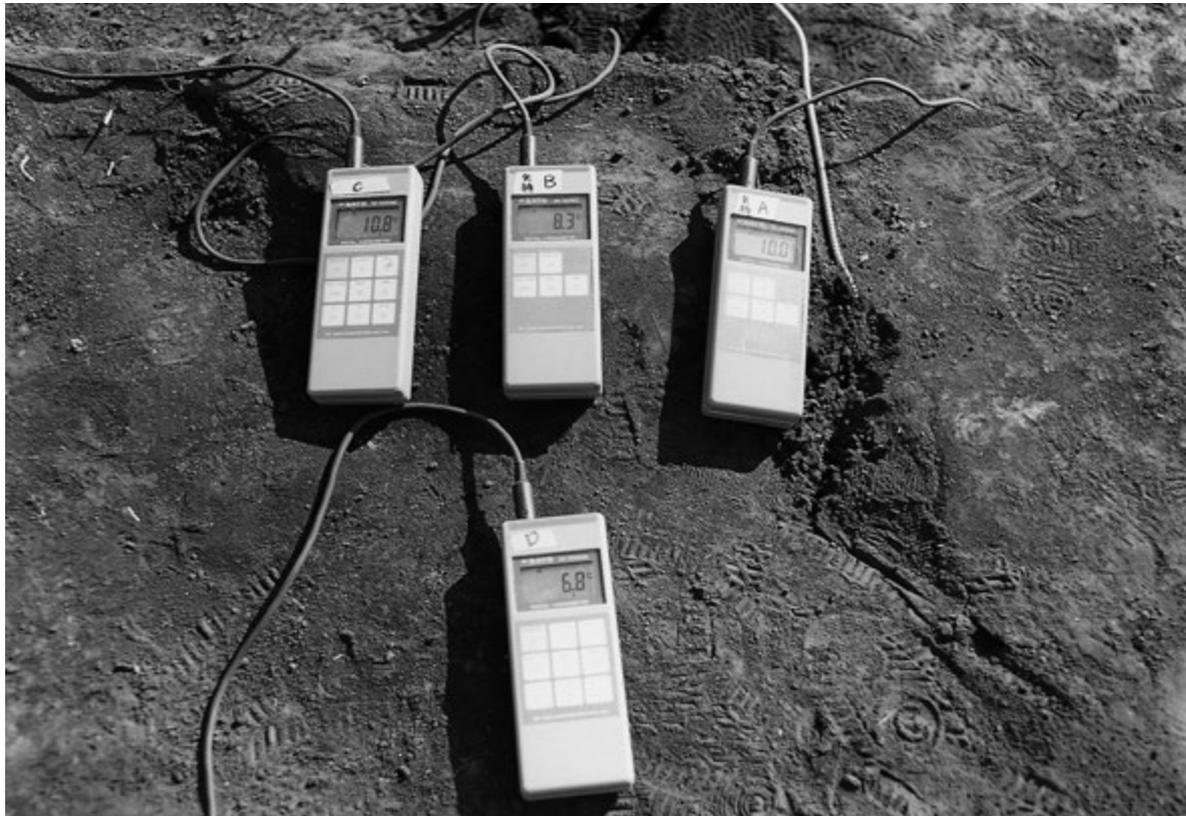


酒元ノ上地区7号横穴墓 墓室(×2)の羨門検出状況

図版 2



酒元ノ上地区 7号横穴墓 墓道検出状況と発掘区全景



酒元ノ上地区 7号横穴墓の調査で行った温度計による探査の機器



酒元ノ上地区7号横穴墓 墓道埋土の掘り込み作業



酒元ノ上地区7号横穴墓 墓道断面

図版 4



酒元ノ上地区7号横穴墓 墓道4分の1完掘状況



酒元ノ上地区7号横穴墓 墓道内の埋土推積状況



酒元ノ上地区7号横穴墓 墓道内の埋土推積状況



酒元ノ上地区7号横穴墓 墓道断面

図版 6



酒元ノ上地区 7号横穴墓 墓道から出土した土師器坏



酒元ノ上地区 7号横穴墓 墓道内埋土の断面図作成状況



酒元ノ上地区7号横穴墓 墓道完掘状況 墓道から羨門をみる



酒元ノ上地区7号横穴墓 羨道からみた玄室床面と奥壁



酒元ノ上地区7号横穴墓 玄室床面の石敷きと人骨の検出状況



酒元ノ上地区7号横穴墓 玄室床面の石敷きと遺物の検出状況



酒元ノ上地区7号横穴墓 玄室床面の土器と人骨の検出状況



酒元ノ上地区7号横穴墓 玄室奥壁沿いに寄せられた人骨



酒元ノ上地区7号横穴墓 石敷き上で検出された須恵器高坏と土師器坏



酒元ノ上地区7号横穴墓 石敷き上で検出された須恵器高坏と土師器坏



酒元ノ上地区7号横穴墓 玄室奥壁沿いで検出された須恵器坏



酒元ノ上地区7号横穴墓 玄室奥壁右隅の石敷きと壁面（壁面には工具痕が残る）



酒元ノ上地区7号横穴墓 玄室右側壁沿いの須恵器坏と土師器坏



酒元ノ上地区7号横穴墓 玄室右側壁沿いの須恵器坏と土師器坏



酒元ノ上地区7号横穴墓 玄室床面の石敷きと遺物の検出状況



酒元ノ上地区7号横穴墓 玄室床面の土師器坏と耳環の検出状況



酒元ノ上地区7号横穴墓 玄室奥壁左隅で検出された下顎骨

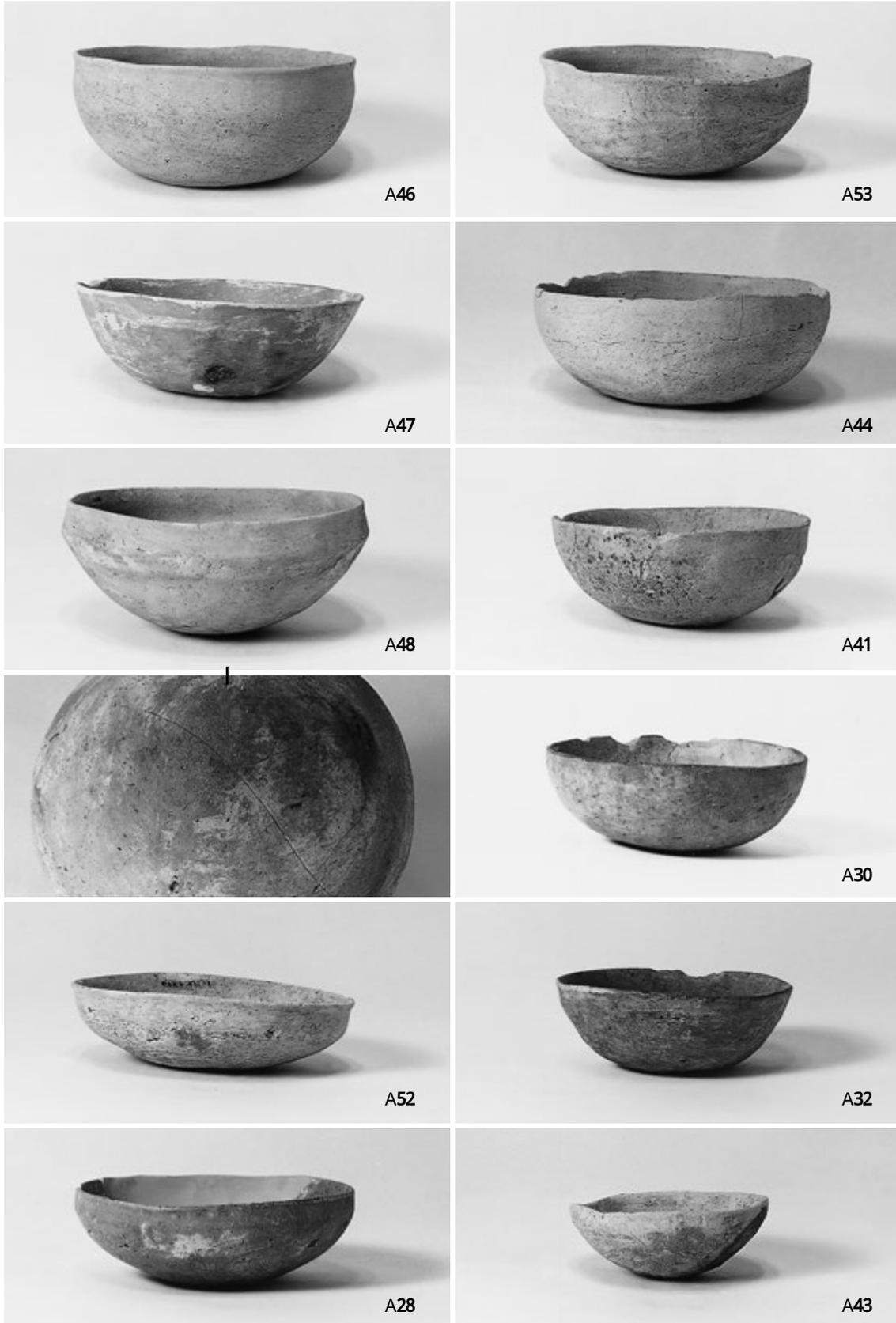


酒元ノ上地区7号横穴墓 玄門付近に集中する土器の検出状況

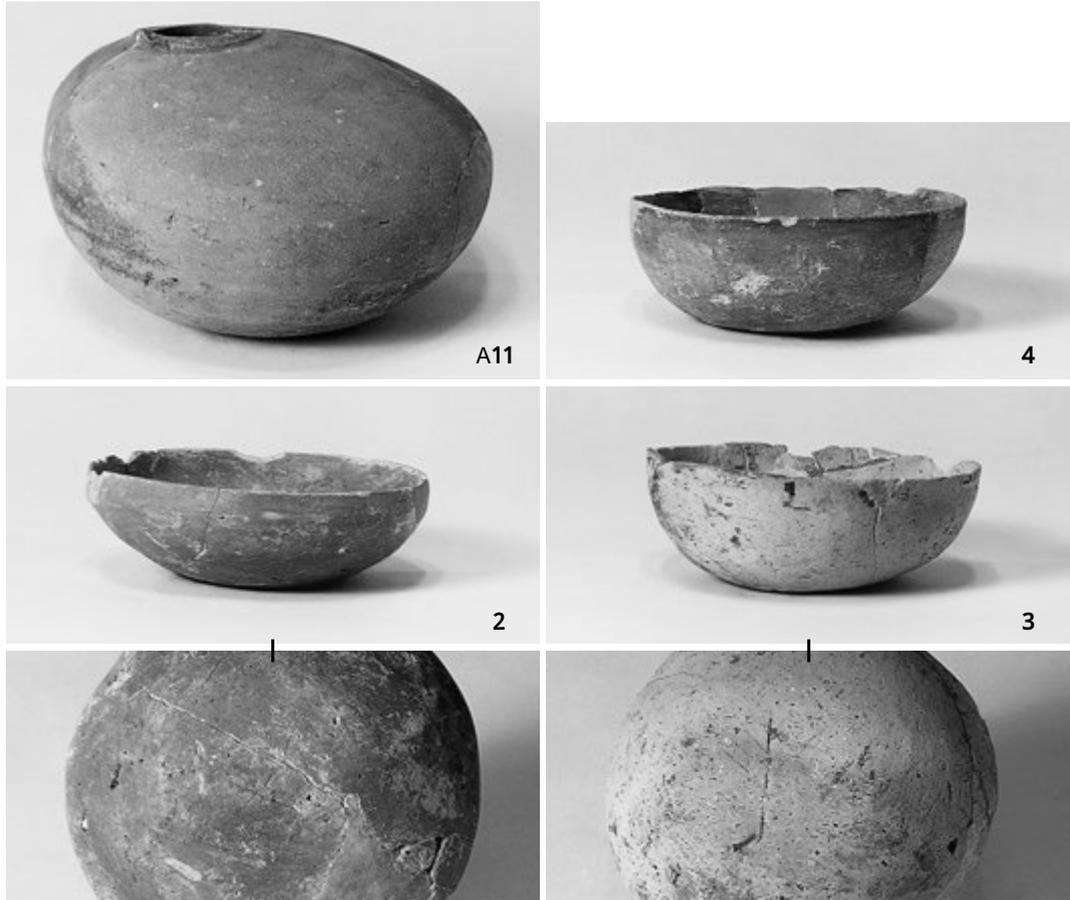


酒元ノ上地区7号横穴墓 玄室出土の須恵器

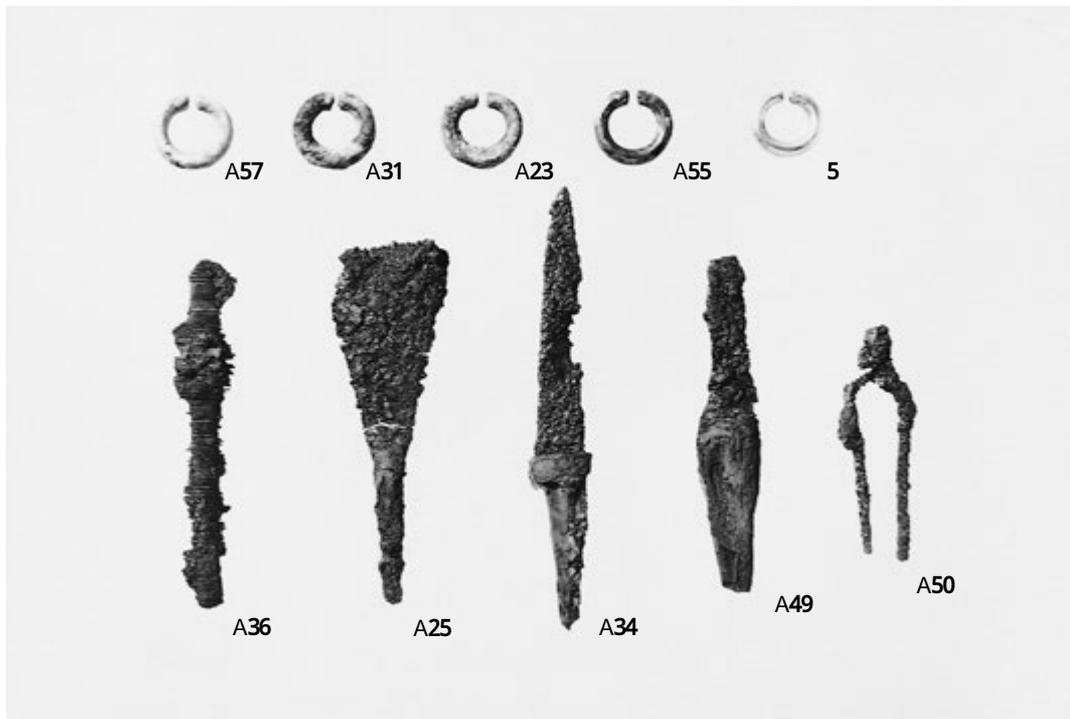
図版16



酒元ノ上地区7号横穴墓 玄室出土の土師器



酒元ノ上地区7号横穴墓 墓道出土の土器



酒元ノ上地区7号横穴墓 玄室等出土の耳環・鉄製品（5は表面採集、他は玄室出土）

宮崎県立西都原考古博物館研究紀要 第2号執筆者紹介

(五十音順)

柄本久子	<i>ENOMOTO Hisako</i>
宮崎県立西都原考古博物館 整理専門員	
岡本武憲	<i>OKAMOTO Takenori</i>
日南市教育委員会社会教育課 課長補佐	
置田雅昭	<i>OKITA Masaaki</i>
天理大学教授	
高橋由香	<i>TAKAHASHI Yuka</i>
宮崎県立西都原考古博物館 整理専門員	
竹中正巳	<i>TAKENAKA Masami</i>
鹿児島女子短期大学 助教授	
鶴田裕一	<i>TSURUDA Yuichi</i>
宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及班 主査	
二宮満夫	<i>NINOMIYA Mitsuo</i>
宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及班 主事	
東憲章	<i>HIGASHI Noriaki</i>
宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及班 主査	
北郷泰道	<i>HONGO Hiromichi</i>
宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及班 主幹	

宮崎県立西都原考古博物館研究紀要 執筆要項（投稿規定）

1 執筆者

宮崎県立西都原考古博物館職員及び共同研究者とする。当館からの依頼原稿についてはこの限りではない。

2 執筆内容

研究論文：掲載30頁以内	研究ノート：掲載16頁以内
調査報告：掲載30頁以内	研究動向：掲載10頁以内
資料紹介：掲載8頁以内	その他、編集担当者が適当と認めたもの

3 原稿

(1) 締切

- ・1月末日とする。

(2) 提出

- ・原則としてFD（フロッピーディスク）とし、プリントアウト原稿を添付し、使用したソフト名を明記すること。
- ・図、表、写真は、本文とは別に作成し、拡大率・挿入位置を明記する。

4 執筆要項

(1) 体裁

- ・A4版、横組、40字×36行、MS明朝体基本
- ・版面（図、表、写真）はキャプションを含め縦24.5cm、横16.5cm

(2) 表記

- ・文字は、資料的なもの以外は原則として、現代仮名遣いで新字体とする。
- ・度量衡単位は、cm、kg、m²のように記号を、数量は算用数字（半角）を使用する。
- ・年号は原則として西暦で表記し、和年号が必要な場合は（ ）で併記する。

例：2006（平成18）年

(3) 註、引用、参考文献

- ・本文末尾に一括記載する。
- ・註は、右肩付き終わり小括弧で表記する。

例： 1)

註 1)

2)

- ・引用、参考文献は、著者名、発行年、「論文名」、『書名』、巻号数、発行所、頁数を明記する。

(4) その他

- ・別刷が必要な場合は、執筆者負担とする。
- ・PDFファイルを作成する。（配布用にプリント可能）

2006年3月31日

宮崎県立西都原考古博物館研究紀要 第2号

BULLETIN

Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture

Vol.2

編集・発行：宮崎県立西都原考古博物館

〒881-0005 宮崎県西都市大字三宅字西都原西5670番

TEL：0983-41-0041 FAX：0983-41-0051

印刷：株式会社 天理時報社

〒632-0083 奈良県天理市稲葉町80番地

TEL：0743-64-1411 FAX：0743-64-1283



Saitobaru Archaeological Museum
of Miyazaki Prefecture

